

大宰府史跡

昭和52年度発掘調査概報



昭和53年3月

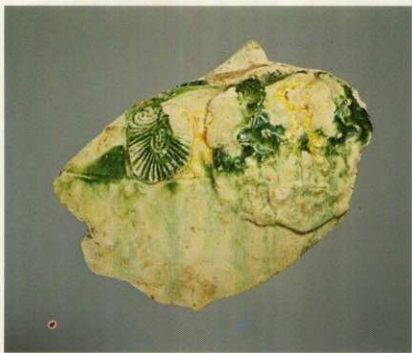
九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和52年度発掘調査概報

昭和53年3月

九州歴史資料館



唐三彩三足壺（鏤）片

序

昭和43年度の調査概報を刊行して以来、今年は昭和52年度の概報をまとめ、第10冊目として世に送ることになった。

かえりみれば、昭和43年福岡県で大宰府発掘調査を実施することとなり、調査指導委員会が発足、同年7月第1回の委員会の会議が開催され、その方針にもとづいて調査が行われてきた。指導委員会は、その後毎年会議を持ち、その決定にもとづいて、調査が実施されるという体制をとっている。最初県の調査は県教育委員会文化課の担当で行われていたが、昭和47年に九州歴史資料館が新たに開設され、調査事業もここに移された。資料館では調査課が主体となって調査にあたり、概報も資料館の名で継刊されている。館ではもちろん大宰府の史跡調査は重要な仕事の一つであるから、昭和53年の秋には調査10周年を記念して館の総力をあげて特別展示を予定している。この催しは単に10年間の調査回顧だけでなくこれを契機として新しい活動の展望としたい考えである。

思えば調査をとりまく諸々の条件は、調査開始の頃と大きな変化をしてきた。第一に欣ぶべきことは地元の理解と協力である。調査成否の源泉は一にこの協力にかかっている。今後とも協力体制を大切にしてゆきたいものである。

概報刊行にあたり、10周年の感慨の一端をのべ、概報の序引とする。

昭和53年3月31日

九州歴史資料館館長 鏡 山 猛

例 言

1. 本概報は昭和52年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし第44次調査、第46次調査は昭和51年度の調査であるが、未報告であるため合わせて報告する。また昭和52年度事業のうち第54次調査、第33次調査補足(2)については現在継続中ないし整理中であるため次回にゆずる。

なお、本年度実施した第52次調査は遺構、遺物が存しなかったので報告から除外した。

2. 実測図作製にあたっては、第49次調査は従来使用していた南門と中門との間に設けた原点杭を使用した。他は昨年度から使用している国土調査法第Ⅱ座標系を基準とした。
3. 検出遺構については九州芸術工科大学の沢村仁教授の指導を得た。
4. 陶磁器の分類、土器の計測値については、別図、別表にまとめた。
5. 条坊の表示については、鏡山猛「大宰府都城の研究」に準拠した。
6. 本概報の執筆、編集は当館調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、高橋章および調査補助員の山本信夫、沢田康夫、真玉秀樹、伊藤かの子、井上トシ子がこれにあたった。写真撮影は学芸第一課の石丸洋による。

目 次

序	
I 調查計画	1
II 調査経過	2
1 概 要	2
2 第44次調査	4
検出遺構	4
出土遺物	5
小 結	11
3 第45次調査	12
検出遺構	12
出土遺物	21
小 結	89
4 第46次調査	93
検出遺構	93
出土遺物	94
小 結	103
5 第47次調査	104
検出遺構	104
出土遺物	106
小 結	108
6 第48次調査	110
検出遺構	110
小 結	110
7 第49次調査	111
検出遺構	111
出土遺物	113
小 結	115
8 第50次調査	118
検出遺構	118
出土遺物	119
小 結	119

9	第51次調査	120
	検出遺構	120
	出土遺物	120
10	第53次調査	121
	検出遺構	122
	出土遺物	123
	小 結	123

表 目 次

第1表	第44次調査銅銭出土遺構・層位対照表	11
表2表	第45次調査検出井戸一覧表	19
第3表	第45次調査銅銭出土遺構・層位対照表	88

挿 図 目 次

第1図	大宰府史跡発掘調査地域図	折り込み
第2図	第44次調査遺構配置図	折り込み
第3図	S K 1150出土土器・磁器実測図	5
第4図	S K 1154出土土器・磁器実測図	7
第5図	S E 1165出土土器・陶器実測図	8
第6図	その他の遺構出土陶磁器実測図	10
第7図	銅銭拓影	11
第8図	第45次調査層位模式図	12
第9図	第45次調査遺構配置図	折り込み
第10図	土管実測図	13
第11図	井戸実測図	18
第12図	井戸実測図	折り込み
第13図	茶灰土層出土土器実測図	22
第14図	黄褐土層出土土器実測図(1)	24
第15図	黄褐土層出土土器・陶磁器実測図(2)	25
第16図	黒褐土層出土土器実測図(1)	28
第17図	黒褐土層出土磁器実測図(2)	29
第18図	S D 1230出土土器実測図(1)	32
第19図	S D 1230出土陶磁器実測図(2)	33

第20図	S D1300上層出土土器・磁器実測図	37
第21図	S D1300下層出土土器・磁器実測図	39
第22図	唐三彩実測図	40
第23図	S X1200 (フシヨク土) 出土土器実測図(1)	42
第24図	S X1200 (フシヨク土) 出土土器・磁器実測図(2)	43
第25図	S X1200 (フシヨク土) 出土陶磁器実測図(3)	45
第26図	S X1200 (フシヨク土) 出土陶器実測図(4)	47
第27図	井戸出土土器・陶磁器実測図	49
第28図	S E1189出土土器・陶磁器実測図	51
第29図	井戸出土土器実測図	52
第30図	井戸出土土器・磁器実測図	55
第31図	S E1320出土土器実測図	56
第32図	井戸・土壇出土土器・磁器実測図	58
第33図	S K1204出土土器・陶磁器実測図	60
第34図	S K1212出土土器・磁器実測図	62
第35図	S K1213出土土器実測図	64
第36図	S K1270出土土器実測図	64
第37図	S K1280上層出土土器実測図(1)	66
第38図	S K1280上層出土土器実測図(2)	67
第39図	S K1280下層出土土器実測図(3)	68
第40図	S K1280下層出土土器実測図(4)	69
第41図	S K1285出土土器実測図	70
第42図	その他遺構出土磁器実測図	72
第43図	安南陶器実測図	73
第44図	その他の陶磁器実測図	74
第45図	第45次調査 出土軒先瓦拓影(1)	76
第46図	第45次調査 出土軒丸瓦拓影(Ⅱ-①)	77
第47図	第45次調査 出土軒平瓦拓影(Ⅱ-②)	78
第48図	第45次調査 出土軒先瓦(Ⅲ)	79
第49図	第45次調査 出土文字瓦拓影	81
第50図	へら書き文字拓影(1/2)	81
第51図	硯実測図	82
第52図	石製品実測図	84

第53図	木製品実測図	85
第54図	銅鏡拓影(2/3)	87
第55図	鑄造関係遺物実測図	89
第56図	第46次調査遺構配置図	折り込み
第57図	SE1340井戸実測図	93
第58図	SE1340出土土器実測図(1)	95
第59図	SE1340出土土器実測図(2)	96
第60図	SD1330〔I〕出土土器実測図(1)	97
第61図	SD1330〔I〕出土土器実測図(2)	98
第62図	SD1330〔I〕出土土器実測図(3)	99
第63図	SD1330〔I〕出土土器・磁器実測図(4)	100
第64図	SD1330〔II〕出土土器・磁器実測図	102
第65図	第47次調査遺構配置図	104
第66図	掘立建物・土壇出土土器・陶磁器実測図	105
第67図	SK1360出土土器実測図	107
第68図	第48次調査遺構配置図	110
第69図	第49次調査遺構配置図	112
第70図	SB010階段実測図	113
第71図	第49次調査出土軒先瓦拓影	114
第72図	SB1370瓦積基壇使用文字瓦拓影	115
第73図	政庁跡建物配置模式図	116
第74図	第50次調査周辺地形図	118
第75図	石帯実測図	119
第76図	第51次調査遺構配置図	120
第77図	第51次調査出土越州窯系青磁碗実測図	120
第78図	第53次調査周辺地形図	121
第79図	来木1号墳石室実測図	122
第80図	来木9号窯跡・不明土壇実測図	122
第81図	来木9号窯跡出土平瓦拓影(1/3)	123

図版目次

卷首図版 唐三彩

- 図版 1 第44次調査区全景
図版 2 (上) S D1330溝・(下) S D1175溝
図版 3 第45次調査区全景
図版 4 S D1230溝
図版 5 (上) S D1230溝・S A1235櫛列・(下) S X1240礎石遺構
図版 6 (上) S D1300溝・(下) S D1300暗渠遺構部拡大
図版 7 S D1300溝
図版 8 S B1250掘立柱建物全景
図版 9 S E1181井戸
図版10 (上) S E1183・S E1184井戸・(中) S E1184井戸・(下) S E1183井戸
図版11 (上) S E1188・S E1189井戸・(中) S E1188井戸・(下) S E1189井戸
図版12 (上) S E1195井戸・(下) S E1182井戸
図版13 (上) S E1190井戸・(下) S E1197井戸
図版14 (上) S E1198井戸・(下) S E1199井戸
図版15 (上) S K1213土城・(下) 下層遺構
図版16 S X1245瓦列・S X1310土管
図版17 第46次調査区全景
図版18 (上) S E1340井戸・(下) S D1330溝
図版19 (上) 第47次調査区全景・(下) S B1350掘立柱建物
図版20 (上) S E1365井戸・(下) 第48次調査区全景
図版21 第49次調査 (S B010礎石建物)
図版22 S B1370礎石建物
図版23 (上) S B1370礎石建物根石・(下) S X1371
図版24 (上) 第50次調査区全景・(下) S D1373溝
図版25 (上) 第51次調査区全景・(下) 第52次調査区全景
図版26 第53次調査 (上) 第1号墳全景・(下) 第1号墳石室
図版27 (上) 瓦窯跡・土城・(下) 瓦窯跡
図版28 第44次調査 S K1154出土土器・磁器
図版29 第44次調査 出土土器・陶磁器
図版30 第45次調査 S K1280出土土器

- 図版31 第45次調査 S K 1280出土墨書土器
- 図版32 第45次調査 S K 1285出土土器・墨書土器
- 図版33 第45次調査 S E 1189・S K 1205・S D 1300・S E 1320出土土器
- 図版34 第45次調査 S K 1213・S D 1230出土土器
- 図版35 第45次調査 S D 1230出土磁器
- 図版36 第45次調査 S X 1200出土土器・陶磁器
- 図版37 第45次調査 S X 1200出土磁器
- 図版38 第45次調査 S K 1212出土磁器
- 図版39 第45次調査 各遺構出土陶磁器
- 図版40 第45次調査 各遺構出土磁器
- 図版41 第45次調査 黒褐色土層出土磁器
- 図版42 第46次調査 S E 1340出土土器・磁器
- 図版43 第46次調査 S D 1330出土土器・磁器
- 図版44 第47次調査 出土土器・磁器
- 図版45 第45次調査 出土軒先瓦Ⅰ
- 図版46 第45次調査 出土軒先瓦Ⅱ
- 図版47 第45次調査 出土軒先瓦Ⅲ
- 図版48 第45次調査 出土軒先瓦Ⅳおよび土管
- 図版49 第49次調査 出土軒先瓦
- 図版50 第45次調査 出土硯
- 図版51 第45次調査 出土各種石製品
- 図版52 第45次調査 出土木製品
- 図版53 第45次調査 出土懸仏・台座・鑄型・埴塼・襷羽口



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

I 調査計画

昭和52年度の発掘調査は、これまでの年次計画の終了にともない、新たに5カ年計画を立案し、調査を実施することとした。昭和43年に発掘調査開始以来調査の重点は政庁地区（都府楼跡）に置かれてきたが、昭和51年度に行った後殿地区の北門の調査によって、この地区については、その概略について把握することができたといえる。したがって新5カ年計画では調査の重点を観世音寺の伽藍配置および条坊遺構の確認に置くことにした。

観世音寺については、昭和32年に福山敏男氏らによって講堂、中門および回廊の調査が行われている。しかしながら調査の結果は後世の削平がはげしく、各々の遺構の状況については必ずしも明確にはされていない。この観世音寺については幸いにも延喜五年（905）の観世音寺資財帳が残されており、それには伽藍の各建物についての丈尺が記されており、大体の伽藍配置を知ることができる。

昭和51年度に第43次調査として講堂背後の僧房推定地について調査を行ったところ、遺構の残存状況は決して良好な方ではなかったが、かろうじて残っている根石から僧房についての知見を得ることができた。

一方、条坊跡については、当該地域が未指定地であるため、調査については制約を受ける面も多いが、これまで機会あるごとに積極的に調査を実施してきた。しかしながらこれまでの調査で検出した遺構は平安後期から鎌倉期にかけてのもので、大宰府条坊制に関連するものとは考え難く、この条坊跡確認についての調査は大きな課題として残されている。

また、この条坊跡については最近開発がはげしく、太宰府町によって史跡指定地前面の県道山家～関屋線と御笠川にはさまれた地域について区画整理事業が計画されるにいたり、早急な調査を必要とする地域でもある。

この新5カ年計画については、昭和52年5月20日、21日の両日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議において討議された。

討議の結果、後殿地区についても少し調査を行う必要があるのではないかの意見も出されたが、新5カ年計画には区画整理事業などの緊急を要する面も含まれており、計画どおり調査を行うことで了承された。

昭和52年度の発掘調査予定地は下記のとおりである。

	調査地域	調査期間	調査面積	備考
1	大字観世音寺字今道50, 52	4月～7月	1000㎡	観世音寺東辺部
2	大字太宰府字鉄石2547-1	7月～8月	1000㎡	左郭八条二坊推定地
3	大字観世音寺字今道63-2, 65	11月～2月	2000㎡	観世音寺前面
4	大字観世音寺字堂廻182	9月～10月	255㎡	観世音寺回廊西南隅

まず、(1)については昭和51年度に調査を行う予定であったが、諸般の事情から今年度に繰り越したものである。この調査の主眼は観世音寺の東面築地についての遺構を確認することにある。(2)は推定左郭八条二坊推定地にあたり、かつてこの隣地において鏡山猛氏によって調査が行われており、遺物の出土が伝えられている地域である。(3)は観世音寺南門の前面にあたり、条坊制との関係をさぐるものとするものである。(4)は延喜五年の観世音寺資材帳による回廊の西南隅にあたり、この位置には現在観世音寺の庫裡が建っている。この庫裡は江戸時代の文化年間に建てられたもので老朽化がはげしく、改築の現状変更申請書が提出されたため、その事前調査を行なうものである。

註1 九州歴史資料館「大宰府史跡」—昭和51年度発掘調査概報—1977

註2 鏡山猛「奈良期の集落遺構について」『史淵』第66輯 1955

II 調査経過

1. 概要

昭和52年度の調査は、まず51年度に予定していた観世音寺東辺部の調査が今年度に繰り越されたため、まずこの調査を第45次として4月10日から開始した。この調査は東面築地を確認することを主眼としたが、調査の結果調査対象地域は平安期から鎌倉期にかけて大きく変貌しており、目的とした築地は検出することができなかった。しかしながら3層にわたる遺構を確認し、上層からは多量の土師器とともに「元□二年」の紀年銘を有する卒塔婆を検出し、中世土器師の編年研究に貴重な資料を得ることができた。また、平安後期に埋没したと考えられるSD1300からは、我国では4例目の唐三彩の鏡の破片を検出するなど成果を上げることができた。この唐三彩がいかなる経路によってもたらされたかは論議の分かれるところであるが、いずれにしても今後の観世音寺研究に貴重な資料をもたらしたといえる。この45次調査は先にも述べたごとく、遺構が3層に重なっており、調査期間は当初の予定よりも大幅におくれ、10月7日に終了した。

今年度の特徴は一時減少していた史跡指定地内の現状変更申請にともなう調査および指定外における発掘調査届にかかわる事前の調査が多かったことで、4月から8月にかけてこれらの調査にかなりの労力を費した。第47、48、51、52、53次の5カ所はいずれも事前の調査である。第49次の政庁後殿の調査は、昭和52年度に計画している大宰府政庁復原模型製作にあたってその基本資料を得る目的で行ったものであり、時間的な制約から調査の方法も最小限度の範囲内におさえることとした。幸いにも、後殿基壇の東南隅を検出することができたとともに、梁行は正殿と柱列を合わせていることが明らかとなり、短期間のうちに調査を終了することができ

た。次に第50次調査は、筑陽高等学校体育館建設地として発掘届が提出され、当該地が鼓石道跡としてかつて遺構、遺物の出土が確認されている地域の隣接地であるところから、年度計画に組み込むこととしたものである。調査の方法としては、まずトレンチによって遺構の状況を確認した上で拡張することとして、東西、南北にトレンチを設定し調査を行ったところ、顕著な遺構は存在しないことを確認したためこの段階で調査を打ち切った。

52年度後半期は観世音寺前面についての調査を行う予定であったが、調査計画の項でものべたごとく、史跡指定地前面の観世地区区画整理事業がにわかにより具体化し、53年度から事業に着手されることとなった。この区画整理事業対象地域のうち特に政庁前面の字不丁、日吉、大楠については、これまでに行った調査において検出した遺構からみて政庁と同様の性格を有している可能性が大きく、この地域の遺構の状況を早急に把握することが急務となった。このため計画を変更し、この地域に密接な関連性を有していると考えられる蔵司の調査を第54次調査として行うこととした。この調査は現在継続中であるが、これまでに花崗岩の自然石を用いた暗渠が2基検出されこの地域に築地が東西に走っていることが明らかとなった。

また、観世音寺回廊西南隅の調査については、現在の庫裡が江戸時代の文化年間に建てられたものであり、民家として貴重なものであるところから、その取り扱いについて早急な結論が得られなかったため、53年度に繰り越すこととした。

昭和51年度の発掘調査地を地区別に記すと下記の表のとおりである。

調査回数	調査地区	調査面積	調査期間	備 考
第44次	6AYE-A	265㎡	77. 1. 11~77. 2. 8	左 郭 九 条 八 坊
45	6KKZ-B	1570	77. 4. 10~77. 10. 7	観世音寺東辺部
46	6AYI-B	280	77. 2. 21~77. 3. 26	左 郭 八 条 三 坊
47	6KKZ-C	105	77. 4. 5~77. 4. 24	字 御 所 ノ 内
48	6KKZ-A	20	77. 4. 25~77. 4. 27	観世音寺西辺部
49	6AYT-B	76	77. 5. 11~77. 5. 30	政 庁 後 殿
50	6AYI-C	150	77. 7. 25~77. 8. 6	左郭八条二坊・三坊
51		138	77. 8. 1~77. 8. 11	運賃軍団印出土隣接地
52	6AYT-B	20	77. 8. 16~77. 8. 19	政庁北辺部
53		15	77. 8. 24~77. 8. 27	柴木瓦窯跡
54	6AYT-B	(1135)	77. 11. 29~	蔵 司

2. 第44次調査 (左郭九条八坊)

本次調査は住宅建設に伴う事前の緊急調査である。福岡南バイパス関係の発掘調査で、古代末から中世にかけての遺構を検出しており、その遺構の広がりを把握することはもとより、未だ確認できていない条坊遺構の検出を目的として調査を実施した。地番は太宰府町大字太宰府字泉水2747-1・4である。調査期間は昭和52年1月11日から同年2月9日までである。

検出遺構

対象地域の層序は表土・床土を除去すると、遺構面である黄色土層、青色砂層を覆って暗灰質土層と暗灰砂質土層がある。この暗灰粘質土層と暗灰砂質土層からは近世陶磁器片が出土したが、それに掘り込んだ遺構は存しなかった。検出した遺構は上・下二層に分かれるが大部分は上層である黄色土層に掘り込まれた井戸、土壇、溝、ピット群である。

井 戸

SE1155 竹タガの出土状態から、桶様の井戸枠および、円形の目玉を使用した井戸跡であることが推知できた。掘り方は $2.4 \times (2.4 + \alpha)$ m、深さ 0.7m を測り、更に、その中に径約 0.6m、深さ約 0.3m の小孔を掘削している。

SE1165 上面径約 0.7m、深さ 0.8m を測る円形の掘り方を有している。竹タガの出土から井戸とした遺構である。中央凹みがないことから、桶様の井戸枠のみで構成された井戸と考えられる。

土 壇

SK1150 径約 1.1m を測る小土壇で、土器を一括して比較的多く出土した。

SK1153 平面 1.7×2.5 m、深さ 0.4m を測り、隅丸長方形を呈した土壇である。SE1155 から切られている。

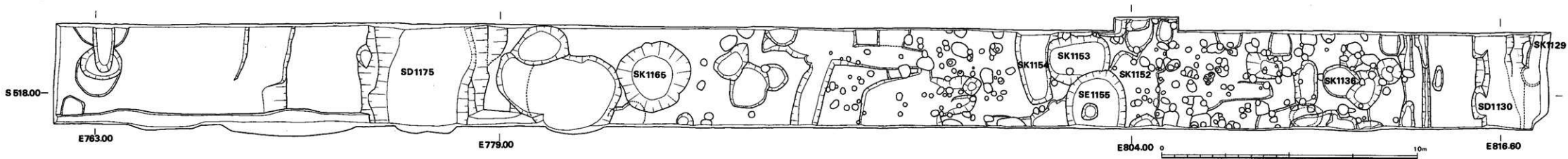
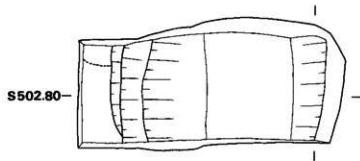
SK1154 東側の SK1153 から土壇東辺の一部を切られた略長方形の土壇で、平面は $1.2 \times (2.7 + \alpha)$ m、深さ 0.35m を測る。この壇中から、完形の土師器が何段にも積み重なって検出された。

SK1171 深さ約 0.7m を測り、長円形の掘り方を有する比較的大きな土壇である。中から多くの土師器が出土した。

溝

SD1130 発掘区東端部で検出した南北溝で、幅約 2.0m、深さ 0.3~0.4m を測り、発掘区内では南から北へ傾斜している。

SD1175 トレンチ西半部で検出し、幅約 5.8m、深さ約 0.8m の南北溝である。溝の方向を知るために、北側に第2トレンチを設定した。その結果、南から北へ南北方向に走る溝である



第2回 第44次調査遺構配置図

ことが判明した。

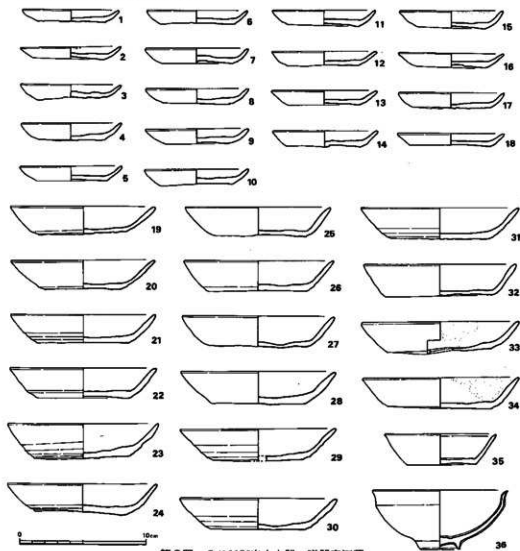
出土遺物

本次調査で出土した遺物は、中世土師器がもっとも多く、次いで輸入陶磁器、それに国産陶器、木器、漆器、石製品および銅銭である。

土 器

S K 1150出土土器（第3図、別表、図版29）

土師器と輸入陶磁器が出土した。



第3図 S K 1150出土土器・磁器実測図

土 師 器

全て承切りである。

小皿 a (1~18) 口径7.8~8.4cm、器高0.9~1.4cmを測る。2, 5は内面に油煙が付着していることから、灯火器に使用したと考えられる。

杯 a (19~34) 口径11.5~12.5cm、器高2.2~2.8cmを測る。33, 34は油煙の付着から灯火器に使用されたと考えられる。33は底部中央に内底から外底に穴を穿っている。

白 磁

白磁は図示した皿1点のみが出土した。

皿 (35) 口径9.0cm、器高2.5cm、底径5.3cmを測る口禿の皿である。若干空色をおびた白色の釉を口縁部を除いて全面施釉している。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完器である。白磁皿Ⅸ-1・bにあたる。

青 磁

龍泉窯系のもものでは、碗Ⅰ-1が1点、Ⅰ-5が3点、小碗Ⅲ-3が1点、同安窯系青磁皿Ⅰ-1が1点出土した。

小碗 (36) 口縁部を屈曲させた特異な器型で、大宰府の発掘調査では初めての出土である。口径10.7cm、器高4.8cm、高台径3.0cmを測る。若干黄色味をおびた緑色の釉が高台先端を除いて比較的厚く施こされている。

SK1154出土土器 (第4図、別表、図版28)

土壌中から一括して多量の土師器が出土した。土師器と共に少数ながら陶磁器が出土した。

土 師 器

全て承切りである。

小皿 (1~20) 口径と器高の比により、1~15と16~20に分けられ、前者は口径7.2~8.4cm、器高1.4~1.7cm、後者は口径7.6~8.1cm、器高0.9~1.3cmを測る。全体に器高は高いが、これは底部を厚く切り離しているためと考えられる。

杯 a (21~47) 口径10.7~12.4cm、器高2.3~3.0cmを測る。小皿と同様に体部と底部との境が明瞭で、シャープさを有し、また底部の器肉は厚いものが多く出土している。

白 磁

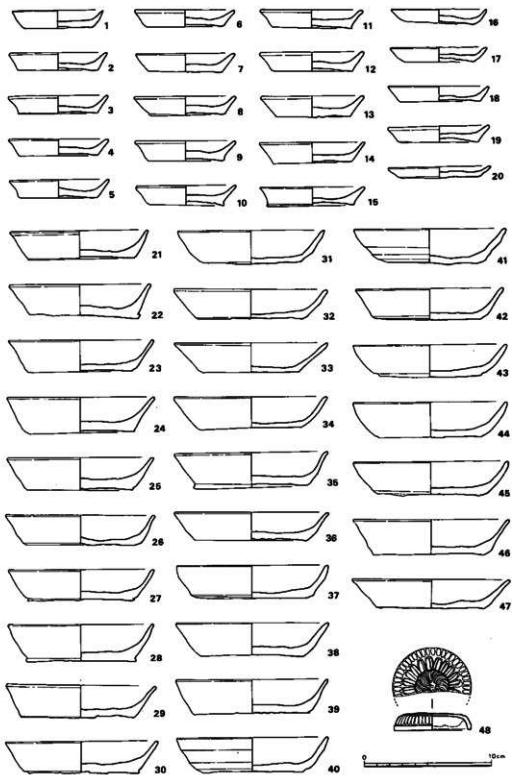
碗Ⅱ類1点、皿Ⅸ類7点、壺1点、不明が1点出土した。

青 磁

龍泉窯系青磁と同安窯系の青磁が出土した。前者は、碗Ⅰ類が7点(1が1点、5が4点、不明2点)、杯Ⅲ-4・bが1点、後者は、皿が2点(1・bが1点、不明1点)出土した。

青 白 磁

青白磁は合子が1点出土したのみである。



第4圖 SK1154出土土器・磁器実測図

合子(48)型造りの合子で、花文様が施こされている。釉色は、外面は緑味が比較的強い空色を呈し、内天井部は空色を呈する。軸には小さな貫入が若干入っている。

SE1165出土土器 (第5図、別表、図版29)

土 師 器

全て糸切りである。

皿a (1・2) 口径 8.8cm、器高1.2~1.3cmを測る

杯a (3~5) 口径11.6~12.3cm、器高2.5~2.8cmを測る。

杯c (6) 径の小さい方を脚として図示したが、つくり方は逆で、まず、口径12.3cm、器高2.2cmの杯aをつくり、それを逆にして底部に粘土を巻きつけて径15.6cmを測る杯部を形成している。脚の端部が使用により摩滅し、若干平坦な面をなし、また、杯部口縁端部は丸いことから、製作順とは逆に図示したように使用したと考えられる。

白 磁

碗Ⅳ類1点、Ⅴ類1点、Ⅸ類1点、皿Ⅸ類1点および不明1点が出土した。

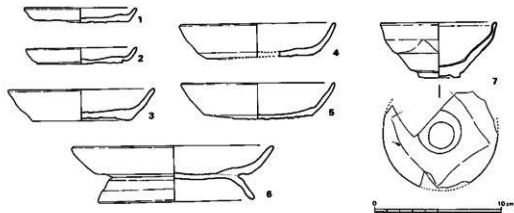
青 磁

龍泉窯系碗Ⅰ類8点(1が3点、5が4点、不明1点)、碗Ⅲ-1、2点、杯Ⅲ-3・b、1点、同安窯系皿Ⅰ-1・a、1点が出土した。

陶 器

黄釉陶器、黒釉陶器が出土した。

黒釉陶器(7) いわゆる天目碗といわれているもので、口径9.0cm、器高4.3cm、底径3.2cmを測る。施釉の方法は、いわゆる浸し掛けで、底部を手で持ち、器体を斜めに釉中につけ、それを4回繰り返している。釉薬を厚く掛けたためか、器肉中に水分が浸透し、その部分が赤茶色に発色している。



第5図 SE1165出土土器・陶器実測図

その他の遺構出土陶磁器（第6図、図版29）

前述した以外に陶磁器が数多く出土したが、そのうち主要なものに限り報告する。

白磁（1～6）

椀（5） 体部下位以下に施釉しないⅨ-2の見込内底に花文をスタンプしたものである。空色をおびた白色の釉で、文様部分は回んでいるため特に空色が強い。胎土は灰白色を呈し、極細の黒粒が多く入っている。

皿（1～4・6） 1～4は全てⅨ-1の皿である。1は口径9.8cm、器高2.0cmを測る。体部下位を強く削り、屈曲をつくっている。淡灰白色の胎土に灰白色の釉をかけている。2は口径10.2cm、器高1.8cmを測り、緑味をおびた白濁色の釉をかけている。胎土は灰白色を呈する。3は口径10.3cm、器高2.8cmを測る。若干極細の黒粒を含み、灰白色の胎に草色を帯びた釉をかけている。4は小片のため法量については正確ではないが、復元すると口径12.2cm、器高2.7cmを測る。灰白色の胎に黄色味を帯びた白灰色の釉をかけている。内外面とも釉には貫入が多く入っている。6は高台付の皿で体部上半は欠失している。白色の胎に純白に近い釉をかけている。皿のⅢ類に近似した高台を有するが、釉色や形態からⅢ類の範疇には入らない。

青磁（7～14）

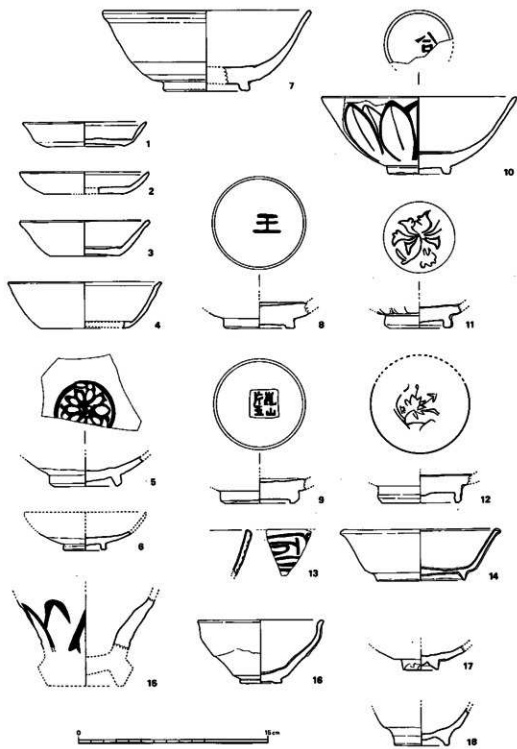
ここで報告する青磁は全て龍泉窯系のものである。

椀（7～12） 7は口径16.6cm、器高6.4cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、釉は淡黄緑色を呈する。Ⅰ-1に分類される。8はⅠ-1の見込みに「王」のスタンプを押したもので、淡灰色の胎に緑黄色の釉をかけている。9は8と同様にⅠ-1に属する椀の見込みに「寛山片玉」の吉祥句を押印している。高台の疊付に重ね焼きの目跡が高台部で3箇所見られるが、復元すると4箇所になる。淡灰色の胎土に若干黄色味をおびた緑色を呈する。10はⅠ-5・dに属するもので、内底見込みに「合」の文字スタンプを押している。胎土は暗灰色を呈し、釉色は淡青緑色を呈する。11は体部外面に蓮弁を削出し、内底に花文を押しており、Ⅰ-5・cに属する。灰白色の胎に空色の強い緑味をおびた釉をかけている。12はⅠ-7に近い形態の高台を有しているが、釉色はⅠ-1～6に近い発色をしている。内底見込みに花文を押している。暗灰色の胎に空色をおびた緑色の釉をかけている。13はⅡ類に属すると考えられるもので、体部外面に幾可学文様を彫り込んでいる。灰白色の胎に黄緑色の釉をかけている。

杯（14） 口径12.6cm、器高4.1cmで口縁部に釉溜りのための凹みを小さく造り出したもので、Ⅲ-1・aに属する。灰白色の胎に空色の釉をかけている。内外面とも全体に貫入が入っている。

青白磁（15）

蓋の体部下位の破片で、灰色の胎に空色の釉をかけている。残存部には片彫りで蓮弁を描いている。



第6図 その他の遺構出土陶磁器実測図

黒釉陶器 (16)

口径 9.8cm、器高 5.0cm、高台径 3.6cmを測る碗である。灰黒色を呈する胎に黒色の釉を浸しをかけている。内外の釉表に茶色および空色の細い禾目が多くはいつている。

その他の陶磁器 (17・18)

17は灰色の粗い胎土に黄緑色の釉がかけられた青磁の小碗である。高台の削り出しは荒く、疊付の幅が一定していない。龍泉系の釉色に近いが高台の削り出し方が従来の分類の範疇にはいない。18は朝鮮製の小碗で、暗灰色の精良な胎土に黄色味をおびたわずみ色の釉を全面にかけている。焼成は比較的良好で高台疊付には積む焼きの跡があるが内底にはない。

銅銭 (第7図、第1表)

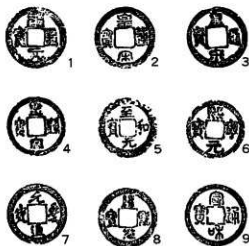
総数13点出土した。内2点の判読は困難である。

番号	銭種	初鑄年代	出土遺構・層位	番号	銭種	初鑄年代	出土遺構・層位
1	開元通宝	621	暗灰砂質土層	7	元豊通宝	1078	暗灰砂質土層
2	皇宋通宝	1039	暗灰砂質土層	8	紹聖元宝	1094	S K 1151
3	皇宋通宝	1039	暗灰砂質土層	9	宣和通宝	1119	S K 1154
4	皇宋通宝	1039	暗灰砂質土層		聖宋元宝	1101	暗灰粘質土層
5	至和元宝	1054	S K 1151		洪武通宝	1368	暗灰粘質土層
6	熙寧元宝	1068	暗灰粘質土層				

第1表 銅銭出土遺構・層位対照表

小 結

発掘を行った部分は政庁中軸線から東へ約767mから826mの範囲で、大部分が左郭7坊に属し一部6坊にかかる地域である。条坊遺構の検出を主眼としたが、検出した南北溝SD1175、SD1130は出土遺物からみて条坊とは関係のないものと考えられる。従って目的とした条坊遺構は検出できなかった。検出した遺構は2層に分かれるが、上層遺構は13世紀後半代を中心に14世紀におよんでいると考えられるが、下層遺構は土壌の一部を検出したのみであり、遺構の広がりおよび年代については詳らかにしなかつた。



第7図 銅銭拓影

3. 第45次調査

第45次調査は現観世音寺宝蔵の東、推定東面築地跡を含む一帯の約1,570㎡について行なった。昨年度の観世音寺僧房跡の発掘調査（第43次調査）に引き続いての、観世音寺伽藍解明を目的とした調査であった。中心堂宇を取り囲む築地については『延喜五年観世音寺資財帳』に「□陸拾伍丈板葺」「南長伍拾柒丈瓦葺」「西長陸拾伍丈瓦葺」「北長五十七丈」とその規模が記されており、おおよそを推定しうる。また南面築地の一部は現在土畷状に遺存しており、築地の西北隅でその一部と思われる版築の痕跡が第21次調査時に検出されている。しかしまだ築地の規模を推定する十分な根拠はなく、中心堂宇を圍繞する築地規模を明確化するために、とりあえず東面築地の一部を調査の対象とした。地番は大字観世音寺字今道50・52番地である。

調査は昭和52年4月10日に着手した。5月17日には遺構の検出にはいったが、当初目的とした東面築地を検出するにはいたらず、中世の遺構多数を調査した。8月1日には遺構の検出を終え、写真撮影、遺構実測を行なった。実測に併行して井戸・土壇などの補足調査を行なった後、9月8日から下層遺構の検出にはいった。その際9月17日に溝中より唐三彩片の出土という予想外の成果があったが、全体として下層遺構の遺存は良くなかった。こうして10月7日には調査を終了し、つづいて10月一杯埋め戻しを行ない発掘区を原状に復舊した。

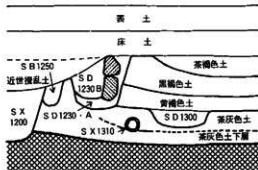
検出遺構

第45次調査では掘立柱建物1、溝2、欄2、池状遺構1、井戸23基、土壇・柱穴多数などを検出した。これらの遺構は大略3層を数える遺構面から掘り込まれている。これらの遺構で比較的残存状態が良く、また中心をなすのは上層の黒褐色土層面から掘り込まれたものであった。多数の柱穴の大部分はその面からの掘り込みであったが、建物を復原しうる例を欠く。

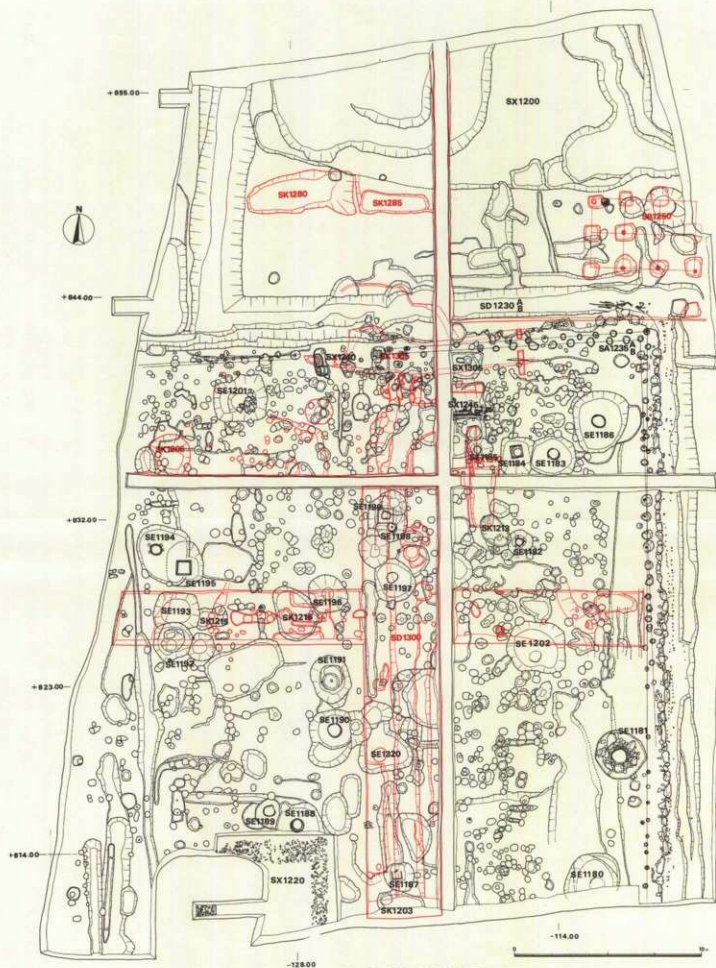
以下、大略3層に区別しうる遺構面の概略を述べ、つぎにこれらのうちの主な遺構について述べることにする。

土層の関係（第8図）

調査区域南半部の土層は上層から①表土、②床土、③茶褐色土、④黒褐色土、⑤黄褐色土、⑥茶灰色土上層、⑦茶灰色土下層、⑧青灰色砂質土（地山：自然堆積土）の順に堆積していたが、北半部ではこのように整然とした層序をなさず、近世以降の攪乱土の下はただちに⑤や⑥、⑧の層に達する。



第8図 層位模式図



第9圖 第45次調査遺構配置圖

遺構は④、⑤、⑥の各層上面で検出された。これを順にⅢ期、Ⅱ期、Ⅰ期と仮称することにした。④、⑤、⑥の各層の形成された時期、及びⅢ、Ⅱ、Ⅰ期の遺構の時期についての詳細は後述するとおりであるが、⑥は8世紀中頃に近い時期、⑤は12世紀前半頃、④は12世紀中頃にそれぞれに形成されている。第Ⅰ期は8世紀中頃～12世紀初頭、第Ⅱ期は12世紀前半～中頃、第Ⅲ期は12世紀中頃～14世紀にわたる遺構と考えられる。

第Ⅰ期以前の遺構

茶灰色土上層の上面から掘りこむものではなく、さらに下の層が遺構面になると思われるものである。この時期の遺構の検出範囲は狭く、確実な遺構面は検出できなかった。

土 窠

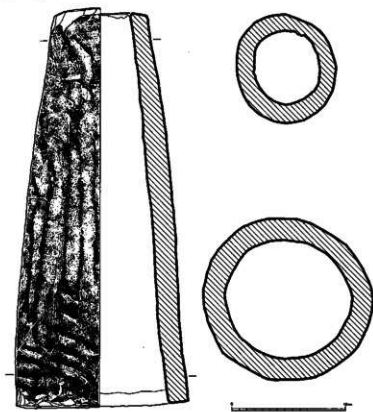
SK1270 SD1300より古く、その溝底の地山面で検出された土窠である。上面径約1.2mの円形に近いプランをなし、深さは約0.7mである。土師器の杯1点が溝底近くで出土した。

暗 渠 施 設

SX1310 (第10図、図版27・48)

茶灰色土中途の層(茶灰色土下層)から、円筒形の土管を凹凸組み合せて3個体連なって南北に検出した。その全長は1.37mで、北側が凹部となり、水は南へ流れるように配置されているが、検出範囲が狭少であるためにこの暗渠にどのような施設が伴うものか明らかにならなかった。

土管はほぼ同一の長さであるが、1本のみ他と比べやや短かく、長さ49.2cmを測る。他2本は全長51.6cm、凹部外径22.7cm、内径17.3cm、凸部外径12.4cm、



第10図 土管実測図

内径 7.5cm、厚さは中央部で最も厚く約3cmを測る。外面は一部縄目痕が認められ、他はすべて凸部から凹部にかけてヘラケズリ成形を行っている。又凹部から約20cmからは斜方向のケズリを行っている。内面は布目が認められ、内面凹部に幅約2～3cmで全周をヘラ調整している。小口面は凹凸部ともにヘラ切りである。胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は比較的堅い。色調は黒色のものが2と灰色のものが1である。

これらは内面に布目の合せ痕が認められることから丸瓦、しかも行基瓦の製作技法を用いていると思われるが、成形が極めて丁寧であるため粘土板か粘土紐巻上げであるかは判りにくい。ただ行基瓦に比べ長さが長く厚い。又内面凸部から15cmの幅内に比較的浅い凹凸が認められる。したがって一担模骨で丸瓦を製作し、さらに粘土を巻き上げて継ぎ足し、成形したものと考えられる。しかしそれらの痕跡は3本共わかりにくい。

土管の類例は、基肄城跡、四王寺経塚で発見されている。基肄城のものは長さ49.3cmで、今回出土土管に類している。又、現在粕屋郡宇美町宇美八幡宮蔵の土管は四王寺第三経塚出土とされているが定かでない。それは色調・胎土・焼成はもとより、全長51cm、凹部外径20.4cm、凸部外径13.0cmの法量、技法・成形法が今回出土土管と酷似している。四王寺経塚の1つの銅製円筒経筒に元永元年（1118）十月二十日の銘があり、土管がこの時期に伴って出土したとすれば下限時期をおさえる手がかりとはなる。今回出土のものは技法ないし形状から古い要素が認められ、さらに茶灰色土から伴出した土師器等はその器型・法量等からみて奈良時代中頃を中心とするものが出土している。その同一層に検出したことと技法・形態などから少くとも下限時期を奈良時代中頃に考えられる。

第I期の遺構

茶灰色土上層から掘りこむもので、溝1条、井戸2基、土壇2基、その他が検出された。

溝

SD1300 観世音寺推定中軸線から東へ約102mのところを位置する南北方向の溝である。幅1.8～2.3m、深さ0.3～0.5mで、長さ約29m分を検出したが、さらに発掘区の南側へ延びている。溝の北側端部は発掘区の中央よりやや北側へ寄ったところで始まる。ここには0.4～0.7mほどの大きさの花崗岩の自然石で、南北方向の暗渠施設が構築されている。長さ1.2m、内部の幅0.5m、深さ0.5mほどの暗渠施設から取り入れられた水は溝を南に流れるように企画されている。暗渠施設の北側には溝は延びず、幅2m、長さ10m以上におよぶ東西方向のたまりS X1315となっており、後出する溝SD1230と一部重複している。溝は素掘りと思われ、護岸を行った形跡はまったくみられなかった。

SD1300から一点の唐三彩片を検出した。暗渠施設の出口から南に約22mほどの溝の西壁に接するような箇所から出土している。この溝に何らかの機会に偶然流れこんだ状態を示していた。

井 戸

SE1195 SE1194に先行する井戸で、SE1194の構築時に一部を破壊されている。掘方は幅約1.8mの隅丸方形である。内部の井戸枠は板材を組み合わせた方形で、下端の残存は良かった。すなわち最下端に一辺77cm、幅18cmの横板を方形に組んで置き、その外側を厚さ5cmほどの横棧でとめる。棧の端部には凹凸をつけ組み合わせる。その外側に幅19cm、長さ107cm、厚さ2.5cmほどの板を縦に4枚並べ、側板としている。I類Bに分類される。

土 壌

SK1205 上面径約2.5mの円形プランで、深さは約0.8mである。

SK1280 茶灰土層から切り込まれた長楕円形の土壌である。長径5.8m、短径2.0m、深さ0.3mを測る。埋土は3層からなる。上層は粘質土のもので、中間に灰層がみられ、下層は植物性の腐植土からなっている。これからは須恵器の椀・杯・皿・甕が多量に出土した。特にこれらに墨書が多く見られた事は注目される。また、共存遺物として、鶴羽口、埴塙がある。

SK1285 SK1280と同様に茶灰土層から切り込まれた土壌で、SK1280の東側に位置している。埋土の状況もSK1280と同じであった。長楕円形を呈し、長径3.0m、短径1.0m、深さ0.3mを測る。出土した遺物はSK1280より少ないが、同時に存在したものである。

掘立柱建物

SB1250 発掘区の北東隅において検出した総柱2×3間の東西棟のものである。これは更に東へ延びる可能性も考えられるが、道路下の為、今回は確認できなかった。柱間寸法は桁行梁行とも190cm(約6.3尺)等間のものである。

西側から第3柱列の中央部の柱穴については後世の擾乱の為検出できなかった。検出した柱穴の4個には柱根が残存していた。最も残存のよかったものは径30cmを計る。柱穴の掘方は方形(1m前後)のものである。この建物の時期については後世の擾乱のため明確ではない。

第Ⅱ期の遺構

黄褐色土層から掘り込むもので、井戸5基、土壌、多数のビットなどが検出された。

井 戸

SE1182 掘方のプランは径約1.3mの不正円形で、深さは0.95mである。底に曲物が1段残っている。曲物は二重につくられており、内径37cm、深さ20cmである。

SE1185 径1m、深さ0.95mの円形掘方の底に曲物が1段おかれている。上端内径38cmであるが、深さは22cmまでしか検出していない。

SE1187 一辺1.17m前後、深さ1.37mの掘方を検出した。その内側の井戸枠はすでに存在せず、わずかに横棧1段だけが残存していた。一辺の幅47cmをはかる。底部には一面に瓦片が敷かれていた。

土 壌

SK1203 南半は調査区外になり、未発掘であるため規模、プランは明確ではない。上面は

東西約2.5mで、深さは約0.6mである。

SK1204 上面は長軸約2.9mの不整形プランをなし、深さは約0.2mである。

SK1215 上面は2.6×2.0mの隅丸長方形プランをなし、深さは約0.2mである。

SE1194より古く、SE1195より新しい。

その他の遺構

SX1245は東西方向に並ぶ瓦列の遺構である。瓦列は約20cmの間隔を置いて4列並んでいる。1列に10枚前後の瓦を側面を上にし、平瓦の凸面を表にしている。それを斜めに立てた形で埋め込んでいる。使用された瓦は斜格子目文の叩きで、格子の細かいものから、大きいものまである。時期的に最も新しいものとして、その中の数枚には11世紀代に考えられるものがあり、層位的にSD1300を整地した層（黄褐色土層）を切り込んでいることから、その時期を12世紀代のものとしてさしつかえなかろう。遺構の性格については定かでない。

第Ⅱ期の遺構

黒褐色土層から掘り込むもので、溝1条、櫛列2条、池状遺構1所、井戸16基、土壌、多数のピットなどが検出された。

溝

SD1230A・B 調査区の北西部では北から南へ流れながらいったん直角に東方へ向きを変え、北東部で再度南へ直角に屈折して調査区の東辺近くを南へ流れる溝で、その流路は鋸形になる。溝の幅は約3mで、東西の長さは約25mあり、南北の長さは46m以上におよぶ。この溝は古期のものA、新期のものBの2時期に分かれる。Aは素掘りのものであるが、調査区の東辺部に近い南北方向の溝底では、ほぼ2列に溝と平行して並ぶ枕列がつけられていることから、しがらみを組んでいたと考えられる。Bは溝の内側（溝の東西方向では南壁、南北方向では西壁側）を花崗岩の自然石によって護岸したものである。ただし東西方向ではこの護岸に使った石は殆んど抜き取られている。溝を境としてその内外の区域では遺構の密集度が顕著に異なっている。溝より内側の区域にはこれに接した櫛列SA1235A・Bに囲まれて多数のピットなどが検出されたが、外側の区域にはピットが少数しか検出されず、とくに北側は池状のたまりSX1200とSD1230は時期が近接して存在した可能性も考えられる。

櫛列

SA1235A・B SD1230溝の内側で、溝に沿って櫛を2列検出した。これは新旧2時期あり、東西・南北の方向において若干ずれている。

新期の櫛（SA1235・B）は、東西方向では旧期の櫛（SA1235・A）より約40cm内側に入っており、南北方向では交叉している。この2つの櫛は、東西約25m、南北約30mを検出した。これは東西・南北連続するもので、西と南へ更に延びるものと考えられる。

柱間の寸法は必ずしも等距離ではないが、ほぼ90cm（3尺）、等間のものである。旧期のもの

には比較的柱根が残存しており、柱穴は径30～40cm、深さ30cmのものである。

この溝及び槽で囲まれた内側と外側では後世の攪乱があるものの遺構の状況が異なり、この槽によって、内、外を画していたものと考えられる。

時期的にはSD 1230に伴うものと考えられる。

礎石遺構

SX 1240 A・B SA 1235に伴うものとして、SA 1235の東西櫓の中央よりやや西よりで礎石2個を検出した。礎石は槽と同方向に並び、槽を連結する形となっている。

礎石も2時期あり、SA 1235 A・Bにそれぞれ伴うものと考えられる。

礎石間の距離は3m（10尺）をはかる。

遺構の性格は明らかでないが、簡単な門的なものと考えられる。四脚の可能性も考えられるが、北側については検出できなかった。

SX 1240 Aの東側の礎石は抜き取られ、根石のみが残存していた。

池状遺構

SX 1200 発掘区の北端部で池状の落ち込みを検出した。この落ち込みは東西24mの広範囲のもので、これは北・東へ更に広がっており、最も深い所で遺構面より約50cmをはかる。埋土は植物性の腐植土の推積である。

これからは多量の土師器（杯・皿）、陶磁器、瓦類、それに木製品が出土した。特に木製の卒塔婆が出土し、そのうちの一点に「元□二年」銘のものが出土した。上層をカットされた茶灰色土から掘り込むが、出土遺物からみてⅢ期に属する。

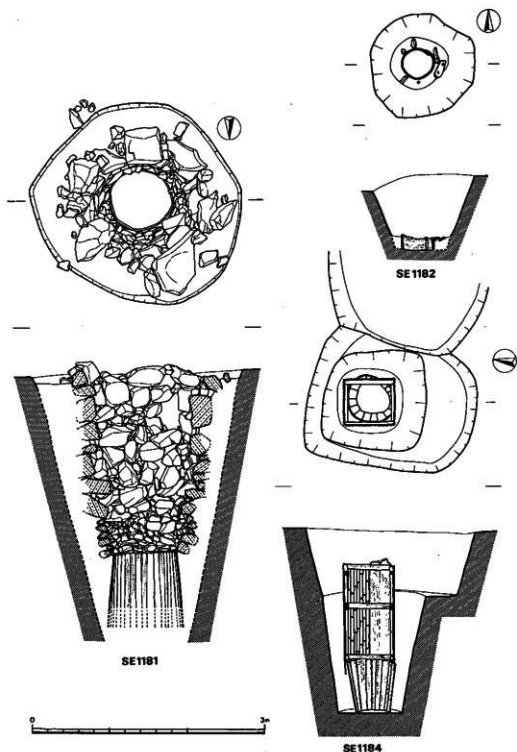
井戸

以下にのべる井戸のうちSE 1194、1199、1201の三基は上層をカットされた黄褐色土の面から掘り込み、Ⅱ、Ⅲいずれの期のものとも考えられるが、出土遺物などからみてⅢ期に属する。

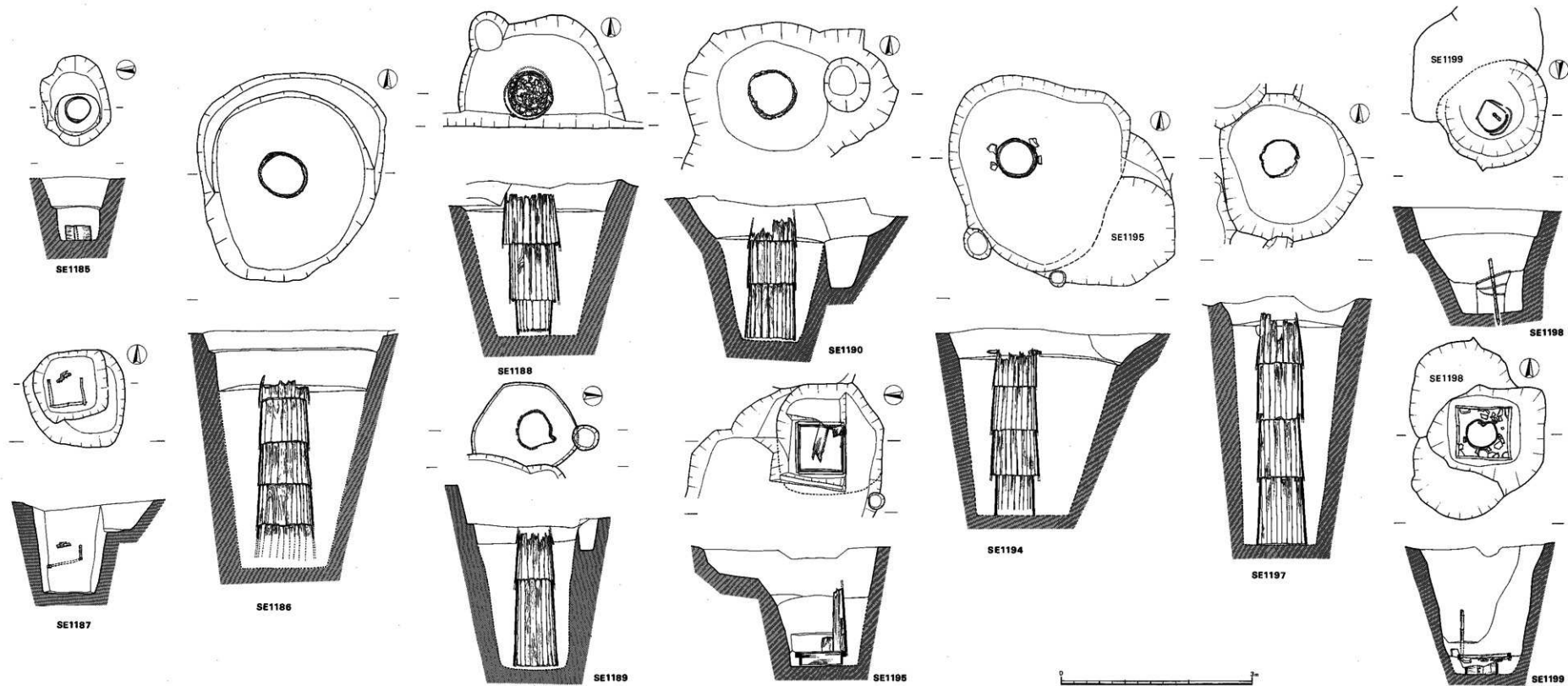
SE 1181 掘方は直径2.8mの円形プランをなす。井戸枠の上部は10～90cmほどの大きさの石を組み合わせてつくられ、径152cm、深さ245cmをはかる。下部には径78cm、厚さ3cmの桶様の枠を72cmの深さまで検出したが、それ以上の調査は危険なため不可能であった。井戸の形態分類からいえば完掘ではないが、Ⅳ類B-Aと思われる。

SE 1183 掘方は径2.3mの円形プランを呈し、内部に桶様の枠が2段残存している。1段目の上端内径59cm、深さ約110cm、2段目の上端内径54cm、深さ120cm、枠の厚さ2.5cmをはかる。Ⅳ類Aに分類される。掘方の切り合いからSE 1184よりも新しい。

SE 1184 掘方は一辺約2.2mの隅丸方形であり、深さは2.4mである。井戸枠は二段からなるが、上段の枠に半截した竹を用いた特異なものである。内法幅48～56cm、深さ152cmの方形の枠で、横棧と隅木は3段に組み、側板に半截した竹を使用している。東側の一部には幅22cm、長さ約148cm、厚さ約2cmの木板を使用している。下段は通常の桶様の枠で、上端内径60cm、



第11圖 井戸実測図



第12图 井戸実測図

井戸番号	材	段	形	井戸径・幅(cm)	井戸高さ(cm)	井戸壁厚(cm)	形類分類	透視面	新旧関係	備考
SE1181	石組・桶	以上	丸	152	310以上	3	Ⅱ-B-C	黒褐色土		
SE1182	歯物	1	丸	37	20			黄褐色土		歯物は二重
SE1183	桶	2	丸	59	212	2.5	Ⅱ-A	黒褐色土	SE1184より新しい	
SE1184	竹材・桶	5	丸	60	201		Ⅱ-B-C	黒褐色土	SE1183より古い	
SE1185	歯物			38	23以上			黄褐色土		
SE1186	桶	5	丸	62	258以上	3	Ⅱ-A?	黒褐色土		
SE1187	木横枝		方形	47			I-A	黄褐色土		
SE1188	桶	3	丸	74	220	3	Ⅱ-A	黒褐色土	SE1189より新しい	
SE1189	桶	3	丸	48	208	3	Ⅱ-A	黒褐色土	SE1188より古い	
SE1190	桶	3	丸	64	192	3	Ⅱ-A	黒褐色土		
SE1194	桶	4	丸	61	260	3.5	Ⅱ-A	黄褐色土	SE1195より新しい	
SE1195	木組(剛付)	1	方形	77	120	2.5	I-B	黄褐色土	SE1194より古い	
SE1197	桶	4	丸	54	368	3	Ⅱ-A	黒褐色土		
SE1198	竹タガ2段							黒褐色土	SE1199より新しい	井筒
SE1199	木組・歯物	1	方形	46	33		Ⅱ-A	黄褐色土	SE1198より古い	歯物は二重
SE1320	瓦							茶灰色土		

第2表 第45次調査検出井戸一覧表

深さ88cm、厚さ2cmをはかる。SE1183と切りあっており、それに先行する。側板に竹を使用した例はきわめて稀であるが、側板の竹と木の材質の違いを除けば、Ⅱ類B-Cに分類することができる。

SE1186 上端径約3m前後の楕円形の掘方の内側に桶様の材が5段据えられている。5段目の途中から下位は危険を避けるため検出を中止した。このうち上から1段目は上部が腐植しているが、残存部上端内径62cm、残存の深さ46cmをはかる。以下の上端内径、深さはそれぞれ2段目66cm、78cm、3段目69cm、73cm、4段目75cm、72cm、5段目82cm、22cm以上、をはかる。各段の材には22~23枚の板材が使用されている。

SE1188 SE1189と切り合っており、それより新しい。掘方のすべてを検出することはできなかったが、径約2.5mの円形プランを呈する。その内側に3段の桶様の材が据えられている。上端内径、深さはそれぞれ1段目74cm、81cm、2段目68cm、97cm、3段目54cm、54cm。いずれも厚さ約3cmをはかることができる。底には小石が敷き詰められていた。Ⅳ類Aに分類される。今回の調査で多く検出されたタイプである。

SE1189 径約1.7mの不正円形の掘方の中に桶様の材が3段据えられている。1段目は腐植が著しく2段目の結合部だけしか残っていない。上段内径、深さは2段目48cm、82cm、3段目52cm、136cm、厚さ3cmである。SE1188よりも先行する。Ⅳ類のAに分類される。

SE1190 掘方は径2.2mの円形プランを呈する。3段の桶様の材が据えられている。1段

目の上部は腐植しているが、残存部で上端内径64cm、深さ46cmをはかる。2段目以下は、2段目68cm、78cm、3段目54cm、90cmで、厚さ3cmである。Ⅳ類Aに分類される。

SE1194 SE1195と切りあっていて、それに後出する。掘方は径約3.3mの円形プランである。内側に4段の桶様の枠が残存している。それぞれの上端内径、深さは1段目61cm、59cm、2段目62cm、73cm、3段目63cm、74cm、4段目53cm、63cmをはかる。厚さ3.5cmの板材が使用されている。Ⅳ類Aに分類される。

SE1197 径約2.1mの円形の掘方の内側に厚さ3cmの板材を縦に並べており、桶の上端内径、深さはそれぞれ1段目54cm、88cm、2段目65cm、93cm、3段目58cm、98cm、4段目62cm、106cmをはかる。4段目上部1ヶ所に12cm×12cmの方形の孔がみられる。Ⅳ類Aに分類される。

SE1198 SE1199を切っている。円形の掘方で径1.75m、深さ1.25mをはかることができる。井戸枠は抜き取られており、残存していないが、タガが2段残っていた。

井戸の中央には現存長77cmの竹が節を抜き、先をとがらして、突き刺されていた。この様な例はSE1191にもあった。井戸を埋める際の井鎖の例を九州地方において追加したことになる。^(注3)

SE1199 SE1198に先行する井戸で、掘方のプランは一辺2mの隅丸方形である。枠の大部分はすでに抜かれているが、底部付近の一部が幸い遺存していた。内法一辺63cm、幅8cm、厚さ5cmの横棧が方形に組まれ、その下部に上端内径46cm、深さ20cmの2重に廻した曲物が置かれていた。横棧と曲物との間には瓦片が敷かれていた。Ⅱ類Aに分類される。

土 壇

主要なものではSK1206、1212、1213、1214、1216がある。SK1212、1214は浅く細長いプランをなし、青・白磁の完形品が出土している。SK1213は上面が約1.9×1.4mの楕円形プランをなす浅いピットで土師器が多数出土した。

その他の遺構

SX1220 調査区の南端に護摩堂跡の伝承をもつ5×5m、高さ2mほどの小山がある。この小山に関して、護摩堂＝菩提院としてその基壇の一部とする考えと東面築地の遺存とする考えがあり、注目されていた。

この小山に1×4mのトレンチを入れて調査した結果、大きく二層からなることが判明した。すなわち下部の厚さ85~100cmほどのかなり整然とした礫層と、その上部の70cmほどの表土層からなる。礫層にはほとんど遺物を含まないが、表土層には近世のものまで含んでいる。ところで江戸時代の絵図にこの小山は護摩堂跡と書込まれ、それが江戸時代初期の「護摩堂（只今跡）」という記録と照応するところから、それ以前から所在したことは疑いない。また層位的に黒褐色土層より上層にあり、中世をそれほどさかのぼるものでもない。したがって調査前に期待されたような、菩提院あるいは東面築地に関する遺構である可能性はまったく否定されたのである。

この小山と約半分を重複させて「コ」字形にめぐる石敷溝SX1220を検出した。溝は幅90～110cm、深さ25cmほどで、内部に5cm前後の大きさの小石が詰められている。南北に方位をとり、溝の東西両辺の内側幅は約5mをはかる。東西両辺はさらに調査区の南外方に延びており、おそらく南辺にも溝を配して正方形ないしは長方形をなすのであろう。床土直下のためかなり削平されているが、溝の内側に不明瞭ながら柱穴と思われるピットがみられた。その点から、この石敷溝を建物の雨落ち溝と考えれば、層位・伝承からみて、この部分に室町時代頃に「護摩堂」が置かれていた可能性も考えられる。

SX1209・1210 小ピットである。SX1209は上層をカットされた黄褐色土層に掘り込み、第Ⅱ期に属する可能性もある。

出土遺物

今回の調査で出土した主な遺物は土器・陶磁器・瓦埴・石製品・木製品・銅銭・金銅製品などである。ここでは各土層中から出土した遺物および溝・井戸・土壌出土遺物を中心に述べる。

茶灰土層出土土器（第13図、別表）

須恵器

杯蓋（1～4） いずれも口縁端部を屈曲させにぶい嘴状につくった杯蓋で、2を除けば器高も低い。天井部をへら削りし、体部を横ナデで仕上げている。1の内面には全体に墨が付着している。

壺蓋（5） 口縁内径13.2cmほどに復原される壺の蓋で、4分の1ほどを残す。天井部はへら削りの上をナデしており、また体部に横ナデ調整を加えている。

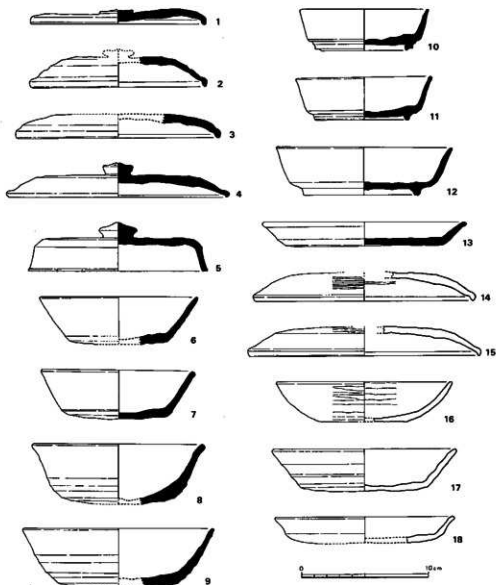
杯（6～12） 6～9は無高台の杯で、いずれも底部をへら切り、体部・内底を横ナデないしはナデ調整されている。器形は、直線的に立ち上がる体部と内底とにかすかに変換線のみられる6・7と、口径13.6、15.1cmでやや外反しつつ立ち上がる体部と内底との変換の明瞭でない8・9の二種がある。

10～12は法量に差はあるが、いずれも低目の高台を付した高台杯である。体部はほとんど直線的に立ち上がるが、口縁端部でわずかに外反気味となる。高台は外底の端よりもやや内側に付けられている。

皿（13） 口径16cmに比して器高の低い皿で、直線的に立ち上がる体部は大きく外方に広がり、皿の浅さを感じさせる。底部をへら切りし、体部・内底を横ナデないしナデで調整する。

土師器

杯蓋（14・15） 口縁端部の内側に浅い凹線をめぐらし断面をにぶい嘴状に仕上げる特徴は伴出の須恵器杯蓋に共通する。天井部をへら削りし、体部を横ナデにする点も共通するが、さらにへらみがきを加えている。14は天井部内側にもへらみがきが見られる。いずれも破片の状



第13図 茶灰土層出土土器実測図

態からみてつまみが付されると思われる。15の内面は全体に墨が付着している。

杯 (16・17) 無高台の杯で、水平にいていねいにヘラ切りされた底部から体部が大きく内弯しつつ立ち上がる16と、須恵器杯と同様にヘラ切りされた底部から体部がほとんど直線的に立ち上がる17の二種がある。体部は横ナデ調整されるが、16はその上にさらにヘラみがきをほどこしている。

皿 (18) これもまた須恵器皿13と共通した器形の特徴および調整がみられる。若干の砂を

含む胎土を硬質に焼成している。色調は他の土師器と同様に赤茶色を呈する。

以上述べてきた茶灰土層出土の土器はほぼ単一の時期のものとして考えられる。須恵器についてはたとえば近接した時期の所産とされる太宰府町向佐野1～3号窯出土の須恵器の組み合わせと共通している。また土師器は大宰府史跡SE1081・SK1084出土の土師器の組み合わせと共通する点が多い。^(註5)ところで茶灰土層出土の須恵器高台杯は高台が底部端のやや内側に付されており、底部の端に高台を付けるために体部と底部との境がなくなり外見上直線的に一体となる特徴をもつSE1081・SK1084出土のそれとは形態を異にし、それに先行する。須恵器が土師器よりも多数を占める点もSE1081・SK1084とは異なった傾向である。一方、大宰府史跡で出土する8世紀代と考えられる土師器を、前半～中頃についてはSK1106、後半についてはSE1081・SK1084を標式として考えた。茶灰土層出土の土師器の器形・調整の手法はSK1106よりもSE1081・SK1084に近い。また後述する茶灰土層面に切り込まれたSK1280・SK1285出土の土器などを考慮すれば、茶灰土層出土の土器は須恵器・土師器のそれぞれの特徴からSE1081・SK1084よりも若干先行すると思われる。すなわち、8世紀中頃ないしはそれをやや降るくらいの時期に考えられよう。

黄瀬土層出土土器 (第14・15図、別表)

須恵器

杯蓋(1・2) 1は厚い器内の全体をナデで仕上げている。天井部と体部との境は明瞭ではなく、また断面三角形状をなす口縁端部は丸味をもつ。これに対し2は天井部をへら削りし、体部を横ナデで仕上げる。天井部と体部との境は稜をなし、断面噴状に口縁端部をつくる。全体にシャープにつくられる。1の内面全体に曇が付着している。

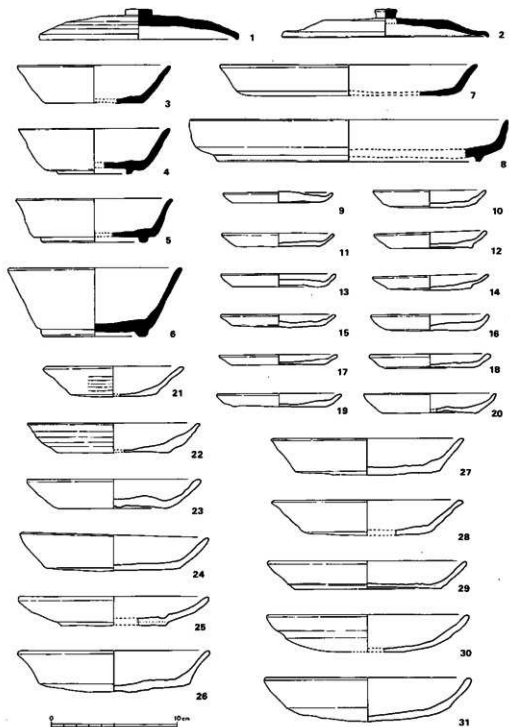
杯(3～6) 3は無高台の杯で、へら切りされた底部とほぼ直線的に立ち上がる体部とからなる。体部は横ナデで調整している。4・5は杯3と同じ形態の体部に低い高台を付けた高台杯である。高台は外底の端よりもやや内側に付けられる。これに対し6の高台杯は体部が伸長して器高が高くなっている。低目の高台は外底の端近くに付けられ、体部とともに一体をなして外見が直線的になる。内底と体部との境、および高台に重ね焼きの痕跡を残している。

皿(7・8) 7は通例の皿であるが、8は口径25.2cmほどに復原される丸味をもった器形の高台皿である。7の内面には曇が付着している。

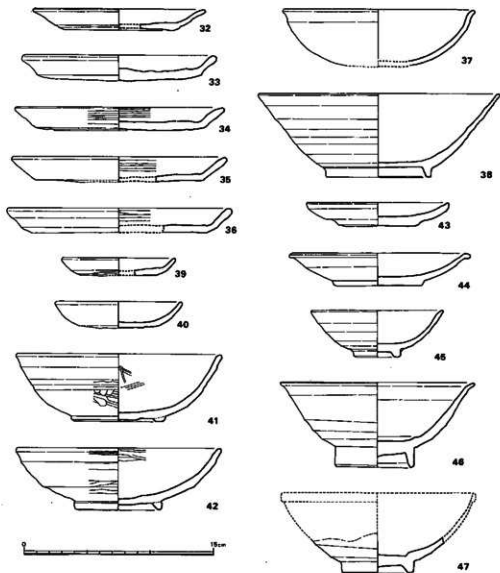
土師器

皿(32～36) やや小形の3を除けば、口径15.3～17.8cm、器高1.8～2.1cmをはかり、一定はしないがおおよその法量を知る。いずれも淡い赤茶色を呈し、比較的硬質に焼成されている。底部はへら切りされる。体部・内底の調整は横ナデないしナデで仕上げた32・33、内面をへらみがきにし外面を横ナデにした35・36、内外ともにへらみがきにする34、がみられる。

皿a(9～20) 口径8.7～10.5cm、器高0.8～1.4cmのものが含まれるが、口径8.9～9.2cm、



第14图 黄褐土层出土土器实测图(1)



第15図 黄褐土層出土土器・陶磁器実測図(2)

器高1.1cm前後の例が多い。淡く丸味をおびた黄白～茶白色を呈する。多少の微砂を含む胎土を硬質に焼成している。多くは底部を糸切りされ、板状圧痕をみとめることができる。

杯a (21～29) 法量にバラツキがあるが、口径15cm前後、器高2.5～3.0cm前後の例が多い。体部の立ち上がりも一様ではない。体部・内底は横ナデないしナデで仕上げられ、ヘラみがき痕のみられる例もナデ消している。25の内面はみがかれている。糸切りされた底部に板状圧痕のつく例が多い。なお29の内面全体に赤色顔料が塗布されている。色調・胎土・焼成などは皿

aと同様である。

丸底の杯(30・31) 31はヘラ切り後に底部を丸く突き出しており、体部と底部の境に稜がめぐる。体部は横ナデ調整しているが、内面は平滑に調整されておりみががれたと思われる。

椀(37・38) 37はおそらく無高台の丸底の椀であろう。かなりの丸味をもって内弯しつつ立ち上がる体部は口縁でわずかに外反する。体部を横ナデで調整し、内面はさらにみがいて平滑にしている。38は高台椀で、水平に切られた底部から体部が直線的に立ち上がる。低目の高台が外底の端につけられており、体部と一体をなしている。

瓦器

皿(39・40) 精製された胎土を硬質に焼成している。39は銀白色を呈する。器表の内外を横ナデし、さらにヘラみがきしている。

椀(41・42) いずれも高台椀で、灰白色(一部銀白色気味)を呈する。器表の内外面を横ナデ調整し、さらにヘラみがきで横ナデ・指頭圧痕を消している。内面のヘラみがきは雑である。口縁付近を強くなでてかすかな稜をつけている。

緑釉陶器

皿(44・45) 44は口径11.3cm、器高1.9cmをはかる。糸切りされた底部と軸のため不明瞭ではあるが横ナデと思われる体部とからなる。ほとんど砂を含まない灰白色の胎土を土師質に焼成し、内外全面・外底に濃緑色の釉をかける。45は口径14.3cm、器高2.6cmをはかる。わずかに内弯する体部を口縁端部で外方へ引き出すように屈曲させている。底部には円板状の高台がみられる。外底を含め全面をていねいにヘラでみがいており、さらに淡い黄緑色の釉をかけている。灰白色のほとんど砂を含まない胎土を土師質に焼成している。

白磁

椀(46・47) 46は細く高くつくられた高台と、丸味をもった体部を口縁で外反させる特徴をもつ。内底見込みに段をつけ、体部外面は口縁下からヘラ削りされている。灰白色の胎土にやや黄色味を帯びた白色釉をかけている。V-2・aに分類される。口径15.3cm、器高6.7cmをはかる。47は46と同様の胎土・釉調をなすが、低くつくられた高台が外面を直に、内面を斜めに削り出されており、口縁部に小さな玉縁をもつII-2・aに分類される。

青磁

小椀(45) 内弯気味に立ち上がる体部の表面を内外ともにヘラ削りで調整している。灰白色の胎土に施した釉は多少濁った空色に発色している。高台は断面四角形で、疊付より内側は露胎である。無文で、龍泉窯系青磁小椀I-4に分類される。口径10.4cm、器高3.7cm

以上のように黄褐色土層出土の土器・陶磁器にはかなりの時間差がみられる。それらは大別して須恵器・土師器32~36・38のような奈良時代に属するものと、皿a・杯aのように土師器の底部切り離しの技法に糸切り・ヘラ切りが混在してみられる12世紀初頭~前半代の時期に属す

るもの、とからなる。量的には後者が多い。一方、後述するように、黄褐色層面から切り込んだ土壌中の土器は12世紀中頃に属しているし、黄褐色層によって覆われる溝SD1300の埋土中の土器は12世紀初頭頃のものである。これらから考えて、黄褐色層面は12世紀前半から中頃にかけての時期に形成されたとすることができる。このように考えると、45の龍泉窯系青磁小碗と時期的な矛盾が生ずるが、黄褐色層面に掘り込まれたピットからの混入であろう。

黒褐色土層出土土器 (第16・17図、別表、図版41)

土師器

皿a (1~16) 口径6.5~9.7cm、器高0.7~1.5cmのものであるが、口径9.0cm前後、器高1.0~1.2cmほどの例が多い。底部へう切りしたものを含むが、多くは糸切りである。すべて内底をナデしており、ほとんどの外底に板状圧痕がみられる。砂を含む胎土を硬質に焼成しており、淡い色調の茶灰~茶褐色を呈する。

皿b (17~20) 20はやや大形であるが、他は口径7cm、器高2cmほどの法量を示す。すべて底部は糸切りされ、内底をナデているが板状圧痕はみられない。皿aにくらべ灰色を帯びた色調を呈する。

皿c (21) 口径8.8cm、器高1.0cm、底径6.9cmの法量を示す皿aに底径5.0cmの高目の高台を付けている。器高2.1cm。

杯a (23~29) 26を除けば底部を糸切りにする。すべて内底をナデ調整し、外底に板状圧痕がみられる。粗い砂を含んだ胎土を硬質に焼成している。23・24は口径13.9、14.0cm、器高2.9、2.5cmの法量を示し、他の杯よりも一回り小さい。平坦な底部から直線的に体部が立ち上がり、底部と体部の境は明瞭な稜をなす。25~29は口径14.8~15.6cm、器高2.8~3.6cmをはかる。底部が平坦をなさず、外反気味の体部ではあるが、23・24にくらべ全体的に丸味を帯びた印象を受ける。

杯b (30) 口径約13cm、器高約4cm、底径4.8cmをはかる。杯aに対し器高が高くなり、体部の器壁も薄く、シャープにつくられている。底部を糸切りし、体部を横ナデ調整する。

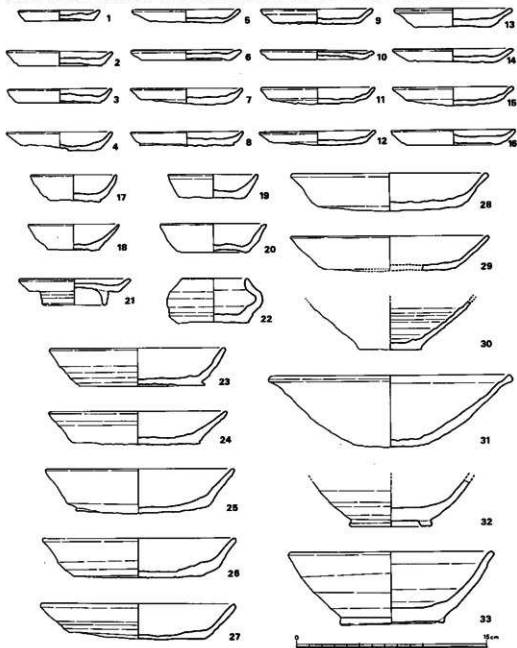
小壺 (22) 口径5.3cm、器高3.5cm。底部から直線的に立ち立がる胴部を「く」字形に屈曲させて口縁部をつくる。頸部はほとんど目立たない。底部が糸切りされる。

須恵系土器

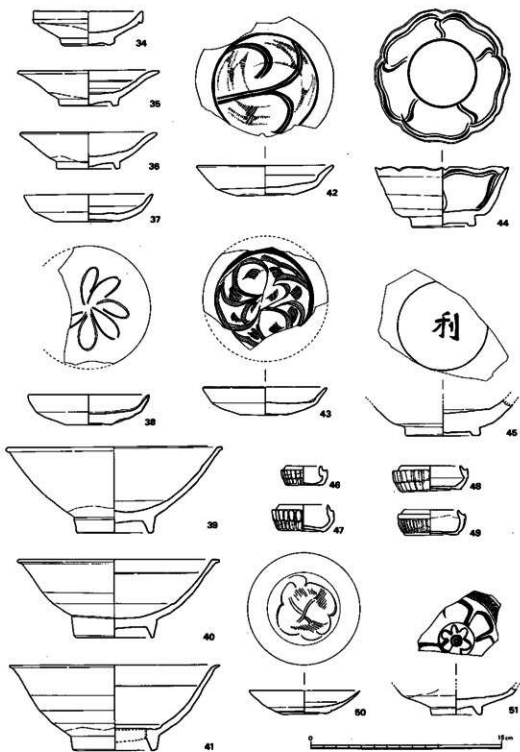
片口 (31) 粗い砂を多量に含む胎土を硬質に焼成した須恵質の鉢で、4分の1強を残す。片口部を欠くが、特徴からみて片口と思われる。口径19.2cm、器高5.7cm。底部を糸切りするが、他の部分は横ナデ・ナデで調整している。体部下半のつくりは内外ともに雑である。

碗 (32・33) 33はおそらく糸切りした後にヘラで水平にナデた底部と、わずかに内弯気味に立ち上がる体部とからなる。体部の内外面をていねいに横ナデし、内底をナデている。底部と体部の境から体部下端にかけて細い断面三角形の高台を貼付けているが、貼付けの位置が高

いたため底部は全体として円板状をなす。口径16.2cm、底径13.1cm、器高5.8cmをはかる。32は口縁部を欠くが、糸切りの底部に断面四角形の高台を貼付けている点を除けば、33と同様の特徴をもつ。在地の産ではなく、他に類例を求めれば東海地方の山茶碗に相当する可能性がある。



第16図 黒磯土層出土土器実測図(1)



第17图 黑褐土层出土磁器实测图(2)

陶磁器

黒褐土層出土の磁器はかなりの量にのぼる。白磁・青磁・青白磁がある。

白磁

皿 (34~38) 34の高台は低く厚いものである。釉はやや厚目にかかり、灰白色を呈しており体部下位から底部には施釉されていない。口縁部は断面三角形を呈する。口径8.8cm、高さ2.8cmのものである(Ⅱ-2)。35は見込みの釉を輪状にカキ取ったものである。口径11.2cm、高さ2.8cmを測る(Ⅲ類)。36は前者の35と形態、釉調ともに似ているが、内底の見込みはカキ取っていない。口径10.8cm、器高2.8cmを測る。37は体部上位で内弯し、その屈曲部の内面に波線状の段をもつ。胎土は灰白色である。釉は厚目にかかり灰白色を呈し、底部は施釉した後カキ取っている。内面見込みにヘラによる片彫りの草花文がある(Ⅳ-1類)。38は体部上位で内弯し、胎土は粗く灰色ないし空色を帯びた灰白色を呈する。釉は比較的厚目にかかり、底部の釉は施釉された後カキ取っている。釉色はやや空色を帯びた灰白色を呈する。内面見込みに花文がある。口径9.6cm、器高2.5cmを測る。

碗 (39~41) 39は高台が高く直立するもので、体部の器肉は全体にうすく、口縁部を外反させ端部を丸くするものである。口径17.2cm、器高6.8cmを測る(V-3・a)。40は39と同じく高台が高く直立するもので、口縁部を外反させ端部を水平にするもので、無文のものである。見込みに浅い段をもつ。口径16.6cm、器高6.2cmを測る(V-4・a)。41は内底見込みの釉を輪状にカキ取ったものである。口縁部を外反させ、端部を平らにしている。内面口縁部近くに細い波線を一条入れている。口径16.6cm、器高6.8cmを測る(Ⅳ-1)。

青磁

皿 (42・43) 42は同安窯系のもので、体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有する内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。口径10.8cm、器高2.4cmを測る(I-1・b)。43は龍泉窯系のもので、体部中位で屈曲し、口縁部は直に薄く引き出されたものである。やや明るい緑色を呈し、内底見込みに櫛による花文を有するが、その中に放射状の櫛目が入っている。底部の釉は施釉された後カキ取っている。口径9.8cm、器高2.2cmを測る(I-2・c)。

小碗 (44) 龍泉窯系のもので釉はやや空色気味の緑色を呈する。口縁部に輪花を有し、ヘラ状施文具で体部内面に片彫りの線を入れ体部を5区分している。口径10.6cm、器高4.7cm。

碗 (45) 龍泉窯系のもので高台が断面四角で高台部壘付およびその内部は露胎である。露胎部分は赤色を呈する。釉はやや黄色味を帯びた緑色を呈する。外底付近は白く釉が風化している。内見込みに「利」の字のスタンプがある。

青白磁

合子 (46~49) 46は合子の身である。釉は淡青色を呈し、蓋受けの外側と体部下半それに

底部には軸がかかっていない。蓮弁は23個あり、体部中位に段をもつ。口径3.0cm、器高1.5cmを測る。47は前者と類似したもので、口径、器高が大きくなる。弁は31個である。口径3.8cm、器高2.2cmを測る。48も同じく前の2例と類似している。口径4.8cm、器高1.9cmを測る。49は先の3例とやや異なり、蓮弁が丸味をもち、口径4.2cm、器高2.0cmである。

皿(50) 薄手の皿で、軸は全面に薄く施軸され、淡青白色を呈し、細かい貫入がみられる。口縁部にかけて薄くなっている。口径8.8cm、器高1.9cm、内面見込みに浅い段をもつ。外底は施軸された後、軸をカキ取っている。高台状に削り出している。見込みに細かいヘラと櫛目の花文がある。

その他の磁器

碗(51) 淡茶色の粗いもので、軸は薄目にかかりやや緑色を帯びた茶色を呈する。やや風化した色を呈する。花文は隠線で白色の文様となっている。高台部と底部の少片で全形を知り得ないが、体部下半と高台部は施軸されていない。

SD1230出土土器(第18・19図、別表、図版34・35)

土師器、白磁、青磁、青白磁、陶器などであり、他に図示しなかったが、瓦質のすり鉢、茶釜、火鉢、土師質の鍋などの破片が出土した。土師器のうち第18図1～7、9～14は下層、15～36は上層、8は満底で検出されたSD1230より古い土壌の出土である。陶磁器のうち第19図37～44は下層、45～54は上層出土である。

土師器

皿a・b、杯a・b、有高台の大形杯片がある。

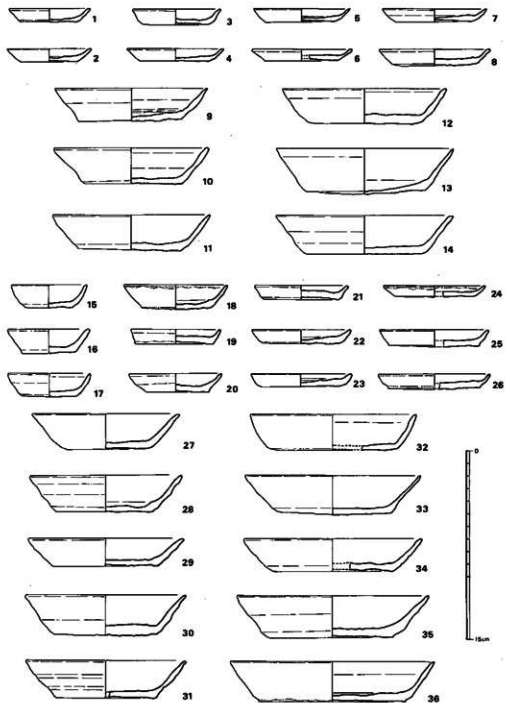
皿a(1～8、19～26) 8のほかはすべて底部を糸切りされたものである。1～7・19～26は口径6.6～8.8cm、器高0.9～1.5cm。8は口径8.8cm、器高1.3cm。糸切り底のものは法量から口径6.6cmのもの(1・2)、7.1～7.8cmのもの(3～5、19～22)、8.0～8.3cmのもの(6～7、23・24)、8.5cm以上のもの(25・26)に大きく分けられる。

皿b(15～18) 15～17は口径6.0～6.6cm、器高1.8～1.9cm。18は口径8.2cm、器高1.9cmで、口縁端部内外面に煤がついている。なお図示しなかったが、下層からも口径7.4cm、器高2.2cmのものが出土している。

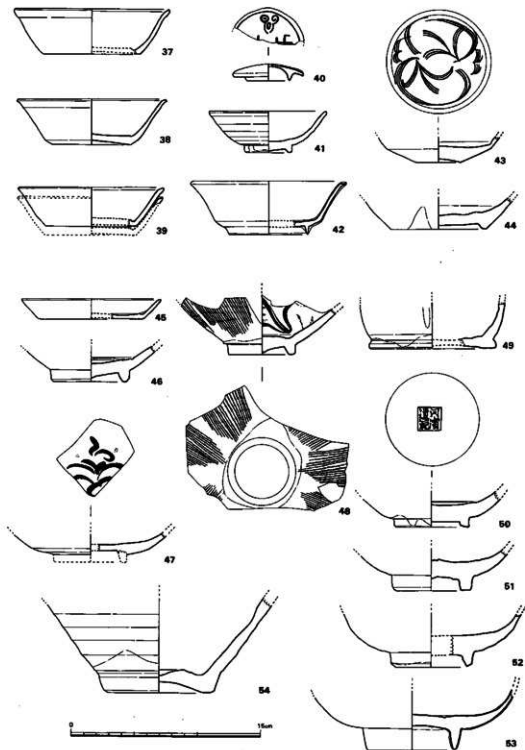
杯a(9～14、27～36) 口径11.6～16.2cm、器高2.6～3.7cm。法量にばらつきがある。口径12～13cm前後のもの(9～12、27～31)、14cm前後のもの(13・14・33・34)、15cm以上のもの(35・36)に大別される。

白磁

碗(46) Ⅲ-3の底部と思われ、やや高く削り出された高台で、内面見込みに段を有する。灰白色の粗い胎土に、灰緑色の軸が薄めにかかり、細かい貫入がみられる。底部外面は施軸されず、墨が付着する。内面見込みの段の内側は本来軸を輪状にカキ取るものであるが、46には



第18图 S D 1230出土土器实测图(1)



第19图 SD 1230出土陶磁器实测图(2)

この痕跡がない。内面には重ね焼きした痕跡が輪状についている。このほか下層ではⅣが7点、Ⅴが2点、Ⅵが1点、上層ではⅡが3点、Ⅳが17点、Ⅴが9点、Ⅵが1点、Ⅶが6点出土している。

皿 (37~39、45) 37~39はⅤ-1・c、45はⅤ-1・aに属する。37は口径12.4cm、器高3.6cm。38は口径12.0cm、器高3.6cm。39は口径11.6cm、器高3.1cm。45は口径11.0cm、器高1.6cm。口縁端部が口禿になるもので、灰白色の粗い胎土の上に空色を帯びた白色の釉がかかる。39の口縁部下の外面には同器種の口縁部の破片が付着しており、重ね焼きされたことがわかる。このほか下層ではⅥが2点、Ⅷが24点、上層ではⅡが2点、Ⅲが2点、Ⅵが1点、Ⅶが2点、Ⅷが26点、類別不明2点が出土している。

以上のほか、壺の破片が下層で8点、上層で12点、器種不明の破片が下層で10点、上層で22点出土している。

青磁

碗 (48、50~53) 48は同安窯系のⅠ-1・bで台形状の厚い高台を有し、体部は高台部からやや内弯ぎみに外上方へ立ち上がる。内面見込みと体部との境に段を有している。黄色味の強い鉛色のガラス質の釉が外面の体部下、高台部を除いてかけられる。50~53は龍泉窯系のものである。50はⅠ-1の底部破片で、断面四角の高い高台を有し、底部の器肉は厚い。外面はへら削りされ、黄緑色がかかる釉が高台と体部の境近くまでかかる。高台畳付4カ所に重ね焼きの目あとがある。胎土は灰色で粗く、見込み中央に「河濱遺範」の印文がある。51・52はⅠ-7に近い。50に比べて高台の内面は深くえぐられるため、高台は高く、底部の器肉が体部下と等しい厚さとなる。51は淡灰色の胎土で黄緑色ぎみの釉が高台畳付部までかかっている。52は灰色の粗い胎土で、灰色に近い不透明な釉が高台の外表面までかかっている。高台畳付部は施釉された後、斜めにカキ取られ、茶黒色に発色している。53は大形のもので、Ⅲに近い輪調をもつ。全面施釉された後、底部内外面は約径5cmの円形状にカキとられており、赤褐色に発色している。外面には径約3cmの輪状の焼成台を使ったと思われる痕跡がついている。胎土は灰白色で粗く、釉は濁った不透明な緑色で、釉壁の厚さは0.1cmほどある。このほか下層では同安窯系のⅠが4点、Ⅲが1点、龍泉窯系のⅠ-1が10点、Ⅰ-2が3点、Ⅰ-5が19点、Ⅲが1点、類別不明1点があり、上層では同安窯系のⅠ-1が10点、Ⅲが4点、類別不明が2点、龍泉窯系のⅠ-1~4が40点、Ⅰ-5が46点、Ⅰ-7に近いものが3点、Ⅱが4点出土している。

小碗 (41) 口径9.4cm、器高3.3cm。無文で、底部の器肉は厚く、体部は内弯する。体部外面は口縁部のすぐ下までへら削りされる。暗灰色の胎土に暗緑色の釉がかかるが、断面四角の高台部外面には施釉されていない。龍泉窯系のⅠ-4に属する。このほかにⅠの破片が下層から1点、上層から2点出土している。

杯(42) 口径12.3cm、器高4.3cm。龍泉窯系のⅢ-1・aに属する。体部は下位で、「く」字状の屈曲をもち、そこから直線的に外上方へ立ちあがる。口縁部は外反し、平坦な面を成している。胎土は灰白色で、深い緑色を呈する釉は高台部の先端を除いて全面に厚くかかる。高台部先端は赤く発色している。このほか下層でⅢ-1が1点、上層でⅢが2点出土している。

皿(43) 龍泉窯系のⅠ-2・bのもので、体部中位で屈曲し、底部外面は焼成前に釉をかき取って若干の上げ底となっている。底部見込みに柳状の施文具で花文が描かれる。暗灰色の胎土に黄色味を帯びた緑色の釉がかかる。このほかに下層では、同安窯系のⅠ-1が1点、上層では同安窯系のⅠ-1が8点、Ⅰ-2が3点、龍泉窯系のⅠが1点出土している。

蓋(40) 口径5.6cm、器高6cm。胎土は灰白色で、外面は若干濃い緑色の釉が厚目にかかり、陸線の文様がある。内面は施釉されず、赤褐色を呈する。

以上の器形、種類のほかに下層では象嵌のある破片のもの3点、龍泉窯系のⅢが1点、類別不明の破片2点があり、上層では象嵌のある破片5点、龍泉窯系のⅢが2点ある。

青白磁

下層では合子1点、碗と思われるもの1点、上層では合子1点、その他の破片が出土した。

陶器

黒釉陶器(54) 外面はへら削りが施された底部の破片である。胎土は肌色で粗く、黒褐色の釉が薄目にかけられる。底部外面には施釉されていない。

その他の陶磁器

壺(44・49) 44は底部破片で、外面はへら削りされ、胎土は淡灰色の粗いもので、灰色ぎみの黄緑色釉が体部外面と底部外面の一部に薄くかかる。底部及び底部外面の一部の施釉されていない部分は茶褐色を呈する。底部外面には墨痕がある。49の底部外面はへら削りされている。胎土は淡灰色の粗いもので、黄茶色の釉が体部外面に施釉され、底部には施釉されていない。体部の外面には凹線で表わした割花状の文様がつけられているが、破片のため単位は明らかでない。

碗(47) 胎土は灰白色の粗いもので、底部外面を除いて灰釉に似た淡緑色の釉がかけられている。内面には茶色味を帯びた緑色の草花文が描かれ、重ね焼きの目あとがある。

以上のほかに下層では黒釉陶器1点、染付2点、上層では染付1点があり、上・下層に褐釉、黄緑釉、黄釉のかかる破片、及び瀬戸、常滑、備前、中国陶器と思われる雑器の破片などが出土した。

S D1300上層出土土器(第20図、別表、図版39)

須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、白磁、青磁、陶器が出土した。いずれも破片である。

須恵器

杯蓋、杯、皿、壺がある。

杯蓋(1) 口径15.6cmで鈕を欠損する。天井部外面はヘラ削り、口縁部内外面は横ナデ、内面はナデで完成される。口縁端部より2cmほどの内面に「主^口」の墨書がある。

杯(2) 口径12.5cm、器高3.8cm。体部内外面、高台部外面は横ナデ、底部内面はナデで完成される。

皿(3・5) 3は口径13.3cm、器高1.7cm。底部はヘラ切りされた後、軽いナデ状の^{アタ}りがあり、体部内外面は横ナデ、底部内面はナデで完成される。内面は滑らかで墨痕があり、碗に使用されたと思われる。5は底部の小破片で、外面に「厨」と墨書されている。

長頸壺(4) 頸部の上と高台部を欠損する。胴部最大径はやや上方にあり、胴部下方はヘラ削り、上方は横ナデが施される。

土師器

皿a、杯a、丸底の杯、有高台杯、高台碗がある。杯aには糸切り底の破片が4点あるが、破片であり混入したものと考えられる。そのほかはすべて底部をヘラ切りしたものである。

皿a(6~9) 6は口径8.3cm、器高1.1cm。7は口径9.4cm、器高1.0cm。8・9は口径10.8cm、11.0cm、器高1.4cm、1.3cmである。

丸底の杯(10) 口径15.6cm器高3.0cm。内面は平滑な器面調整が施されている。

皿(11~13) 11~13は口径13.6、14.5、20.4cm、器高1.7、1.8、2.4cm。13の体部外面下位はヘラ削りされ、内面には墨痕がある。

鉢(14) 口径23.1cm、器高15.9cm。胎土には大粒の砂粒を含んでいる。口縁部内外面は横ナデが施される。外面は底部まで幅広いヘラ削りがなされ、内面は底部から口縁部近くまでカキ上げたような痕がつく。

黑色土器

碗(15) 口径14.8cm。内面のみ真黒色に燻された黑色土器Aで、高台部を欠損する。外面は風化のため調整は明らかでないが、内面はやや細かいヘラミガキが密に施されている。

白磁

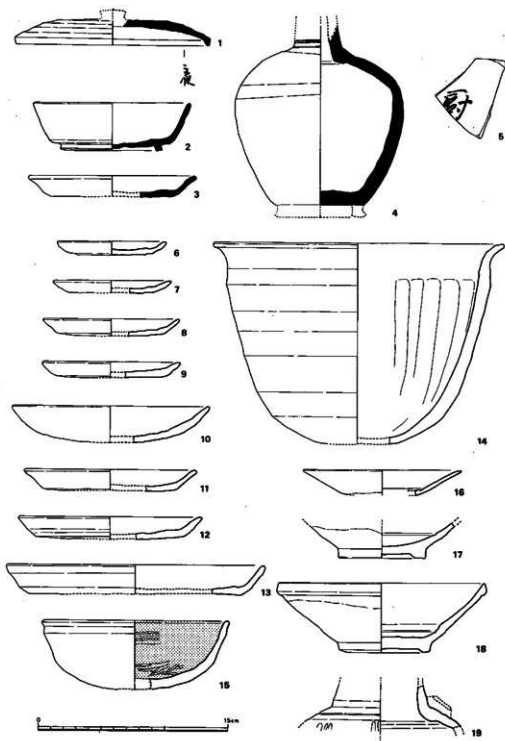
碗はⅡ、Ⅳ-1・b、及びⅣ、Ⅴ、皿はⅤがある。

碗(17・18) 体部外面はヘラ削りされ、幅広い浅く削り出された高台をもつ。口縁は玉縁をつくる。胎土は黒い細粒を混ざる灰白色で、外面の体部下半から底部は施釉されず、18ではその範囲が口縁部のすぐ下方にまでおよぶ。17・18とも内面の見込みに沈線状の段をもつが、18はこの部分を強く凹ませている。Ⅳ-1・b。

皿(16) 口径12.6cm。内面の体部と底部との境に段を有し、灰色ぎみの白色胎土に若干緑味をおびた灰白色の釉がかかる。底部外面には施釉されない。Ⅴ類。

青磁

壺1点のみがある。



第20圖 S D1300上層出土土器・磁器実測圖

壺(19) 耳付壺の頸部破片である。耳部は欠損する。肩部外面には縦に走る3条一對の沈線が施文されている。7、8カ所に割りつけられたものと思われる。きめ細かく、灰色を呈する胎土に深草色の釉がかかる。頸部の内面は殆んど施釉されず、この部分は赤灰色を呈する。

陶器

緑釉の小破片がある。

S D1300下層出土土器(第21図、別表、図版33)

須恵器、土師器、黒色土器、白磁、青磁、白釉陶器、唐三彩が出土した。青磁は後述するように入混品と思われる。

須恵器

杯蓋、杯がある。

杯蓋(1) 口径13.0cm、器高1.2cm。天井部はヘラ切りのまま再調整を加えない。体部内外面に横ナデ、内面にナデを施している。口縁部は横ナデで内面を若干凹ませて簡単に仕上げられており、とくに身受け部を明確につくり出すというものではない。内面は滑らかで、全体に墨が付着しているところから硯に使用されたと考えられる。天井部外面には墨痕がみられ、墨書されていたと思われる。

土師器

皿a・b、皿、杯、高台杯、杯a、丸底の杯がある。糸切りの杯破片1点を除くほかは、すべて底部をヘラ切りされる。この糸切りの破片は上層から切りこむⅡ、Ⅲ期のピットからの混入品と考えられる。

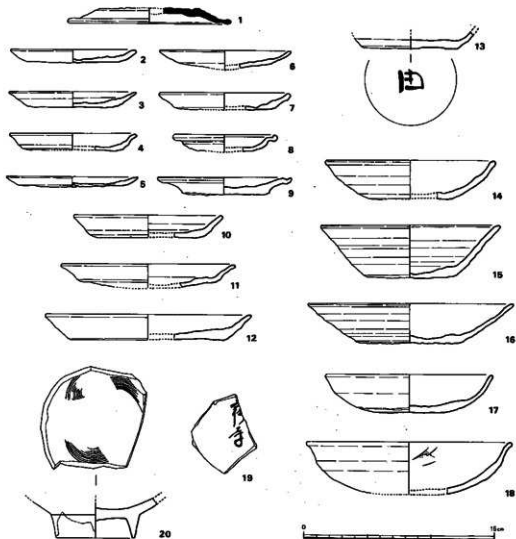
皿a(2~7) 口径10.0~10.4cm、器高0.8~1.5cmである。

皿b(8~9) 8は口径8.3cm、9は10.6cm、器高はいずれも1.4cm。口縁内面に1条の沈線をめぐらし、端部は上方にひき出されている。形は皿aより整美につくられる。8の内面は灯火器に使用したと思われる痕跡がある。

皿(11~12) 11は口径13.8cm、12は復原口径16.2cm、器高2.0cm、11の口縁は外反する。

杯(13~16) 14は口径13.4cm、器高3.1cm、15は口径14.2cm、器高4.2cm、16は口径16.2cm、器高3.1cm。14の体部外面下半はヘラ削りされ、底部と体部の境は鋭い稜線をつくる。通例、この種の杯にはさらに内外面に水平方向のヘラミガキが施されるが、14は器面の磨減によってヘラミガキは明らかでない。15・16の体部は外上方に開き、平坦な底部をなす。体部内外面は横ナデがなされ、器面にその凹凸が顕著である。15の横ナデは体部外面から内面全体におよぶが、16は体部内外面にとどまり、底部内面にはナデが施される。13は底部の破片で、外面に「由」と墨書されている。

杯a(10・17・19) 10は口径11.8cm、器高1.8cm、17は口径13.0cm、器高3.2cm。10は皿の範疇に含まれるかもしれない。19は底部破片で、外面に「□□寺」と墨書されている。



第21図 SD1300下層出土土器・磁器実測図

丸底の杯 (18) 口径16.4cm、器高 4.2cm。底部はヘラ切りした後、丸く突出させた杯である。内面全体に平滑な器面調整が行なわれ、その際の工具のアタリがみられる。
(註7)

白磁

碗はⅡ、V-4・b、皿はⅤの破片がある。

碗 (20) ヘラで削り出した細く高い高台を有し、内面見込みの部分に、11本単位の櫛状の工具で花文を入れるV-4・bの底部破片である。灰白色の胎土の上に灰褐色の釉がかかり、外面は体部と高台部の境付近まで施釉されている。

青磁

龍泉窯系の碗Ⅰ-1~4と思われる細片1点があるが、混入品と思われる。

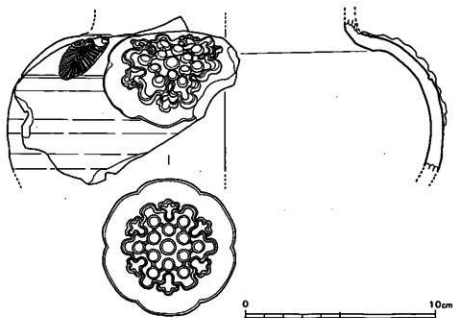
陶器

白釉のかかった碗の口縁部破片1点がある。細片なので多彩釉の可能性もある。

唐三彩（第22図、巻頭図版）

SD1300から三彩を施された頸部から胴部にかけての壺形陶器を検出した。器表に風化と汚濁がみられるが、その美しさは他に類をみない目を奪われるものがある。その色調あるいはメダリオン装飾などの特徴から、一見して唐三彩の破片であることを知る。

破片は11.8×9.4cm、厚さ0.7cmほどの大きさがあり、胴部の最大径を約23cmに復元しうる。壺形を呈するが、後述するような諸特徴からみて獣脚をなすことのできる三足壺（甗）の一部とみて大過なく、20cmほどの器高に復元される。器表には、胎土に用いられたやや微紅色を呈するカオリン質の白陶土の赤味を消すかのように、純白土の化粧を薄く施している。その上を内外ともにていねいに調整している。外表はことにていねいな調整がみられるが、肩部と胴部を境する1条の沈線の下にヘラ削りの痕跡が認められるほか、さらにその下に4条のかすかな条線がみられ、あるいは轆轤目とも考えられる。このような成形の後に肩部に2種のメダリオン（貼花文）の装飾を加えている。内面には細かな平行条線が密にみられ、横ナデの仕上げ



第22図 唐三彩実測図

と思われる。

肩部を飾る大形のメダリオンは 0.1～0.3cmの厚さで別造りされ、体部の完成後に貼付されている。文様は第22図に模式図を示したように単体を6度繰り返した6種の団華をなす。すなわち中心の雄蕊状顆粒をめぐるように2列各6個の雄蕊状顆粒を配する。12個の顆粒はそれぞれ隣線で連結される。その外側には各顆粒に対応して二重各6個の花弁および一重6個の葉を配する。このように整然とした宝相華文(対葉文)であるが、類似の宝相華文と比較すると文様表現に簡略化がみられ、また葉の円弧状の表現にいてねいさを欠くなど、かなりの便化を認めうる。小形のメダリオンは 0.1～0.2cmほどの厚さにつくられた単体の宝相華文で、中央の2列計6個の蕊状顆粒を葉状の文様がとりまいている。二つの文様はいずれも唐三彩に類例をみるところである。唐三彩のメダリオン装飾は一般に大小二種が一組となって肩部、胴部に貼付される。したがって胴部円周との関係から本例には5～6組ほどのメダリオン装飾を想定できる。しかし大形のメダリオンの左右対象の部位に小形のメダリオンを認めることができず、かならずしも通例のように解することはできない。

器表の外面には緑・黄褐・白の三色の釉を施す。肩部には緑・黄褐色の釉を施す。緑色の釉は沈線より上位に施されており、肩部にかけ流された緑が沈線より下位に垂れ、淡い緑の色調をなす。白色の釉の中に浮かぶ淡い薄緑色はそれなりに別個の美をつくりだしている。また緑色の釉の中に、破片部分で三カ所が白抜きにされており、その部分に黄褐色の釉がかけられる。おそらく蠟抜きの手法によると考えられるが、この手法には反論もあり、断定できない。これらの三色の釉はメダリオン装飾の意匠とは無関係になされており、全体をいっそう幽玄なものとしている。

器表の内面にも施釉がみられ、一種の黄釉が全体に施されている。

以上のように、この三彩片は胎土・メダリオン装飾・施釉などの特徴からみて唐三彩であることは疑いない。さらに唐三彩の中でメダリオン装飾を有し、肩部と胴部との間に1条の沈線をめぐる特徴は多くの三足壺(甗)にみられるところである。したがって本例を唐三彩三足壺(甗)と考えて誤りあるまい。きわめてすぐれた、また目を奪う美しきの唐三彩であるが、随所に便化がみられる点、盛唐期でもやや遅れた時期、あるいはさらにそれより降る時期を考える必要がありそうである。

S X 1200 (フシヨク土) 出土土器 (第23～26図、別表、図版36・37)

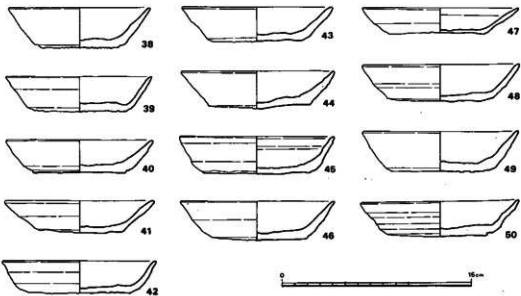
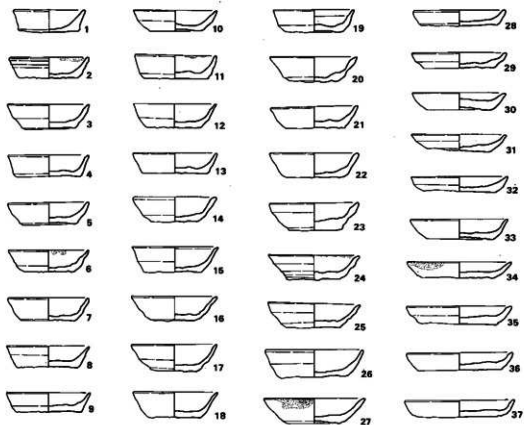
土師器

出土した土師器は全て糸切りのものである。

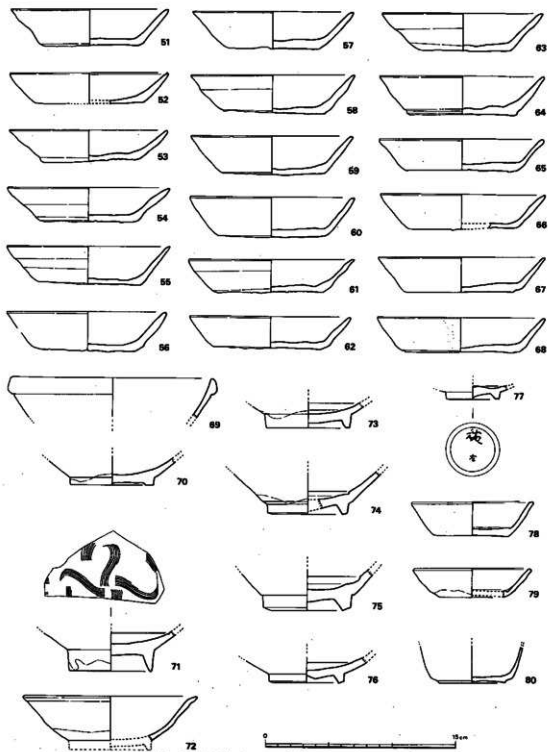
皿 a (28～37) 口径 7.0～8.6cm、器高 1.0～1.5cm、底径 5.0～7.4cmのものである。

皿 b (1～27) 口径 5.7～8.0cm、器高 1.5～2.2cm、底径 3.5～5.2cmのものである。

杯 a・b (38～68) 口径 11.5～13.7cm、器高 2.1～3.3cm、底径 6.0～8.6cmのものである。



第23図 S X 1200(フショク土)出土土器実測図(1)



第24図 S X 1200(フショク土)出土土器・磁器実測図 (2)

る。これらの杯は口径、器高から2つのタイプに分けられる。口径12cm前後、器高2.5cm前後のもの、口径13.0cm前後、器高3.0cm前後のものに分けられる。前者は口径11.5～12.5cm、器高2.1～3.0cm、後者は口径12.5～13.5cm、器高2.7～3.2cmのものである。

白磁

碗Ⅱ-1が2点、Ⅱ-2・aが1点、Ⅳ-1・aが20点（最上層が5点）、Ⅴ-3・aが1点、Ⅴ-4・aが5点、Ⅴ-4・bが5点、Ⅵ-1が1点、Ⅶが1点、Ⅷ-1が6点、Ⅷ-2が1点、Ⅷ-3が5点（最上層が1点）、Ⅸ-1が1点、Ⅸ-2が1点、Ⅸ類が4点。

皿Ⅱ-1・aが1点（最上層）、Ⅲが2点、Ⅳ-1が1点、Ⅵ-1・aが1点、Ⅸ-1・bが17点（最上層が1点）、Ⅸ-2が2点。

碗（69～76）69は口縁部の小片である。灰白色の胎土、淡緑色をおびた白色を呈する。口径16.0cm（Ⅳ-1）。70の胎土は灰白色を呈し、釉は薄目で灰白色を呈する。白磁碗Ⅳ類で、69と同じであるが、高台の削り出しが若干深く高くなる。Ⅳ-2類に分類される。71は細く高く直立した高台のものである。胎土は灰白色を呈し、釉は淡緑黄色の釉がかかっている。体部内面に櫛で花文を描いている。内底見込みに浅い沈線状の段を有する（Ⅴ-4・b）。72は高台が比較的細く低いもので、体部は喇叭状に開き内外面無文である。胎土は白黄色で釉は緑黄色のものである。復原口径13.6cm（Ⅱ-1・a）。73～75は内底見込みの釉を輪状にカキ取ったものである。胎土は灰白色を呈し、75は白黄色を呈する。73はⅧ-1、74はⅧ-2、75は高台は比較的高く削り出されたもので、Ⅷ-3に類別される。76は口縁部に釉のかからない口禿のもので灰色の胎土である。やや空色を帯びた白色の釉で体部および高台部まで施釉されている。Ⅸ-1類。

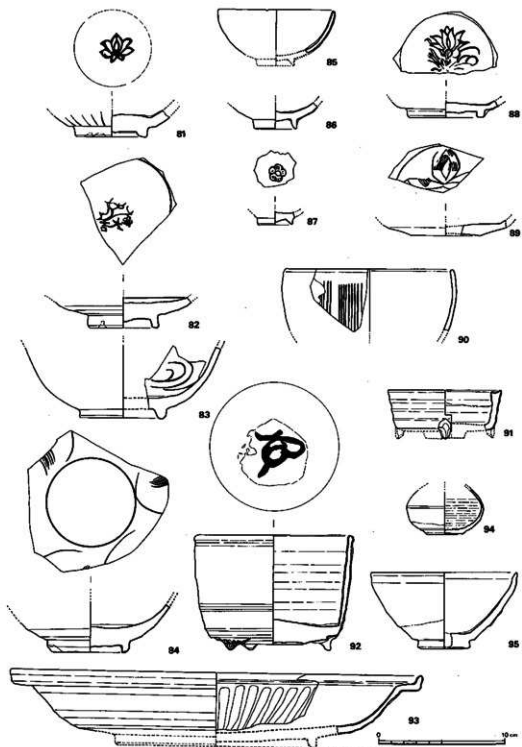
皿（77～79）77は見込みの部分の釉を輪状にカキ取ったもので、灰色の胎土で、濁黄緑色の釉である。外底見込みに墨書があるが判読できない（Ⅲ類）。78・79は口縁端部が口禿になるもので、灰白色の胎土でやや空色気味の白色を呈する。78は全面施釉したもの（Ⅸ-1・b）で、79は体部下半と底部には施釉されていない（Ⅸ-2）。78の口径9.6cm、器高2.7cm、79の口径9.4cm、器高2.3cmである。

その他の白磁

杯（80）深い杯形のもので全体に薄手で低い高台をもつ。胎土は灰白色で灰色の強い白色の釉が全面にうすく施釉されている。類例がないのでその他の磁器とした。

青磁

越州窯系碗Ⅰ-1が1点、Ⅰ-2が2点、Ⅱ-2・bが1点、Ⅱ-3が2点（1点が最上層）、龍泉窯系碗Ⅰ-1が29点（5点が最上層）、Ⅰ-3が1点、Ⅰ-4が5点、Ⅰ-5・aが25点（4点が最上層）、Ⅰ-5・bが16点（5点が最上層）、Ⅰ-5・cが6点（1点が最上層）、Ⅰ-7が3点（1点が最上層）、Ⅱが3点（1点が最上層）、Ⅲが3点（1点が最上層）



第25図 S X1200(フシヨク土)出土陶磁器実測図(3)

)、小椀Ⅰ-1・bが2点、Ⅰ-2が2点、Ⅲ-1・bが1点、Ⅲ-2・aが1点、Ⅲ-2・bが1点、皿Ⅰ-2・cが1点、杯の不明が2点、その他に青磁不明が4点(1点は口髷)、壺が1点、鉢が3点、香爐が2点ある。

椀(81~84) 81~84は龍泉窯系のもので、81の釉の発色は青味を帯びた緑色を呈する。外面体部に蓮弁を有し、見込みに花文をスタンプする(Ⅰ-5・c)。82は断面四角形を呈するが、深く削り出されている。見込みと体部の境に浅い沈線状のものがある。見込みに草花文と「大吉」のスタンプがある。83の高台は高く、底部の厚さが体部下半と同程度になる。釉は高台内面中心部付近を残して全面に施される。釉色は黄色味の強いくすんだ緑色を呈し、文様もシャープさを欠く。胎土中には鉄分が多いためか、露胎部分は赤茶色を呈する(Ⅱ類)。84は前述のものと同様な高台であるが、釉色は黄色味が目立つ緑色である。片彫り文様と櫛目をもつが、釉が不透明なため、線彫り風に見える(Ⅰ-7)。

小椀(85~87) 龍泉窯系のもので、85は内弯気味の丸味を持つ体部で、口縁部に浅い切り込みを入れ、輪花としている。口径9.2cm(Ⅲ-1・b)。86・87は高台および釉色に特徴がある。高台部先端を除いて全面に施釉され、露胎部分と施釉された境の部分は赤色に発色している。86は内外面無文(Ⅲ-2・a)、87は見込みに花文を貼付している(Ⅲ-2・b)。

杯(88) 龍泉窯系のもので、見込みに花文のスタンプがある。釉は厚目にかかり、高台見込みと畳付部には施釉されない。

皿(89) 小片であるが、見込みに櫛と線彫りの花文がある。外底部は施釉された後、釉をカキ取っている。

香爐(91・92) 龍泉窯系のもので、91は口径9.0cm、器高3.9cmのものである。釉調は、隆起した部分は灰色を帯びた緑色で、凹んだ部分は薄い緑色を呈する。施釉された全体に貫入がある。92は三足のもので、厚い底部から薄い体部がほぼ直立し、口縁端部は丸くおさめている。体部下位に2条の沈線をもつ。釉は淡緑色で厚目に施釉されている。内底の中心部は露胎で赤褐色を呈している。この部分に墨書がみられるが判読できない。外底部も露胎でレンガ色を呈する。口径12.6cm、器高9.2cmのものである。

その他の青磁

椀(90) 小片で全形を知り得ないが、深い椀形のものである。淡青色の釉がうすくかけられている。外面に9本の櫛目がある。復原口径13.2cm。

染付

SX1200の埋土の最上層から検出したものに染付が2点あるが、層位的に不明確で混入の可能性が考えられる。

大盤(93) 陰刻蓮花文大盤の小片であるが、口縁部は「く」の字状に外反させ、端部を直上につまみ上げている。内面には幅広の蓮弁をもつ。釉は淡緑色で厚目に施釉されている。復

原口径32.6cm。

中国製陶器

小壺(94) 小壺の破片で、内面には細かいロクロ目がみられる。胎土は淡茶色の精緻なものである。外面下位は露胎で、釉はうすくかけられ茶褐色を呈する。底部は糸切り雕しである。体部中位に1条の沈線がある。

天目(95) 厚い平底の高台で体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部をわずかに「く」の字状につまみ上げている。胎土は淡茶色の粗いものである。体部下半と底部には施釉されていない。釉は回転させ、4回没して施釉している。釉色は濁った柿色を呈している。

日本製陶器

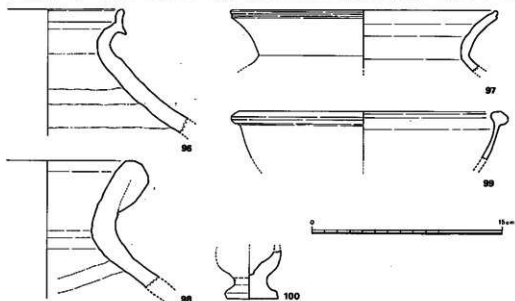
常滑壺(96・97) 96は小さなN字状口縁を有する。胎土は粗く、外面にはやや緑色を帯びた灰白色の釉がかかっている。97は口縁部を「く」の字状に外反させる。胎土は比較的精製されたもので淡茶色を呈する。

備前壺(98) 口縁部は折り曲げ玉縁にするもので、胎土は砂粒の混入が目立ち、灰色を呈する。内外面とも赤褐色を呈する。

その他の陶器

褐釉壺(99) 胎土は赤褐色を呈する粗いもので、口縁部は丸く肥厚させ、縁をつくっている。口縁部を除いて内外面に黒褐色の釉がかけられている。

灰釉瓶(100) 全形は不明であるが、瓶の底部と考えられる。胎土は灰白色の緻密なもので、



第26図 S X 1200(フシヨク土)出土陶器実測図(4)

須恵質のものである。外面と内面の一部に淡緑色の釉がかかっている。底部には糸切り痕が残り、釉はかかっていない。

SE1181出土土器（第27図）

青磁

碗（2） 大形の龍泉窯系青磁碗の底部破片で、灰白色の胎土に黄色味を帯びた淡い緑色を呈する釉を厚目にかけている。壺付から外底にかけては釉をかけておらず、赤褐色をなす。内底に花文のスタンプがみられるが、明瞭でない。

陶器

釜（1） 口径14.3cmほどの釜の破片で、灰黒色の胎土を硬質に焼成している。直立する口頸部の外面に5本を単位とした格子状文をめぐらす。内外面をハケ目調整しているが、胴部外面のそれは細かい。肩部に耳をつけ、穿孔している。外面には全体に煤が付着している。

以上の2点は井戸中からの出土である。掘方からは土師器（皿a、杯b）のほか、白磁（碗V-2・a、V-4・b、皿Ⅱ-1・a、Ⅲ-1各1点）、同安窯系青磁Ⅲ-1・a 1点、龍泉窯系青磁Ⅰ-5 5点、釜・摺鉢などの陶器の破片が出土しており、中世でも室町時代に降る傾向を示している。

SE1183出土土器（第27図、別表）

土師器

皿a（3・4） 口径8.8～9.0cm、器高1.0cmで、糸切りされた底部には板状圧痕がみられない。赤味のかかった褐色を呈する。

杯a（5） 口径12.8cm、器高3.2cm。底部は糸切りされ、幅広の板状圧痕がみられる。

以上のうち4は井戸中、3・5は掘方からの出土である。他に掘方からは土師器のほか、黒色土器A碗1点、白磁5点（碗Ⅳ-1、Ⅳ、Ⅴ、皿Ⅴ-1、瓶各1点）、同安窯系青磁3点（碗Ⅰ-1・b、皿Ⅰ-1・b、Ⅰ-1・b各1点）、不明青磁1点、陶器4点、土師質土器1点それに石鍋1点がそれぞれ破片で出土している。

SE1184出土土器（第27図）

土師器

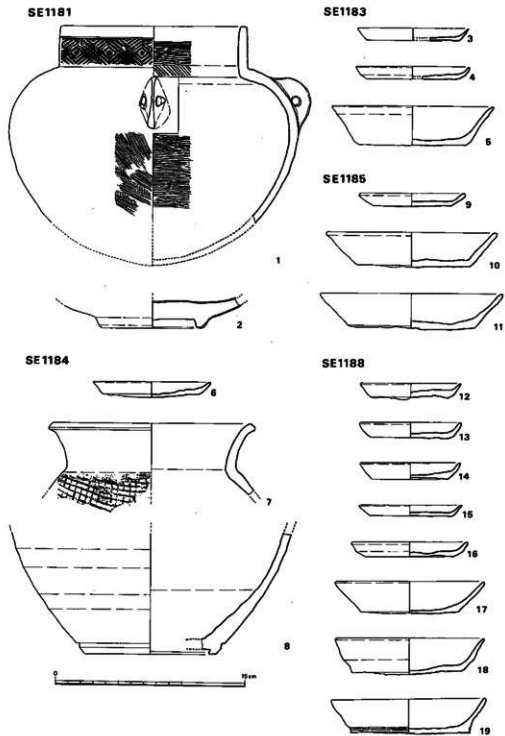
皿a（6） 口径9.3cm、器高1.3cm。ヘラ切りされた底部に板状圧痕がみられる。

須恵質土器

甕（7） 口径15.5cmに復原される甕片で、灰白色の砂を混じえない胎土をやや硬質に焼成している。口縁部の内外を横ナゲし、胴部内面をヘラ削りにする。外面には格子目状の叩きがみられる。

褐釉陶器

壺（8） 外表に黄色味を帯びた茶褐色の釉をうすくかけた壺の底部片で、淡い赤褐色の胎



第27図 井戸出土土器・陶磁器実測図

土を硬質に焼成している。他に同様の特徴をもつ別個体の壺片2点が出土している。

以上のほかに、土師器、白磁皿Ⅲ類2点、青磁1点、陶器4点などが出土している。

SE1185出土土器（第27図、別表）

土師器

皿a（9） 口径8.5cm、器高1.1cm。糸切りの底部に板状圧痕がみられる。

杯a（10・11） 口径13.4cm～14.4cm、器高2.8cmの杯で、平坦な底部は糸切りされ、板状圧痕がつく。

以上のほかに白磁碗Ⅳ類の小片1点が出土している。

SE1188出土土器（第27図、別表）

土師器

皿a（12～16） 器高にバラツキがあるが、口径は9.1cmをはかる16を除けば、8.0～8.1cmに集中する。すべて底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。12～15は井戸中から、16は掘方からの出土である。

杯a（17～19） 口径11.8～12.2cm、器高2.6～2.7cmをはかる。底部は糸切りされ、板状圧痕がみられる。平坦な底部にやや内湾気味の体部がつく。底部と体部の境には明瞭な稜を有する。皿a同様に、淡い茶灰色を呈し、細砂を含む胎土を硬質に焼成した例が多い。すべて井戸中からの出土である。

以上の土師器とともに陶磁器の小片が出土している。磁器のうち白磁8点（碗Ⅳ、Ⅴ-1、皿Ⅵ-2、Ⅶ-1各1点、不明4点）はすべて井戸掘方から出土している。青磁は掘方・井戸中からそれぞれ出土しており、掘方からは龍泉窯系3点（碗Ⅰ-4 2点、Ⅰ-6・b 1点）、同安窯系2点（碗Ⅰ-1・b、皿Ⅰ-1・a各1点）、井戸中からは龍泉窯系4点（碗Ⅰ-1 1点、Ⅰ-5 2点、小碗Ⅲ-2 1点）、同安窯系2点（碗Ⅰ-1・b 2点）である。

SE1189出土土器（第28図、別表、図版33・39）

土師器

全て糸切りのものである。

皿a（1） 口径8.6cm、器高0.9cmのものである。

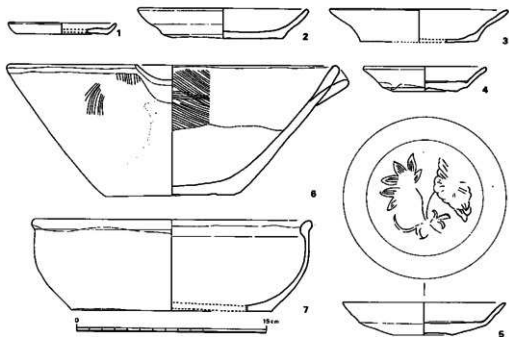
杯a（2・3） 口径13.5～14.1cm、器高2.4～2.6cmのものである。

白磁

碗Ⅳが2点、Ⅴが1点、Ⅵが1点、Ⅶ-2が1点、皿Ⅷ-2・b 1点がある。

皿（5） 胎土は淡茶白色で黒い細砂粒が入っている。軸は全体に厚くわずかに灰緑色を帯びた透明の釉がかけられている。内外面に貫入がみられる。内底見込みに草花文のスタンプがある。口径12.8cm、器高2.6cmである（Ⅶ-2・b）。

青磁



第28図 SE1189出土土器・陶磁器実測図

同安窯系皿Ⅰ-1・aが1点、龍泉窯系碗Ⅰ-1が1点、Ⅰ-5・bが1点、不明が1点ある。

皿(4) 同安窯系の皿でⅠ-1・aのものである。胎土は若干白味を帯びた灰色を呈する。胎土中に比較的大きな黒い斑点が認められる。釉は暗草色のガラス色の釉である。体部下半から底部には施釉されない。口径 9.8cm、器高 2.0cmで内外面無文のものである。

陶器

鉢(6) 瓦質の片口の鉢である。胎土は精良で砂粒は少ない。焼成は軟質で灰白色を呈する。内面および外面はハケ目調整をしている。内面の体部下半と底部は磨滅が著しい。口径 26.4cm、器高10.4cmをはかる。

盤(7) 胎土は粗砂を含み非常に粗いもので、黄灰色を呈する。焼成は堅い。釉は黄色を呈し、薄く施釉されている。外面底部と体部それに口縁部は無釉で、口縁端部は化粧土がある。復原口径22.4cm、器高 7.2cmである。この他黄釉盤1点と褐釉系のもの1点がある。

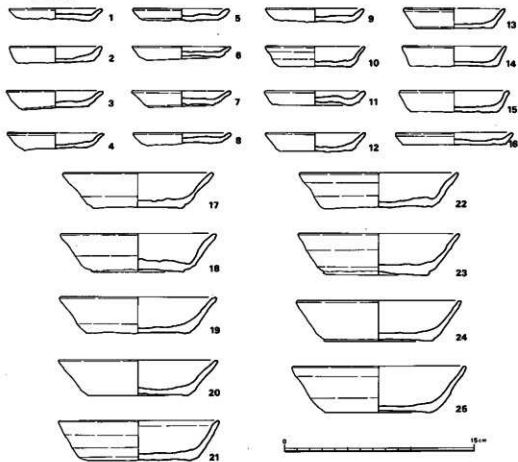
SE1190出土土器(第29図、別表)

土師器、白磁、青磁、染付、陶器が出土した。陶磁器はすべて破片である。

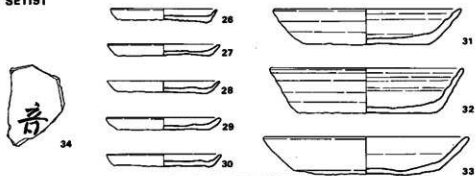
土師器

皿a、杯aがある。すべて底部を糸切りされている。2・4・5・8~12・14・15・18~22・24・25は最上層出土、1・3・6・7・13・23は井戸内出土、16・17は掘方出土である。

SE1190



SE1191



第29圖 井戸出土土器実測図

皿 a (1~16) 1~15は口径 7.5~8.8cm、器高 1.1~1.8cm。16は口径 9.3cm、器高 0cm。16は混入品と思われる。

杯 a (17~25) 口径11.8~13.6cm、器高 2.8~3.7cmである。

白磁

椀はⅣ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、皿はⅥ-1、Ⅸ、ほかには耳付盃の破片がある。

青磁

龍泉窯系椀はⅠ-1、Ⅰ-5、盤はⅢ、同安窯系椀はⅠ-1・b、皿はⅠ-1・bがある。

染付

器形不明の破片が1片ある(図版39-A右)。

陶器

瀬戸系の灰釉壺片が1片ある(図版39-A左)。

SE1191出土土器(第29図、別表)

土師器、白磁、青磁、青白磁、陶器が出土した。陶磁器はすべて細片であり、種類のみをとりあげた。

土師器

皿 a、杯 a がある。すべて底部を糸切りされている。

皿 a (27~30) 口径 8.4~9.0cm、器高 0.9~1.0cmである。

杯 a (31~33) 口径14.8~16.2cm、器高 2.9~3.0cm。33は大形のものである。

杯 (34) 底部破片と思われ、外面に「音」と墨書されている。外面はへら削りされ、内面にはミガキがある。調整などからみて、この土器は平安時代初頭以前のもので、混入品と思われる。

白磁

椀はⅣ-1・a、Ⅴ-3・c、Ⅴ-4・b、Ⅵ-1、Ⅶ-2、皿はⅡ-1、ほかには蓋の破片がある。

青磁

同安窯系の椀はⅠ-1・b、Ⅲ-1、皿はⅠ、龍泉窯系の椀はⅠ-4・b、小椀はⅠがある。

青白磁

合子1がある。

陶器

褐釉、黄緑釉、黒釉、黄釉などの破片がある。

SE1194出土土器(第30図、別表)

土師器

全て糸切りのものである。

皿 a (1・2) 口径 7.6~8.6cm、器高 1.1~1.2cmのものである。1は井戸中から出土したものである。

杯 a (3~7) 口径12.4~13.6cm、器高 2.6~3.2cmのもので、3・4・5と6・7のふたつに分けられる。

その他、陶器、黄釉盤 4点、常滑 4点、褐釉系壺 5点・甕 9点、天目 1点が出土した。

白磁

碗Ⅳが1点、V-4・bが1点、Vが3点、Ⅷが1点、Ⅷが2点、Ⅸ-2が1点出土している。

皿Ⅲが2点(うち1点はカキ取りが無い)、Ⅷが1点、Ⅸ-1が1点、Ⅹが1点、Ⅹの碗・皿と思われるもの4点と不明1点、青白磁1点がある。

青磁

同安窯系碗はⅠ-1・bが2点、Ⅰが5点、Ⅲ・Ⅳが1点。皿はⅠ-2が1点、Ⅰが1点出土している。龍泉窯系碗はⅠ-1が7点、Ⅰ-5・bが3点、Ⅰが1点。杯はⅢが1点、皿はⅠ-2・cが1点、不明1点が出土している。

SE1195出土土器(第30図、別表)

土師器

全て糸切りのものである。

皿 a (8) 口径 9.0cm、器高 1.0cmのものである。

杯 (9・10) 口径16.0cm、器高 2.6cmのものである。

白磁

碗はVが1点、Ⅷ-3が1点、皿はⅢが1点出土している。

皿(11) 胎土は灰白色で軸は薄目にかかり、内面見込みカキ取りのものである(Ⅲ)。

碗(12) 胎土は灰白色を呈し、軸は全体に薄目にかかっている。内面見込みはカキ取りである(Ⅷ)。

その他、陶磁、褐釉系 2点が出土している。

SE1196出土土器(第30図、別表)

土師器

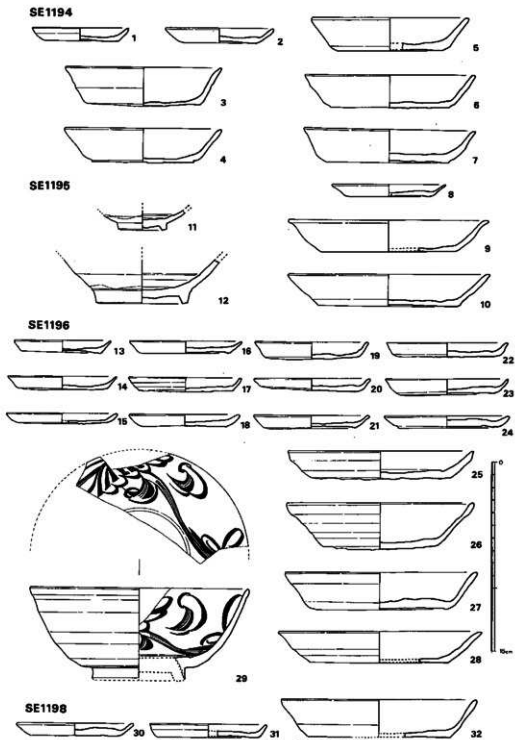
全ての糸切りのものである。

皿 a (13~24) 口径7.6~9.7cm、器高0.8~1.4cmのものである。13は若干小形である。

杯 a (25~28) 口径14.6~16.0cm、器高 2.4~3.7cmのものである。25は器高が低い。

白磁

碗はⅡが1点、Ⅳ-1・aが1点、Ⅳが3点、V-1が1点、V-4・bが1点、V-4が1点、Vが2点、Ⅷが1点、皿はⅢが1点、Ⅸ-1が1点出土している。



第30图 井戸出土土器・磁器実測図

青磁

同安窯系碗はI-1・bが5点、I-1が2点、皿はI-1・aが1点、I-1が1点出土している。龍泉窯系碗はI-2・bが1点、I-2が3点、I-4が1点ある。

碗(29) 胎土は暗灰色の粗いもので、軸はやや厚目に施釉され、やや灰色を帯びた緑色を呈する。蓮華文と葉を横から見た文様を入れている(I-2・b)。

SE1198出土土器(第30図、別表)

土師器

全て糸切りのものである。

皿a(30・31) 口径9.2cm、器高1.0~1.1cmのものである。

杯a(32) 口径15.4cm、器高3.0cmのものである。

白磁

碗はIV-1が2点、V-2・bが1点、V-4・aが1点、VII-2が1点である。皿はIIIが1点出土している。その他白磁1点、瓶が1点ある。

青磁

碗はI-5・bが1点、I-5・cが1点、その他不明が1点ある。

その他の陶磁器

褐釉系のもの1点、黄釉盤3点、その他中世陶器が1点ある。

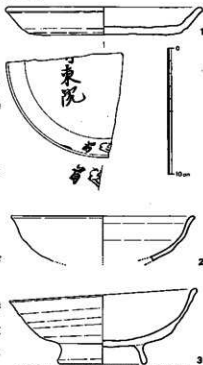
SE1320出土土器(第31図、別表、図版33)

須恵器

皿(1) 井戸底から検出したが流入品と思われる。ヘラ切りした外底を簡単にヘラで調整し、体部・内底に横ナデないしナデをほどこす。外底および体部外側に墨痕のうすい墨書がみられる。外底のそれは「□□東院」と判読できる。『延喜五年観世音寺資財帳』に「東院」と称する建物の記載はないが、その用器章に「東院薬鑿参柄 長一尺一寸四分」とある。それに相当すると思われる。体部には「□□首」と墨書されている。

土師器

碗(2・3) 2は丸味をもって内弯しつつ立ち上がる体部を口縁部で外反させている。高台の有無は不明。3は井戸底から出土した完形の高台碗で、SE1320の時期の一点を与えるものである。底部から体部にかけて大きく屈曲し、その境に稜を有する。厚味のうすい体部は



第31図 SE1320出土土器実測図

ほぼ直線的に立ち上がるが、口縁部を丸く肥厚させ、やや外反する印象を与える。外面を横ナデ、内面をミガキで調整するが、内面にはへら状工具のアタリがみられる。

SE 1202 出土土器 (第32図、別表)

土師器

全て糸切りのものである。

皿 a (1・2) 口径 8.2~9.6cm、器高 0.8~1.4cmのものである。

杯 a (3・4) 3は口径12.6cm、器高 3.3cmのものである。4は口径・器高とも大きく、口径19.3cm、器高 2.9cmのものである。

瓦器

碗の小片が5点出土している。

白磁

碗Ⅱが1点、Ⅳ-1・aが4点、Ⅳが9点、Ⅴ-3・bが1点、Ⅴ-4・bが1点、Ⅴが3点、Ⅴ-2が3点、Ⅸが4点(うち1点に隆線がある)、その他に不明のものが5点ある。それに皿Ⅲが2点、Ⅳ-1が1点、Ⅸ-1が2点ある。

青磁

同安窯系碗Ⅰ-1・bが4点、Ⅲ-1が1点、皿Ⅰが1点。龍泉窯系碗Ⅰ-1が3点、Ⅰ-2が2点、Ⅰ-4が2点、Ⅰ-5・aが1点、Ⅰ-5・bが1点、Ⅰ-5・b~dが6点、Ⅰ-6・cが1点、小碗Ⅰ-2が1点、Ⅰ-4が1点。その他に不明青磁が4点、青白磁合子2点、壺が2点ある。

小碗(5) 龍泉窯系のもので、高台は断面四角で、釉の発色は青味を帯びた緑色を呈する。無文で、体部は高台部からやや内弯しながら立ち上がる。口径10.2cm、器高 4.3cm(Ⅰ-4)。

碗(6) 小片であるが、外面に蓮弁を削り出し、さらにその上から櫛目を縦に入れるものである。口縁部は内弯し端部を直に引き出している。口径11.6cm。

その他の陶器

黄釉のものが3点、褐釉系のもので9点、須恵質の措鉢が3点ある。

SK 1203 出土土器 (第32図、別表、図版39)

土師器

糸切りのものとへら切りのものがある。

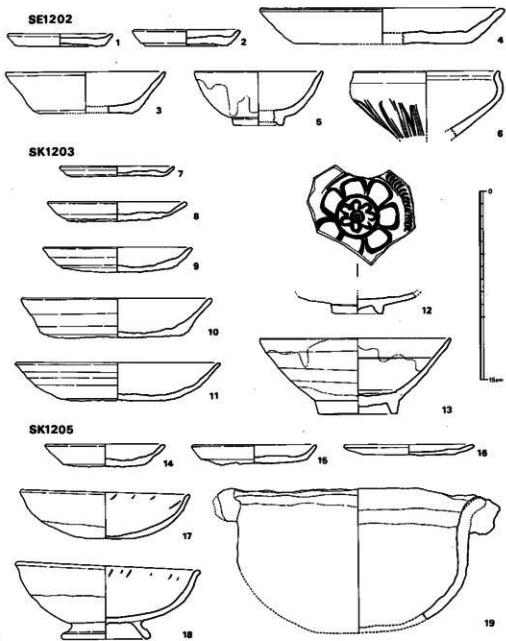
皿 a (7・8) 口径 9.0~11.0cm、器高 0.8~1.6cmのものである。

皿 (9) 口径12.0cmのものである。

杯 a (10・11) 口径12.0~16.2cm、器高 2.0~3.0cmのもので、11はへら切り離しである。

白磁

碗Ⅳが2点、Ⅴが1点、Ⅴ-4・bが2点、Ⅴ-4が1点ある。



第32图 井戸・土堀出土土器・磁器实测图

碗(13) 内底見込みの軸を輪状にカキ取ったものである。見込みに段を有するもので、その段の内側の軸を輪状にカキ取っている。体部は直線的に外上方へ延びる。口径15.2cm、器高6.0cm(Ⅷ-2)。

その他の磁器

碗(12) 黒褐土出土の磁器18と胎土・釉調とも類似し、見込みのスタンプも同じである。その他に褐釉系蓋が2点、不明のものが1点ある。

S K 1205出土土器(第32図、別表、図版33)

茶灰土から切り込むもので、土師器・黒色土器が出土している。

土師器

全てヘラ切りのものである。

皿a(14-16) 口径9.5~10.3cm、器高0.8~1.8cmである。15には油煙が付着している。

丸底の杯(17) 口径13.4cm、器高3.6cm。内面はヘラミガキを行ない、右回りにコテあて痕が放射状に残る。体部下位に指頭圧痕が残る。

碗(18) 口径14.6cm、器高5.8cmのもので、丸底の杯に高台を貼付したものである。口縁部内面に右回りにコテあて痕が残り、外面体部下位に指頭圧痕を有する。

土鍋(19) 底部は欠損しているが土鍋と考えられる。胎土は砂粒の混入が多く、粗製の土器である。焼成は硬質で、外面の全面に煤が著しく付着し、内面は黒変している。口縁部の2カ所に取手状のものがついている。内面の口縁部付近はナデ、体部は削り調整を行っている。

その他の陶磁器として、白磁碗Ⅷ-2が1点、中国製陶器片が2点出土している。

S K 1204出土土器(第33図、別表、図版39)

出土した土器は土師器・陶磁器である。

土師器

出土した土師器にはヘラ切りと糸切りがある。

皿a(1-13) 口径8.6~9.8cm、器高0.9~1.7cmのものである。1・2はヘラ切りで、3~13は糸切りである。

杯a(15-24) 口径14.6~16.6cm、器高2.5~3.3cmのものである。15・16はヘラ切りで、17~24は糸切りである。

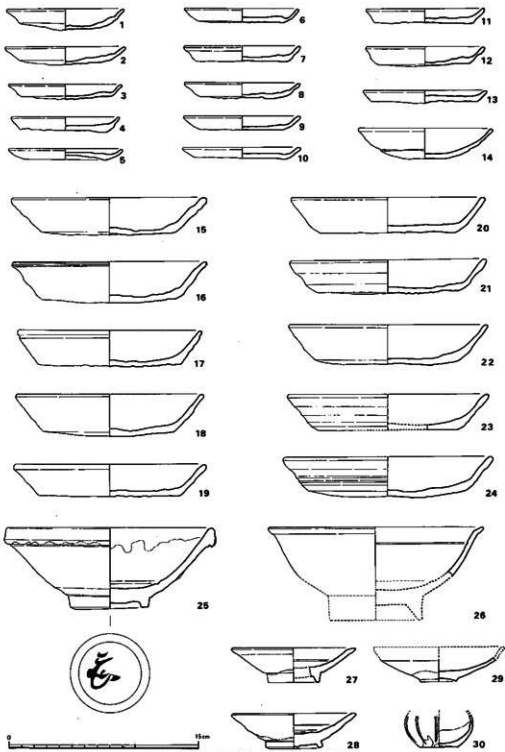
瓦器

皿(14) 口径10.6cm、器高2.5cmのもので、底部切り離しはヘラ切りである。

白磁

碗Ⅳ-1・aが1点、Ⅳ-2が1点、Ⅴ-2・bが1点、Ⅶ-1が1点、Ⅶ-2が5点、皿Ⅲが4点、Ⅵ-1・aが1点、Ⅵ-1・bが1点ある。

碗(25・26) 25は口縁部を玉縁にするもので、胎土は粗く、淡茶白色を呈する。高台は削



第33图 S K 1204出土土器·陶磁器实测图

りが深く、釉は灰色の強い白色を呈する。口縁部に釉溜りがみられる。内外面に大きな貫入があり、気泡が多くみられる。高台見込みに墨書があるが、判読できない。口径16.0cm、器高6.5cm (Ⅳ-2)。26は破片であるが、口縁部の形態および釉調から、細く高い直立した高台を有するものである (Ⅴ-2・a)。

皿 (27-29) 見込みの部分の釉を輪状にカキ取ったものである。28は器肉が厚く、高台も細い。27は口径9.8cm、器高2.8cm、28は口径10.0cm、器高2.8cm (Ⅲ類)。29は体部から口縁部にかけて、器肉が薄いものである。口縁部を欠くが、体部上位で屈曲し、沈線をもつものと考えられる (Ⅵ-1・a)。

小壺 (30) 小片で全形を知り得ないが、小壺になると考えられる。胎土は灰白色の粗いもので、胴部下位は釉がかかっている。内面は下位のみ施釉されている。釉は薄目で、黄色味を帯びた白色を呈し、細かい貫入がみられる。胴部にはウリ割り状の凹みがある。

青磁

越州窯系碗Ⅰ-1が1点、同安窯系皿Ⅰ-1・bが1点、龍泉窯系碗Ⅰ-4が1点ある。

SK1212出土土器 (第34図、別表、図版38)

出土した土器は少量の土師器と陶磁器である。土壌の規模は明らかでないが、黒褐色土層に切り込んだものである。

土師器

全て糸切りのものである。

皿a (1-4) 口径9.2~9.4cm、器高1.0~1.1cmのものである。

杯a (5) 口径16.2cm、器高3.2cmのものである。

白磁

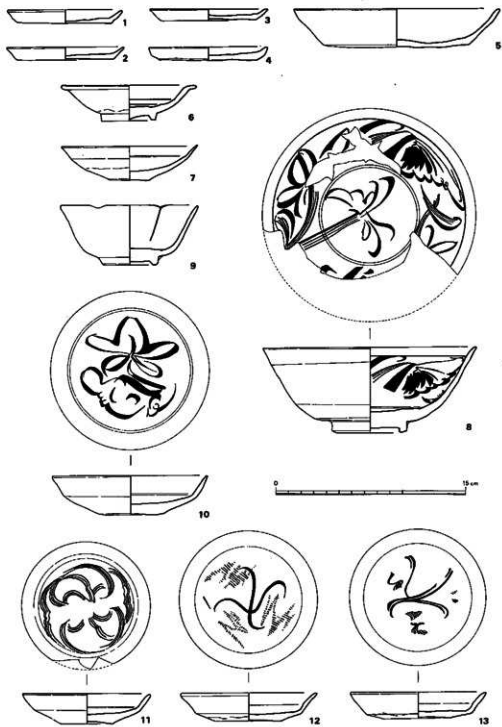
皿のⅢが2点、Ⅳ-1・bが1点、不明のものが2点ある。

皿 (6・7) 6は見込みの部分の釉を輪状にカキ取ったもので、釉は全体に薄く、体部下半には施釉されず、釉は灰白色を帯びている。口径10.8cm、器高2.8cm (Ⅲ類)。7は胎土は粗く、灰白色を呈するが、釉色は黄色味の強い白色を呈する。釉下に化粧土を使用し、体部下半には施釉されず、体部上位で屈曲し、屈曲部内面に沈線状の軽い段をもつ。口径10.8cm、器高2.7cm (Ⅵ-1・a)

青磁

同安窯系碗のⅠ-1が1点、皿Ⅰ-1・bが2点、龍泉窯系碗Ⅰ-2・bが1点、小碗Ⅰ-1・aが1点、皿Ⅰ-1・aが2点、Ⅰ-2・bが1点、不明が2点ある。

碗 (8) 8は龍泉窯系のもので、断面四角の高台を有する。釉は濃緑色で、内面に蓮華文を片彫りしている。花文と蓮華の葉を横からみた文様を入れている。口径16.8cm、器高7.8cm (Ⅰ-2・b)。



第34图 S K 1212出土土器・磁器实测图

小椀(9) 龍泉窯系のもので、前述のものと同調、胎土とも似ているが、内面に隆線による区分けがみられ、口縁部に輪花をもつ。口径10.8cm、器高4.7cm(I-3)。

皿(10-13) 10は龍泉窯系のもので、体部中位で屈曲し、口縁部は直に薄く引き出されたものである。軸はやや厚目にかかり、灰緑色を呈する。内面見込みにヘラで片彫りの花文(椀I-2・bのモチーフに相似する)を有する。口径12.4cm、器高3.1cm。(I-1・b)。11も龍泉窯系のもので、前者に比して小形のもので、やや明るい緑色を呈する。内底見込みに花文を有するが施文具が前者と異なり、櫛状のもので描かれている。口径10.1cm、高さ2.4cmを測る(I-2・b)。12は同安窯系のもので、体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有する。内面見込みにヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。口径10.8cm、器高2.2cm(I-1・b)。13も同安窯系のもので、前者と施軸および内底の施文も類似しており、櫛目が若干少ない。口径10.8cm、器高2.1cm(I-1・b)。

SK1213出土土器(第35図、別表、図版34)

土師器、白磁、青磁、陶器が出土した。土師器は完形に近いものが多数出土したが、陶磁器はすべて細片である。

土師器

皿a・b・c、杯a、壺形土器がある。すべて底部を糸切りされている。

皿a(2・4-11) 口径7.4~8.4cm、器高1.0~1.6cmである。

皿b(1・3) 1は口径6.6cm、器高1.4cm。3は口径7.8cm、器高2.0cm。皿aと比べ口径に対して器高の割合が大きくなる形のものである。

皿c(12-14) 口径7.9cm~8.5cm、器高2.3cmで底部中心に小孔をもつ。口径は皿aと等しい。底部外面は高台貼付後に横ナデが施されるため、糸切り痕は消えている。

杯a(16-20) 口径11.8~14.8cm。器高2.3~3.5cm。28・29は杯bに近い形である。

壺形土器(15) 口径7.7cm、器高3.5cm、底径6.3cmである。

白磁

椀はV-3・c 1点、V-4・b 1点、類別不明6点。皿はⅢ 1点、Ⅸ 2点がある。

青磁

龍泉窯系の椀はI-1 1点、I-5・a 1点、I-5 2点があり、ほかにどの窯系に属するか不明のもの2点がある。

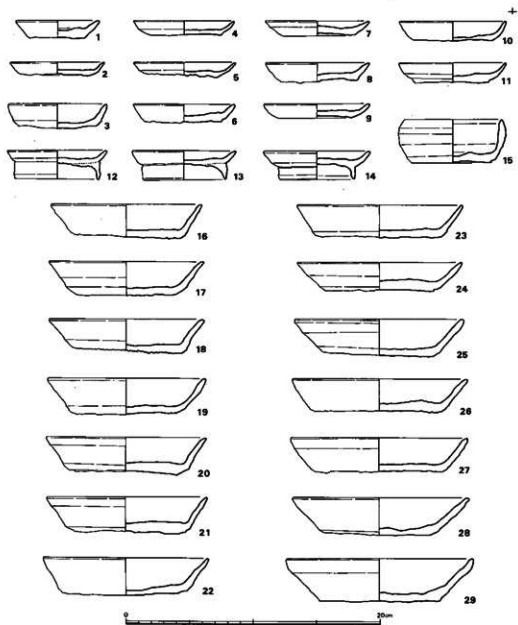
陶器

褐釉の破片がある。

SK1270出土土器(第36図)

土師器

皿 口径17.0cm、器高3.9cmで皿形をなすが、杯に入るものかもしれない。体部中位で屈曲



第35図 SK 1213出土土器実測図

をもち、口縁部はそこから直立して横ナデが施される。内面にも横ナデが施されている。底部は丸味をもって下方に突出した形であるが、その外面は丁寧な手持ちによるへら削りがなされるために、器壁は薄く仕上げ



第36図 SK 1270出土土器実測図

られている。胎土は砂粒を含まない精良なものである。土器はこの1点が壙底近くで出土しただけである。

S K1280出土土器 (第37~40図、別表、図版30・31)

多量の須恵器・土師器および瓦・輪羽口などが出土した。土壌は灰層を挟んで上下2層となっており、それに従って記述する。

上層の須恵器

杯蓋(1~4) いずれも天井部をヘラ削りし、体部を横ナデしている。1・2・4は天井部と体部との境に稜をもつ。口縁端部の内側に浅い沈線を入れ、端部の断面をにぶい嘴状にする。これに対し、3の口縁端部はシャープで直角に内折させたようにつくる。稜もみられない。1・4の内面全体に墨が付着しており、硯として使用されたものであろう。

杯(5~14・19) 5~8は無高台の杯で、体部は直線的に立ち上がるが、やや外反するものもみられる。体部・内底は横ナデないしナデで調整されるが、外底はヘラ切り離しの後に未調整のままである。7・8の外底に墨書がみられ、7は「杯」、8は不鮮明であるが、「□」_杯と読める。

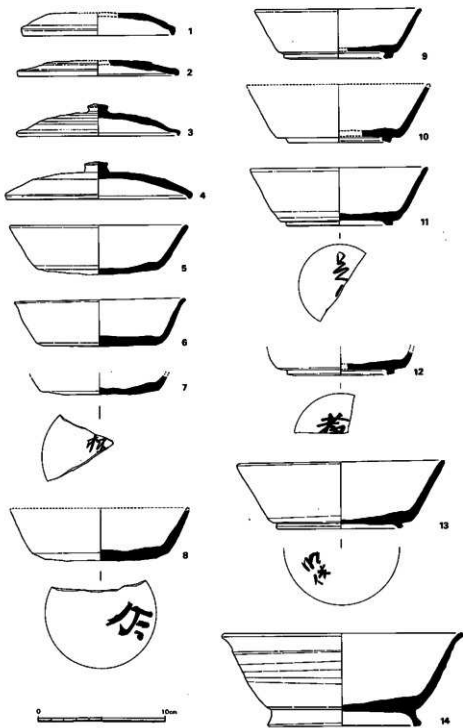
9~14・19はいずれも高台杯で、5・6のような形態の杯に高台を付けた例が多い。9~13・19の高台は杯部外底の端よりも内側に付けられ、直立する例が多いが中には13のように外方へ張り出し気味のものもある。調整の手法は無高台の杯に通じている。これらに対し、14の体部は全体に丸味をもち、他例にくらべ口縁付近がより大きく外反する。外底の端に大きく外方に張り出す高目の高台がつけられる。内面全体に墨の付着がみられる。11~13・19には外底に墨書があり、11は「是□」、13は「御供」、19は文字ににじみがあるが「□人」、と読めるが、12は文字に重複があり判読できない。

皿(15~18) 体部・内底を横ナデないしはナデで仕上げしており、外底はヘラ切り離しにする。15のようにヘラ切り後にナデ調整する例もある。16は内面全体に墨が付着しており、外底に墨書のごく一部分を認める。18の外底の墨書は「稲□」_実と読める。

壺(20) 薄手につくられた壺の口縁部付近の破片であるが、胴部に相当する部分の出土はなかった。

上層の土師器

杯(21・23) 21は無高台の杯で、平坦にヘラ切りされた底部から、内弯しつつ立ち上がる体部が特徴をなす。精選された胎土を用いるが、焼成はやや軟質でもろい。赤茶色を呈する。体部を横ナデ、内底をみがいている。23は高台杯で、ほぼ直線的に立ち上がる体部と、丁寧に水平にヘラ切りした後外底の端から5mmほど内側に付けられた低目の高台とからなる。内面は丁寧に細かな横方向のヘラみがきで調整される。外面の調整は残りの状態がよくないが、やはりヘラみがきと思われる。



第37图 S K 1280上層出土土器実測图(1)

皿 (22) 口径20.5cm、器高 2.2cmほどの大皿で、高台碗同様体部の内外をていねいにへらみがきしている。外底にはていねいなへら削りがみられる。また外底にはかすかに墨痕がみられるが、文字というよりも文様と思われる。

下層の須恵器

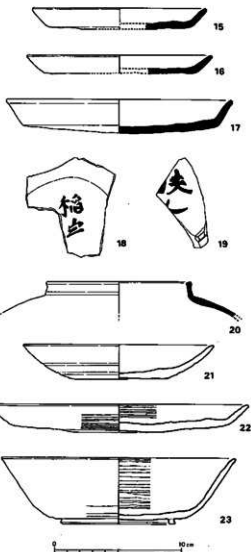
杯蓋 (24・25) 天井部と体部との境にそれほど明瞭な稜を有さない杯蓋で、ことに24は口縁端部のつくりを含めて上層出土の杯蓋3と類似する。いずれも全体をナデ調整で仕上げている。

蓋 (26・27) 杯蓋とは別に復原口径23.9、25.4cmをはかる大形の蓋が2点出土した。天井部をへら削りし、体部を横ナデにする調整の方法や口縁端部を含めた形態に杯蓋との類似がみられる。身に相当する器種の出土はなかったが、黒褐色土層出土の須恵器高台皿(第16図8)のようなもの考えることができよう。26の内面は全体に墨の付着がみられた。

杯 (28~31) いずれも高台杯で、破片としては小さい。全形をうかがいうる28は、わずかに外反しながら直線的に立ち上がり横ナデ調整される体部と、へら切りされた外底の端に低い高台を付けた底部とからなる。31はおそらく上層出土の高台杯14のような形態をなすと思われるが、内外とも全体をていねいに

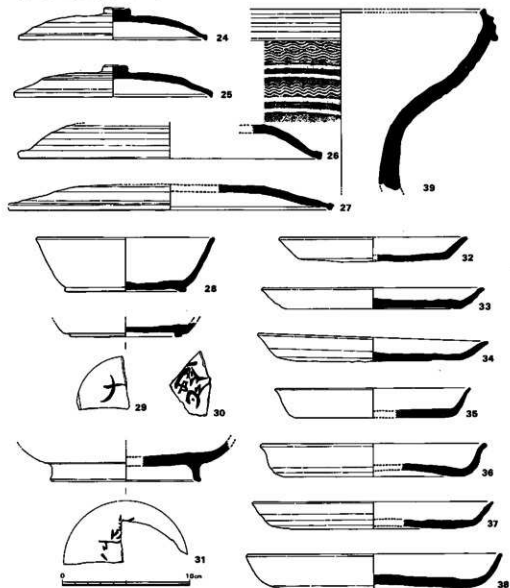
横ナデ・ナデで調整されている。内底はよく磨かれているが、墨の付着がみられることからみて、硯として使用されたものであろう。29・31の外底および30の体部外面に墨書がみられるが、判読しがたい。

皿 (32~38) 体部の立ち上がりによって、短くまた大きく外方に広がる32~34と、これらにくらべやや直立に近く立ち上がり深味のある35~38の二種がある。しかし底部をへら切りし、体部・内底を横ナデないしはナデで仕上げる調整の手法は共通している。

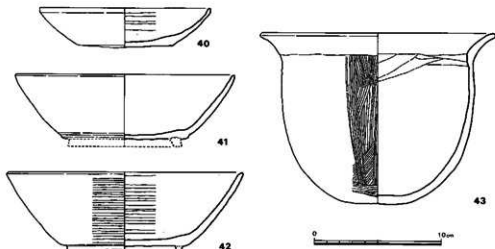


第38図 S K 1280上層出土土器実測図(2)

甕 (39) 口縁端部の直径を40.4cmに復元される大形の甕の破片である。口縁の端を「く」字状に内弯させ、外側に突帯を貼付する。突帯の貼付は成形後横ナデ調整を加え、2条1組計2組の凹線をめぐらしその間に波状文を構插きした後に行なっており、そのため上段の波状文の一部は突帯下にはいる。突帯にはさらに2条の凹線をめぐらしている。なお頸部内側の一部に目の粗い布痕を認めうる。



第39図 SK 1280下層出土土器実測図 (3)



第40図 SK 1280下層出土土器実測図(4)

下層出土の土師器

杯(40~42) 41は無高台の杯で、水平にヘラ切りされさらにナデ調整された底部と内湾しつつ立ち上がる体部とからなる。体部外面はおそらくヘラみがきされたと思われるが剥落がいちじるしい。内面はヘラ削りの後に横ナデで調整している。精選された胎土を硬質に焼成している。赤茶色を呈する。

41・42はほぼ直線的に立ち上がる体部と、水平にヘラ切りされ稜のやや内側に高台を付けた底部からなる高台杯である。淡い赤茶色を呈する。41の体部はほぼ完形に近いが高台をまったく欠く。体部外面から底部にかけて黒色の漆状の付着が全体にみられるが、それは凹部をなす高台欠落部にもおよんでおり、実際には無高台の杯として使用されている。体部内外を横ナデ、底部内外をナデで調整している。42は低い高台を付けている。体部内外面ともに平行の細かなヘラみがきをていねいに加えている。

甕(43) 多少いびつな形をした小形の甕で、色調・胎土などその他の土師器と特徴を異にする。体部外面を比較的目的の細かな縦方向のハケ目、内面を下から上への方向のヘラ削り、で調整している。口縁部の内外は横ナデにしている。茶褐色を呈するが火にあたったため赤変しており、内面に煮物の痕跡が黒色化して残る。

SK 1285出土土器(第41図、別表、図版32)

須恵器、土師器が出土したが、土師器はいずれも小片であった。須恵器の多くには墨書がみられる。

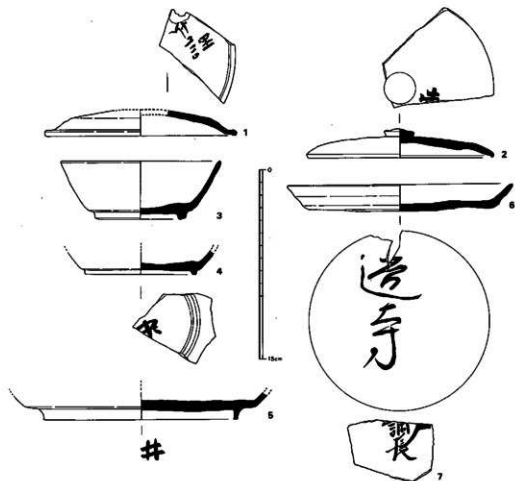
須恵器

杯蓋(1・2) 天井部をヘラ削り、体部を横ナデしている。2は天井部をさらにナデ調整

している。口縁端部には若干の相違があるが、ともに内面に浅く凹線をつけ、わずかに嘴状をなしている。1は内面に墨が付着しており、硯として使用されたものであろう。外面にはかすかに墨書がみられ、「□□」と判読される。2の外面にも墨書があるが判読できない。

杯（3・4）ともに小片であるが、3は全体をうかがいうる。直線的に立ち上がる体部の高台杯で、横ナデ調整されている。外底に墨書がみられ、3は残存が悪く判読できないが、4は「中」である。

皿（5～7）5は丁寧にヘラ切り離された底部に細くつくられた高台を付けている。外底の中央に「井」と墨書されている。6・7は高台の付かない皿で、6はほぼ完形である。6の外底には他例とは趣きを異にする雄渾な墨書がみられる。「造寺」とも「道寺」とも読め判断に苦しむが、字勢からみて「造寺」と読みうる可能性が強い。7の外底には重複して墨書さ



第41図 SK 1285出土土器実測図

れており、先に書かれた細字の方は「調長」と読める。

以上、S K 1280・S K 1285出土の土器について述べた。

S K 1280出土土器については上下二層に分けて記述した。須恵器をみれば、杯の良好な例を下層に欠く。杯蓋・皿についてはより古式の皿35～38のタイプが上層に含まれない。逆に上層出土の杯14は上下層出土の他の杯よりも形態的に先行する時期のものである。しかし全体には共通する部分が多く、両層に先後関係を求めるほどの差はない。土師器は上下層ともに杯がみられる。相対的には下層の杯の体部の方が立ち上がり急で内湾の傾向にある。しかし高台杯の外底の端よりもやや内側に低目の高台を付け、器表をこまかくへらみがきする調整手法に共通性がある。すなわち須恵器・土師器からみるかぎり、S K 1280出土の土器は若干の新旧の復合があるが、全体に一括資料として把握され、時期観を求めるといえる。

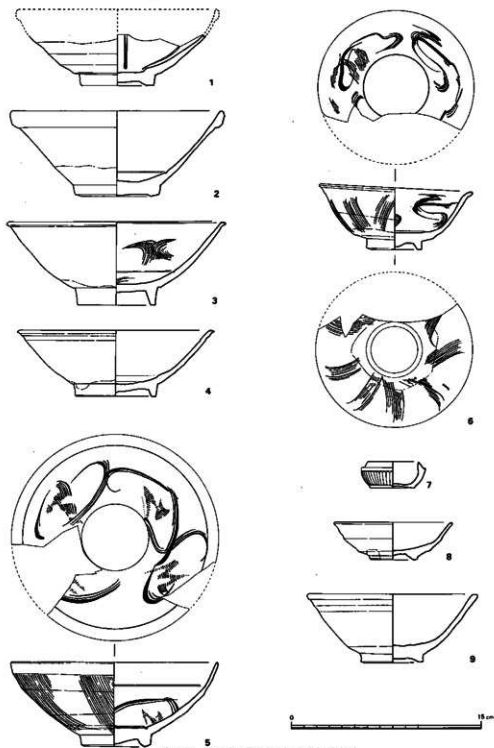
S K 1285出土土器は実測に耐えうる例はすべて須恵器であり、かつまたすべて墨書されている。しかし器形の特徴からみてS K 1280と同時期に考えられる。

S K 1280・S K 1285は茶灰土層に切り込んでつくられた土壌であった。茶灰土層出土の土器とS K 1280・S K 1285と土器を比較すると、これもまた明確な時期の相違を見出すことができない。したがって、S K 1280・S K 1285出土の土器についても、8世紀中頃ないしはそれをやや降る時期に属すると考えておきたい。

その他の遺構出土磁器 (第42図、図版40)

白磁

碗(1~4) 1の高台は外面を直に、内面を斜めに削り出されたものである。体部外面下半はへら削り調整をしている。口縁部を欠損しているが、小さな玉縁を持つと考えている。見込みで段を有し、体部内面を隆線で分割している(Ⅱ-2・b)。釉は全体に薄目かけられ、体部外面下半には施釉されず、釉色は黄色味を帯びた白色を呈する。釉全体に貫入がみられる。2は口縁部に大きい玉縁を有するもので、高台は幅広で、削り出しが浅いため底部の器肉も厚くなる。内面見込みに波線状の段をもつ。胎土は粗く、大かた灰色気味の白色を呈する。胎土中には黒い細粒が入っている。釉色は灰白色を呈し、若干厚目に施釉されるが、外面の体部下半と底部には施釉されない。口径16.6cm、高さ6.8cmのものである(Ⅳ-1・a)。3は細く高く、直立した高台を有するものである。胎土は灰白色で、灰色の強いものが比較的多い。釉は薄く、体部と高台部の境付近まで施釉するが、一部高台部までかけられているものもある。外面は口縁部近くまでへら削りしている。口縁部を外反させ、端部を水平にするもので、体部内面に帯で花文を描いている。内底見込みに浅い波線状の段を有する。口径17.4cm、高さ6.6cmのものである(Ⅴ-4・b)。4は内底見込みの釉を輪状にカキ取ったものである。口縁部を外反させ、端部を平らにしている。内底の口縁部付近と見込み近くに細い波線を1条入れている。口径15.6cm、高さ5.3cmのものである(Ⅵ-1)。



第42図 5 その他の遺構出土磁器実測図

青磁

碗(5) 5は同安窯系のもので台形状の厚い高台を有し、体部は高台部からやや内弯気味に外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。内底見込みと体部との境に段を有し、また内面、上位には沈線を入れている。釉は全体に薄くかけられている。外面には細かい櫛目を有し、内面にはヘラと櫛による花文をもっている。

小碗(6) 6は同安窯系のもので台形状の高台を有する。高台削り出しに特徴がある。体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反させている。内面体部には櫛とヘラによる文様があり、外面体部には細い櫛目文(9~14本単位)を放射状に施している。櫛目は下から上方へ施している。釉は薄くかけられ、外面体部下位と底部には施釉されていない。口径12.2cm、高さ5.0cmのものである(I類)。

合子(7) 7は青白磁の印籠形合子の身の部分である。体部に菊座スタンプを持ち、弁は30個ある。体部中位以下と底部、それに蓋受けの部分には施釉されていない。釉は薄目にかけられ、灰色を帯びた淡青色を呈する。口径4.0cm、器高2.1cmの完形のものである。

その他の青磁

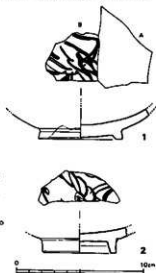
小碗(8) 朝鮮系青磁で、胎土は茶褐色の砂粒を多く含んだ粗いもので、陶質に近いものである。釉は薄目にかけられ、壺付部を除いて全面に施釉され、体部の一部は露胎となっているところもある。とくに、底部ととくに高台部見込みは白っぽい釉が厚くかかり気泡がみられる。内底に4カ所の重ね焼きの痕がある。口径9.3cm、高さ3.0cmのものである。

碗(9) 8と釉調は似ているが、胎土は灰白色を呈する。釉は全面に施され内外面に貫入がみられる。前者に比べ保存がよく光沢がある。高台は浅く削り出している。内底と壺付部に5カ所の重ね焼き痕がある。口径13.4cm、高さ5.5cmのものである。

安南陶器(第43図、図版36)

(1) 2カ所の遺構から出土した破片が接合したものである。AはSX1200出土、BはSD1230A出土のものである。全形を知り得ないが、体部はやや内弯気味に大きく開く碗形のものと考えられる。高台は低く削り出され、高台外面の先端部は軽く面取りしている。胎土は黄白色を呈する。釉は高台部を除いた内面と体部外面に全体にうすく施釉されている。内面には花文の染付けがあるが、風化が著しく鮮明でない。とくにA片はわずかに文様が知れるのみで明確でない。高台部見込みには小豆色の釉(沈釉)を薄く塗っている。

(2) 第5次調査(観世音寺東南隅、昭和45年)において出土したもので、この機会に報告しておきたい。底部の半分が残存しているもので、体部は不明である。高台は1に比べ、細く直立する高



第43図 安南陶器実測図

いもので、内面および体部外面と高台部外面には透明釉がかけられている。下地に化粧土を施しているため乳白色を呈する。また、高台見込みには1と同様に小豆色の渋釉が薄く塗ってある(1より黒っぽい)。畳付部と高台内面の下位は露胎である。前者同様、内面には藍色(ブルーブラックのインクの色に近い)で文様を描いている。高台径は5.8cmを測る。これは保存状態が良好で、染付文様が鮮やかである。出土した層位は、床土の最下である。

その他の陶磁器(第44図、図版40)

床土およびその下層の茶褐色層から出土した陶磁器について記述する。

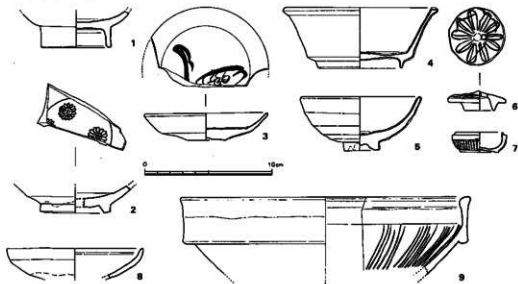
白磁

碗(1・2) 1の胎土は純白できめ細かく、釉も全体に薄く釉色は乳白色を呈する。細く高い高台のもので、全面に施釉されているが、畳付部は釉をカキ取っている。高台径は5.5cmである(Ⅰ-3)。2は口縁部に釉がかからないいわゆる口禿のものである。胎土は灰白色を呈し、釉は薄く若干空色を帯びた灰白色を呈する。高台は台形状に削り出し、高台部には施釉されていない。内面見込みと体部の境には軽い段をもつ。また見込みには花文のスタンプを有する(Ⅸ-b)。

青磁

皿(3) 龍泉窯系の青磁皿で、体部中位で屈曲し、口縁部は直に薄く引き出されたものである。釉は厚目にかかり濃緑色を呈する。内底見込みにヘラによる魚文がある。外底は施釉の後に釉をカキ取っている。復原口径9.8cm、高さ2.2cm(Ⅰ-2・b)。

杯(4) 龍泉窯系のもので体部下位を「く」字状に屈曲させ、ほぼ直線的に外上方に立ち



第44図 その他の陶磁器実測図

上がる。口縁部を外反させ、平坦な面をなしている(Ⅲ-1-a)。復原口径12.6cm、高さ4.8cm。

その他の磁器

小椀(5) 無文の小椀で、小さい高台を有する。体部は高台部からやや内湾しながら立ち上がる。釉はやや厚目にかかり、高台部および見込みを除いては全面に施釉されている。釉の色は灰白色気味の緑色を呈する。復原口径 9.6cm、高さ 4.4cm。

青白磁

合子(6・7) 6は壺形合子の蓋で、天井部の中心が山形になっている。天井部には花文が施されている。釉は薄目にかかり、淡青色を呈する。頂部近くに径 0.4cmの穴があげられている。7は印籠蓋形合子の身の部分である。胴部は菊座のスタンプがある。体部下半と底部、それに身受けの部分には施釉されていない。釉は全体に薄目にかかり、淡青色を呈する。口径 3.6cm、高さ 1.6cmの小形のものである。

黒釉陶器

碗(8) 小片で全形を知り得ないが、天目型のものと思われる。口縁部をわずかに直立させ、先端を薄く引き上げている。釉はガラス質でやや黄色味を帯びた茶色を呈する。胎土は灰白色を呈し、外面下半部には施釉されていない。

褐釉陶器

鉢(9) 小片であるが、復原口径23cmを計り、口縁部は折り曲げたような形をしている。内面には6本1組の櫛目がはいっている。口縁部の部分には褐釉がかけられている。胎土は褐色を呈し、器面は暗褐色を呈している。

瓦 類

今回の調査で出土した瓦類は軒先瓦、文字瓦、塼、丸・平瓦である。これらは発掘区内全域にわたって出土し、なかでも黄褐土層、黒褐土層、池状遺構に多く、他に溝、土壕、井戸等から出土した。瓦は奈良時代のものから中世に至るまで認められ、特に老司式瓦といわれている軒先瓦が圧倒的に多く、全体の半数以上を占める。ここでは(I)老司式瓦、(II)奈良～平安期の瓦、(III)中世の瓦に分けて記述する。

軒丸瓦は総数 369 点18種、軒平瓦は 192 点19種に分類できる。

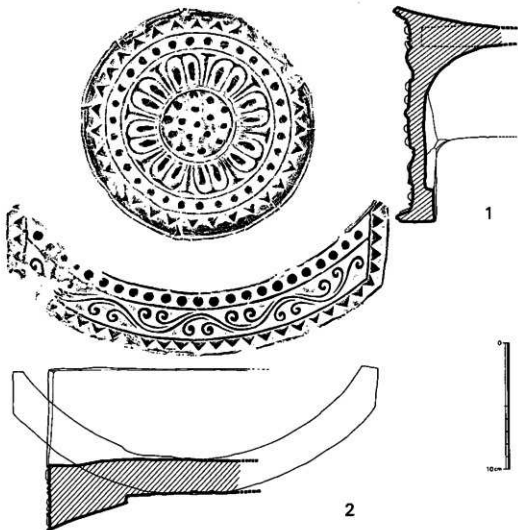
(I) 老司式軒先瓦 (第45図、図版45)

老司I式と呼ばれているもので、軒丸瓦・軒平瓦とも最も出土量が多く、軒丸瓦は全体の68%、軒平瓦は55%である。

軒丸瓦は複弁八弁蓮華文で、瓦当径は17.2cm、内区中房に1+5+10の蓮子を配するが、各蓮子には圏線がめぐる。外区内縁には32個の珠文を配しており、珠文は半球形状を呈する。外区外縁は32個の凸鋸歯文を配し、鋸歯文は正三角形に近い。丸瓦の取付きは珠文帯よりやや中

心に近く、上面はゆるくカーブを描く。取付き部裏面の補強粘土は比較的厚い。顎部裏面は周縁に沿って一段高くなっている。丸瓦の表面はヘラナデによって丁寧に仕上げている。瓦当文様の割付けや丸瓦との接合など極めて整然とした作りである。

軒平瓦は扇形唐草文で、瓦当面に主軸となる1本の波状線を入れ、その波文の上下に頭部が施回する2個の唐草を配し尾部を右側へ流す。外区上縁はボタン状の大きな珠文23個を配し、下縁および両脇区は軒丸瓦と同様の外向する凸鋸歯文を配している。凸面は比較的小さな正格子の叩きで、顎部および瓦当面より約4分の1位のところまでは横方向のナデによって丁寧に調整されている。凹面は瓦当面から約2分の1前後のところまで、横方向のヘラ削りおよびナ



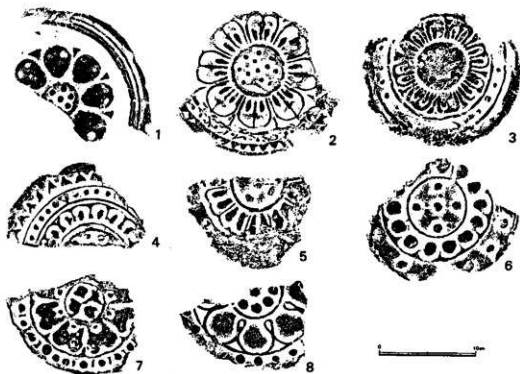
第45図 第45次調査出土軒先瓦拓影(1)

デで調整されている。また両側縁はヘラ削りによって調整されている。頸はすべて段頸であるが、深さは2.5cm～7.5cmと開きがあり、6～7cmのものが多い。胎土は砂粒をほとんど含まない極めて良質の粘土を用いており、成形にあたっては粘土紐の巻上げによっている。粘土紐による軒平瓦は九州ではこの老司Ⅰ式が唯一の例である。

この老司式は軒丸瓦・軒平瓦とも各々の型式に分かれるが、今回の調査で出土したものの中にはⅠ式以外のものは1点も含まれていない。これに対して大宰府政庁跡で出土している老司式のものⅡ式のみでⅠ式が1点も含まれておらず、極めて興味ある現象といえる。またこの老司式の分布はほとんど九州一円に及んでおり、奈良時代九州においてひとつの主流をなす代表的な瓦といえる。

(Ⅱ) ① 軒丸瓦 (第46図、図版45・46)

1は7点出土し、内区中房に1+6の蓮子を配する。単弁八弁蓮華文で、外縁は高く重圈文がめぐる。瓦当と丸瓦の接合は技法的に古いと考えられる。借房跡の調査で出土している。2は3点出土しており、内区中房径5.3cmを測り、1+4+8の蓮子を配する。複弁八弁蓮華文で、弁は丸味をもち、弁先端および間弁は外区外縁に接続する。外縁は左廻りの唐草文と凸鋸歯文で構成される。瓦当裏面は老司式同様周縁に沿って一段高くなっており、技法および成形

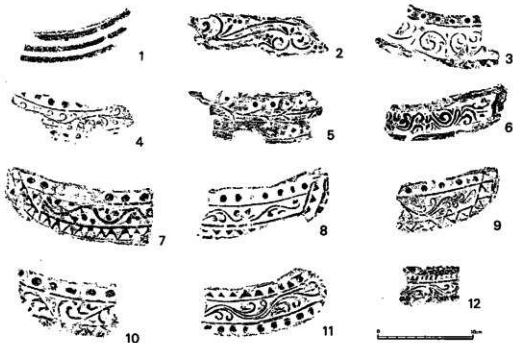


第46図 第45次調査出土軒丸瓦拓影(Ⅱ)一①

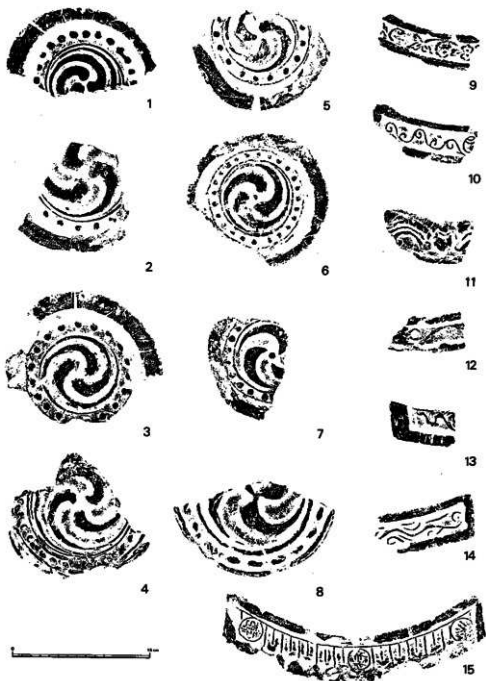
は老司式によく似ている。7は4点出土している。複弁八弁蓮華文で、中房に方形の蓮子4個を配する。外区は珠文と珠文の間にバチ形をした文様と珠文を交互に配している。瓦当面は平坦で黒色を帯びており、時期的に新しいものであろう。8は10点出土しており、3分の1ほどの破片であるが、学校院跡出土の類例からみて中房は1+8の蓮子を配し、単弁八弁蓮華文である。間弁はなく弁と弁は接続している。外区内縁は珠文である。

② 軒平瓦 (第47図、図版46)

1は三重弧文軒平瓦で3分の1ほどの破片である。瓦当幅3.2cm、弧線の間隔は約0.6cm、深さ0.4cmである。顎は段顎でへら削りを行っている。2は左から右へ流れる鬪行の忍冬唐草文である。蔓草は二つの節で結ばれ、そこから2本の蔓草と3個の果実をもつ蔓草が派生する。顎は段顎で縄目の叩きである。これは筑後地方の井上庵寺跡で発見されている軒平瓦と文様構成が極めて似ているが、唐草の流れが反転している。5は左から右に流れる唐草文^(E10)であるが、唐草はあまりに簡略化している。上外区、下外区は珠文を配している。顎は段顎で縄目文が叩かれており、技法的に古く考えられる。6は均正唐草文である。大宰府政庁跡回廊西南隅の調査から出土しており、単弁13軒九瓦との組合せが知られている。回廊出土のそれは上・下外区および脇区に珠文が認められるが、6にはなく素縁である。顎は比較的浅い段顎である。



第47図 第45次調査出土軒平瓦拓影(Ⅱ)-②



第48圖 第45次調査出土軒先瓦拓影(Ⅲ)

(目) 中世と考えられる軒先瓦は主に黒褐色土層、茶褐色土層およびS X1200(池状遺構)から出土した。特にS X1200から出土したものは、紀年銘をもつ卒塔婆と伴出し、それらの時期を少なからずとらえることができる。

① 軒丸瓦(第48図、図版47)

軒丸瓦は64点8種に分けられ、全体出土量の約20%を占める。1～3はS X1200からの出土。1・2は三巴文の外側に圏線がめぐるが、3には認められない。又2は右廻りに対し1・3は左廻りである。1～3共に尾部は長くのび、外区内縁に丸い珠文を配す。外縁は高く幅は広い。4は左廻りの三巴文で尾部は長くのびている。外区内縁は珠文を配し、外縁は他と比べ低く幅は狭くなる。5は右廻りの巴文で、外区内縁の珠文間隔幅はやや広く外縁幅も広くなる。6は左廻りの三巴文で中心部に丸い珠文を置き、頭部はやや尖り気味で尾部は内区圏線と接続する。外区内縁は珠文、外縁は一段高い茶縁である。7は左廻りで、中心に珠文を配し、頭部は尖っている。尾部は短い。8は茶褐色土層から出土しており、巴文頭部は接続し、尾部は短くなる。瓦当は他に比べ大きく、外区の珠文は楕円形を呈している。

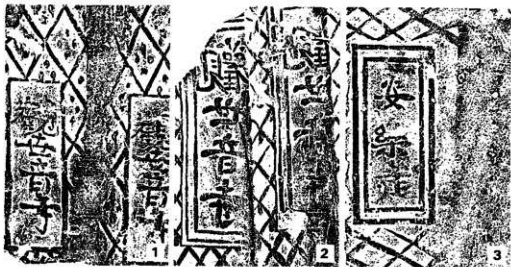
② 軒平瓦(第48図、図版48)

軒平瓦は44点で7種に分けられ、全体出土量の約23%を占める。9は左に2回反転する均正唐草文と思われるが、浄瑠璃寺においてこれと同種の軒平瓦が発見されており、これらを関野貞氏は「宝相華文」と説明している。10は茶褐色土層から出土している。中心に宝珠形の退化した中心飾を置き、左右に5回反転する均正唐草文である。11はS X1200から出土している。14はS D1230Bから土師器と伴出した。僧房跡において出土しており、それから均正唐草文であることが判る。15は拓本から復原したもので、瓦当厚4.9cm、上外区幅27.3cm、下外区幅28.7cm、弧深4.5cmを測る。瓦当面の左から左字で「観世・音寺・瓦也」と記されており、下向剣頭文瓦である。頸は切頸をナゲて仕上げており、丸味をもっている。

文字瓦(第49図)

出土した文字瓦は総数49点、13種に分類できる。文字は第49図1～3と「平井瓦屋」、「佐」「介」、「安」、「太」、「四王」、不明2がある。このうち2は27点あり全体の約60%を占める。1・2の「観世音寺」銘の文字は第43次(僧房跡)の調査で出土し3種に分けられており、長方形の枠の中に文字が入ったもので、これは3の「安楽寺」銘も同じような手法がみられる。これらは安楽寺から出土している。「安楽寺天承二年
藤原任子」の紀年銘の入った文字瓦と叩きの構成が類似しており、1～3もこの紀年銘の瓦とはほぼ同じ頃の年代が考えられる。観世音寺の発掘調査で「安楽寺」銘の文字瓦が出土したのは始めてであり、又第46図7も観世音寺、安楽寺の両寺にみられるなど興味ある資料である。

この他に、鬼瓦片があり、その背面に2文字がへら書きされているが、面が損傷しているため、判読は困難である(第50図)。



第49図 第45次調査出土文字瓦拓影

以上、Ⅰ～Ⅲの軒先瓦、文字瓦について概述した。Ⅱの軒先瓦は各々10点未満の出土数であり、出土率からは老司式瓦が大半を占めている。これらは奈良の本薬師寺跡・藤原宮跡から出土している軒先瓦と文様構成が比較的良好に似ており、又九州一円においてもその分布の広がりをもつなど、この瓦の占める比重および性格は大きい。また第46図1、第47図1は少数の出土であるが、文様構成および軒先瓦の相互関係からセット関係としてさしつかえないであろう。



第50図 ヘラ描き文字拓影(1/2)

第48図1～3・11はS X 1200から出土したもので、このうち1・11は第38次調査検出のS B 800 礎石建物跡からも出土している。これらはS K 805から土師器と共伴し、その器形ないし法量等からその時期を鎌倉期後半頃に求められる。よって今回S X 1200から出土した卒塔婆に元^{建久}二年(1330年)の紀年銘が記されており、S B 800 出土瓦の時期とほぼ同じ頃が考えられ、それらの下限年代を14世紀前半頃に求めることができる。又第48図1・2・14はS D 1230出土の土師器の形態などからこれらを13世紀末～14世紀前半頃に考えられる。

石製品

第45次調査では多量の滑石製石鍋をはじめ、石鍋片を再加工した各種石製品、硯、石帯、砥石などが出土している。しかし遺構にともなう遺物は少なく、また未整理の状態であるので、ここではその一部を紹介しておきたい。

硯 (第51図・図版50)

今回の調査で10個の硯が出土した。

1は黒褐土層面に掘り込んだS K 1206より出土したもので、長さ3.8cm、幅3.95cm、厚さ1.1cmの小形の硯である。一部に欠損があるがほぼ完形で、全面に磨きがある。墨は対角線状に左から右にすられている。右隅に海部があり、中心部は若干すりへっている。海部の深さ0.5cmで、陸部との境は明瞭ではない。前面および両側面には縁があるが、後面にはない。また、縁の部分にはそれぞれ1カ所、計3カ所に手持ちのためと思われるすりへりがある。

2は近世の落ち込みから出土した。厚さ1.5cmをはかるが、およそ4分の3を欠損しており、技量は不明である。残存長5.6cm、残存幅3.7cm。縁に溝を彫り、二重の縁にしている。海部

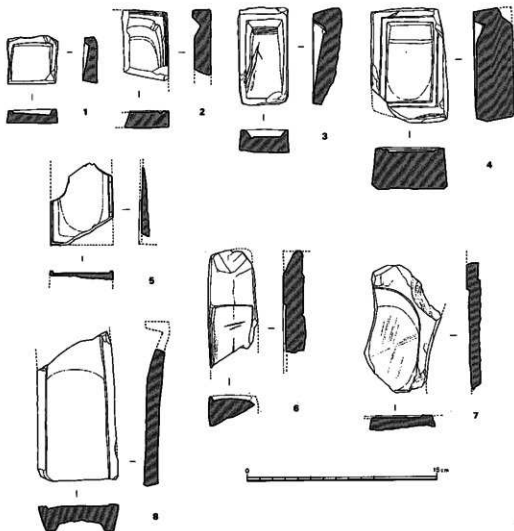


図51 硯 実測図

の深さは0.65cmである。石質は小豆色した凝灰岩で、背面を含めていねいに仕上げられており滑らかである。残存している正面、右側面はすって整形している。

3は茶褐色土層から出土したもので、ほぼ完存しており、長さ7.75cm、幅4.05cm、厚さ2.3cmをはかる。海部と陸部との境はゆるやかな傾斜のため不明であるが、深いところで1cmである。背面をはじめつくりは雑で、海陸部に計3本の製作時からのものと思われる彫り傷がある。四周に縁がつくが、後面のそれは磨滅および破損のため左側半分をかすかに残す程度である。石材は砂岩質で、淡い黄灰色を呈している。

4は茶褐色土層から出土したもので、左隅の一部の欠損を除いてほぼ完存している。長さ10cm、幅5.4cm、厚さ3.35cmをはかる。縁は2段にめぐらされている。海部は長さ1.7cm、幅3.77cm、深さ0.9cm、陸部は長さ4.65cm、幅3.7cmで、陸部の中心付近が若干磨滅している。周囲にノミ痕があり、整形はノミでしたものであろう。石質は滑石である。

5はS X 1200から出土した。陸部・縁の一部を除いて大部分を欠損している。残存長6.5cm、幅5cm、残存厚0.9cmをはかる。残存している陸部は滑らかで、左隅に若干の凹みがみられる。シャープなつくりの硯である。石材には小豆色の凝灰岩を用いている。

6は近世の落ち込みから出土したが、陸部・縁部の一部を除いて欠損している。残存長9.45cm、幅3.9cm、残存厚2.35cmをはかる。陸部の左右側・隅は若干凹む。石質は灰黒色をした粘板岩質である。

7は黒褐色土層より出土したもので、約半分を欠損している。残存長10.1cm、残存幅6.15cm、残存厚1.2cmをはかる。後面の陸部はゆるやかに落ち、海部との境に縁がわずかに残る。陸部には細かい条線が多くみられる。石質は黒色の頁岩である。

8は黒褐色土層からの出土で、唯一の陶硯である。海部の約3分の1が欠損している。残存長11.9cm、幅6.4cm、厚さ2.25cmをはかる。海部と底部との境は不明瞭な稜線をなす。残存する海部は長さ3cm、陸部8.9cmで、海部の残存の深さは1.15cmである。陸部右側に使用の為と思われる若干のすり減りがみられる。左右側面に縁を貼り付けている。背面は左右側に沿って二脚を有する。陸部の断面は弧を描く。細かい砂を含む胎土を硬質に焼成している。

スタンプ形石製品（第52図・図版51-1）

土壌S K 1212からの出土。滑石製石鏝の屑部破片を利用した印判である。背面に石鏝の鏝をそのまま利用した鈕がつけられ、径0.5cmほどの孔を穿っている。印面には円座の中に細い16弁からなる花文が刻まれている。火舎・香炉などの口縁下に菊花文をスタンプされた例があり、その中には大きさ・花卉数などが本例と一致するものがある。これらからみてその用途がうかがわれる。

石鏝（第52図・図版51-2）

口径7.1cm、器高3.9cmの小形の滑石製品で、完存している。内外面ともにノミで削って

るが、ここに胴部外面のそれは三段にていねいに仕上げられている。4カ所に小さな把手がつく。とうてい実用品とは思えないが、全面にススが附着している。

石帯 (第52図・図版51-3)

調査区の東南隅、溝SD1230の東側から出土した。帯を裝飾する石帯の一種で、丸胴とともに使用される巡方である。厚さ0.7cmの石材を正方形に近く(4.1×3.7cm)成形し、表面を粗削りしさらにみがく。裏面には帯への接着のためかがり穴を4カ所に彫り込んでいる。石質不明。

その他の石製品 (図版51-4~8)

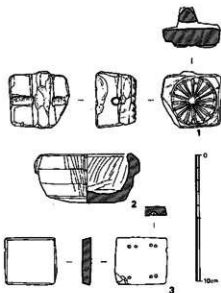
一部を図版に示したが、滑石製石鍋片の再加工品が多い。4は壺形土器のミニチュアのような形状をしているが、半欠する頸部に横方向の穿孔があり、むしろ根付様の裝飾品であろう。胴部

最大径2.8cm、残存高3.9cm。石質不明。5は半月形の二孔を有する滑石製品で、強いて用途を考えれば石鍋の弯曲を利用している点、腰飾りの一種であろうか。残存幅6.1cm。6は直径約7cm、厚さ3.7cmほどの紡錘車状の製品で、径1.1cmほどの穿孔がある。石質不明。7・8も同様の形状の滑石製品であるが、厚さが1.2~1.5cmと薄くなり、穿孔も方形である。6~8はいずれも性格不明。

木製品 (第53図、図版52)

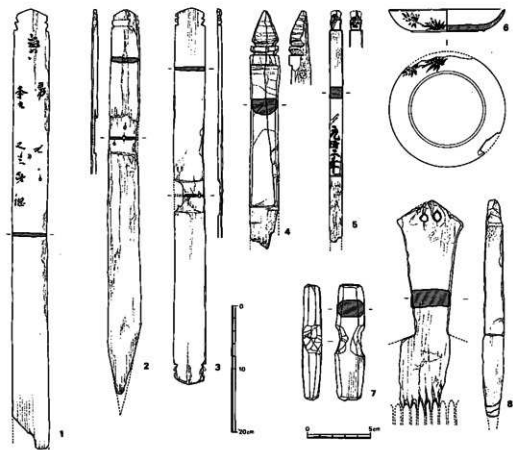
SX1200から出土した1~5は、その形状からみて、いずれも卒塔婆の一部と推定される。板材を用いたもの(1~3)と丸ないし角の棒材を用いたもの(4~5)とに大別できるが、頂部を山形に作り、その両側に2カ所ずつの切り込みを入れ、五輪塔の空・風輪に相当する部分を作り出しているように見える点は共通している。1~3には釘穴があり、2・3のその部分は凹状に切り込まれているが、1ではそのような加工はなされていない。2は下端を尖らせ、3は両端に五輪塔状のものを作り出しており、釘穴の位置からみて、この2・3そのものではないが、かかる類のもの2本を十字架風に組み合わせたものと考えられる。

1は現存長69.2cm、最大幅5.7cm、厚さ0.7cmを測る。これの表面には墨書が見られ、「□□□□ □□□□ □□ □□」
本 之二年地とあるが、全体的に墨跡が薄く、その判読は困難である。最上字は梵字とも推定されるが、断定できない。以下は2行にわたって現存の最下端付近まで全面に記されていたと推定されるが、現状ではわずかに墨痕を認めるのみで、とくに下半部ではそれが著しい。2は現存長61.1cm、最大幅5.2cm、厚さ1.0cmである。中間の左側にほぼ9



第52図 石製品実測図

字に相当する墨痕が認められるが、面の腐蝕がはなはだしく、第1を「速」と推読しうるのみで、以下の文字は判読できない。また下端近くの右側にも2字分の墨痕が見られ、これもほぼ全面にわたって2行に記されていたと推定される。3はほぼ完形で、長さ59.8cm、最大幅5.1cm、厚さ0.7cmを測る。これには墨痕は認められない。4は現存長37.8cm、最大幅4.8cm、厚さ2.6cmである。5は現存長36.8cm、最大幅2.0cm、厚さ2.0cmである。頂部作り出し部の右側にも梵字と推定される墨痕が見られるが、判読はできない。中央部付近の4字は「元□二年」と判読でき、紀年と考えられる。共伴遺物の編年などを参照すると、この年号は「元徳」（1329～32）と想定される。しかし文字のみから考えると、「□」字は「元」字や「年」字に比較すれば若干小さく、また偏の「彳」は認められるが、旁を「恵」と断定することは少なからず困難である。かかる矛盾のため現時点では「元□二年」と推読し、しばらく後考を俟つことにする。



第53図 木製品実測図（1～5は $\frac{1}{4}$ 、6～8は $\frac{1}{2}$ ）

このほか、損傷がはなはだしいため実測図は省略したが、図版52に示したように墨書の見られるものが4点ある。1字なりとも文字を判読できるものは9・10の2点で、他の2点は墨痕が認められるのみで、判読は不可能である。9は「□法押□」と判読でき、法名とも考えられる。10は2行にわたって記されているが、腐蝕が著しいため字数などについては確認できず、右行では中央より若干上に衆の異体字と推定される「衆」を、また左行では「願以□徳□」を推読しうる程度である。

漆器(6)

SE1186から出土した。口径9.2cm、器高1.7cmの小皿で、低い高台が削り出されている。内外面は黒漆を塗り、外面には黒漆の地に赤漆で草木様の文様が描かれている。

竪櫛(8)

SX1200から出土した。櫛部の両側辺と先端は欠損しており、全長、幅ともに不明である。歯の間隔はかなり疎である。柄部の先端は山形に加工され、2つの貫通孔がある。

不明木製品(7)

SE1186から出土した。断面八角形に削られた棒状のものに、両側辺の中央から削り込みを入れたものである。長さ9.2cm、断面2.2cm×1.3cm。

懸仏(図版53)

(1) 御正体の鏡地板(銅板)である。完形(一部割れている)で、正円に近く、径10.7cm、厚さ0.7mmを測る。上部の2カ所に紐を通すための径2mmの穴があげられている。その穴の縁に装飾のための花文が彫られている。また中央よりやや下位に仏像を懸るための直方形の穴があり(長径1.0cm、短径0.5cmを測る)、周縁に沿って装飾のため跳彫りがある。また裏面には1.3cm間隔で縁に沿って小さい穴状の凹みがみられる。SD1230Aから出土した。

(2) 御正体の仏像(如来形の坐像)で、裏面に小突起が1個あり、それにはそれを固定するための小さい穴があげられている。

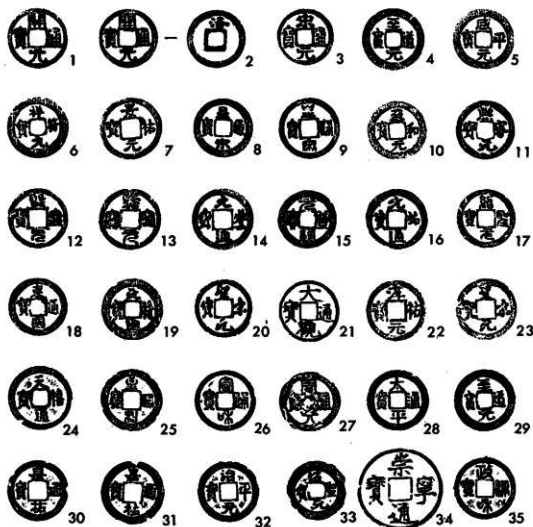
像高3.2cm、蓮台幅1.5cmを測り、銅製で鑄造されたものである。床土出土のものである。

台座状土製品(図版53)

幅4.0cm、長さ6.0cm、厚さ1.4cmの小片で、形態は明らかでないが、蓮華文がめぐる台座状のものと考えられる。胎土は若干砂粒を含む土師質のものである。蓮華および方形の文様は型造りのものである(裏面に指で押した痕が残る)。

銅銭(第54図、第3表)

今回出土した銅銭は総数86点で、そのうちの5点は腐蝕もしくは破片であるため分類できない。おもに、SX1200、茶褐土層、黒褐土層から出土した。とくにSX1200から一括して38点が出土したが、一カ所にまとまっており、紐を通していた可能性も考えられる。初鑄年代および点数は第3表に記す。



第54回 銅銭拓影(36) 1～26はS X 1200—一括出土

鑄造関係遺物(第54図、図版53)

今回の調査では鋳型、埴場、鞆羽口、鉄錐、銅錐などの鍛冶に関する遺物が出土した。主なものを紹介しておきたい。

土製鋳型(1～4)

1は黒褐色土層から出土したもので、錫杖の錫頭を飾る遊環である。砂粒の混入したスサ入りの胎土を硬質に焼成している。外表は粗く表面に稜痕がある。欠損しているが、残存長5.45cm、幅5.6cm、厚さ1.38cmで、環部の彫り込みは直径3.9cm、幅0.38～0.48cm、深さ0.25cmである。

番号	銭種	初鋳年代	S X 1200 出土原数	その他の 産地出土	番号	銭種	初鋳年代	S X 1200 出土原数	その他の 産地出土
1	開元通宝	621	3	茶褐色土層 黒褐色土	19	元符通宝	1098	1	
2	開元通宝	621	1		20	皇宋元宝	1101	2	
3	宋元通宝	990	1		21	大觀通宝	1107	2	S D 1230 B(2)
4	聖道元宝	995	1		22	淳祐元宝	1241	1	茶褐色土層
5	咸平元宝	998	3	S X 1239	23	皇宋元宝	1253	1	
6	祥符元宝	1008	1	層位不明 1 茶褐色土層下層	24	天禧通宝	1017	1	
7	景祐元宝	1034	1	黒褐色土 M之	25	至和通宝	1054	1	
8	皇宋通宝	1039	1	茶褐色土	26	宣和通宝	1119	1	S X 1221 S E 1202
9	皇宋通宝	1039	2	茶褐色土 S E 1202	27	周元通宝	955		茶褐色土
10	至和元宝	1054	1	表探	28	太平通宝	976		S X 1218
11	熙寧元宝	1068	5	茶褐色土 黒褐色土	29	聖道元宝	995		側溝
12	熙寧元宝	1068	2	茶褐色土(2)	30	景祐通宝	1034		茶褐色土
13	熙寧元宝	1068	1		31	嘉祐通宝	1056		S D 1230 B
14	元豐通宝	1078	2	産地・黒褐色土 下層側溝 S E 1190B方	32	治平元宝	1064		茶褐色土
15	元豐通宝	1078	2	茶褐色土 M之	33	紹聖元宝	1094		茶褐色土 S X 1242
16	元祐通宝	1086	4	茶褐色土 S K 1212	34	崇寧通宝	1102		床土
17	紹聖元宝	1094	1		35	政和通宝	1111		茶褐色土下層
18	東國通宝	1097	1						

第3表 銅銭出土遺構・層位対照表(1~26はS X 1200出土)

2は茶褐色土層から出土したもので、環瑯の一種と思われる。胎土には細砂粒が混入しており、硬質に焼成されている。色調は淡茶色であるが内面は黒変している。一部欠損しているが、残存長4.22cm、幅7.8cm、厚さ1.6cmである。范面の彫り込みは残存幅6.08cm、高さ3.5cm、孔径0.6cmである。

3は茶褐色土層から出土したもので、下半分が欠損しているため用途は不明である。細砂を含む胎土で、焼成はやや軟質である。色調は淡茶灰色であるが、内面は黒変している。残存長5.45cm、幅4.46cm、厚さ1.6cmである。范面の彫り込みは残存長4.12cm、幅2.6cm、深さ0.25cm、湯口の長さ0.82cm、幅5.8cmをはかる。

4は茶褐色土層から出土したもので、錫杖の二股の錫頭の輪と考えられる。右半分と、柄の部分に欠損している。残存長9.2cm、残存幅4.76cm、厚さ2.0cmである。范の彫り込みは残存長6.25cm、残存幅3.25cm。中央塔は欠損しているが、それから左右に輪の先端が延び、その上に塔もしくは瓶らしきものがある。右半分の輪の先端および、塔もしくは瓶は欠損している。左側の輪の先端は残存長2.0cm、幅0.39cm、塔もしくは瓶の長さ1.66cm、幅0.4cmをはかる。
(註15)

増埴(5)

茶灰土層を掘り込んだS K 1280より出土した。胎土は砂礫を多く含んでいる。手づくねによる成形で、体部に指圧痕を見ることができる。口縁部と体部との境付近に沈線をもつ。内面に

は焼きヒビが多い。色調は内、外面ともに高熱のためねずみ色を呈する。一部内面に赤味をおびたガラス質の付着がみられる。口径15cm、器高6cmで、器内の厚さは体部2.9cm、底部1.9cmをはかる。また幅4.8cm、深さ0.9cmの片口状のそそぎ口をもつ。

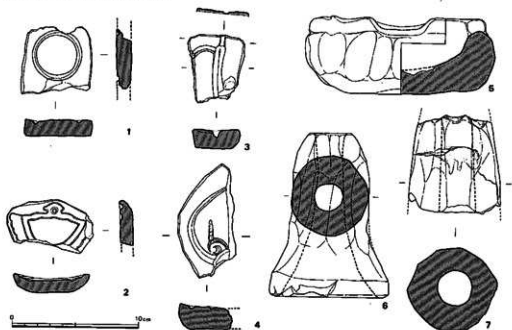
翳羽口(6・7)

6は黒褐色層に掘り込んだ土城から出土した。胎土に砂礫を多く含んでいる。完形で長さ13cm、最大幅9.7cm、最小幅3.3cm、内径最大8.4cm、内径最小2.0cmである。色調は赤味をおびた灰褐色であるが、先端は灰色を呈する。硬質に焼成されている。

7は茶灰土層に掘り込んだSK1280から出土した。両端は欠損している。胎土に多くの砂を含む。外面に七面の面取りがある。残存長7.6cm、最大幅7.95cm、最小幅7.25cm、内径2.8cmをはかる。色調はねずみ色である。欠損してからも使用されたとし、先端欠損面に赤褐色および青褐色のガラス質の付着がみられる。さらに体部の一部にもガラス質の付着が見られる。

小 結

遺構の性格 第45次調査を東面築地の検出を目的として実施したが、報告してきたように築地に関する知見は痕跡すらも得ることができなかった。そのすべてがカットされたと考えるべきか、あるいは築地推定線を調査区よりもさらに西側に考えるべきか、であろうが、今回の結果からはいずれとも決し難い。



第55図 鑄造関係遺物実測図

調査区は以前から陶磁器の散布地として知られていた地域で、今回の調査でも多数出土した。陶磁器研究の基礎となる重要な資料を多く含んでおり、その研究の成果の一端を別に紹介している。それに応ずるように中世の遺構の残存がもっとも良好であった。

遺構面の形成は大略三期に区分される。

第Ⅰ期は8世紀中頃ないしはそれをやや降る時期に形成されている。それ以前から所在する若干の遺構を茶灰土で整地している。この遺構面は12世紀前半～中頃に黄褐色土層面が形成されるまで約400年間にわたって使用されている。したがって時期の異なる遺構がほとんど同一の面で検出されている。もっとも先行するのはSK1280・1285の二基の土壇で、多くの須恵器・土師器・瓦や埴壇・輪羽口などの特殊遺物が検出された。墨書土器が含まれ、中に「造寺」と判読しうる例があった。観世音寺の落慶供養は天平18年(746)のことであり、茶灰土層の形成がこの寺の草創時の所産であることをうかがわせる。井戸SE1195、1320および溝SD1300もこの面から掘り込まれているが、埋没の時期が12世紀代以降のところから、土壇よりも後出する時期の遺構と思われる。調査区内ではSD1300が何に伴う溝であるかを明らかにすることはできなかった。時期不詳の掘立柱建物SB1250もこの頃の時期と考えてよからう。

第Ⅱ期は12世紀前半～中頃に形成された黄褐色土層の遺構面で、比較的短い期間に使用されたらしくすぐに上層の黒褐色土層によって覆われる。顕著な遺構としては井戸8基がある。

第Ⅲ期は黒褐色土層面で、包含される遺物は12世紀前半から14世紀代にわたる。この面から掘り込まれる井戸の多くは13世紀～14世紀初頭、あるいは池状遺構SX1200は14世紀初頭と考えられるが、中には12世紀中頃の井戸も含まれる。したがって12世紀中頃～後半頃の形成と考えられる。報告してきた多くの遺構の大部分がこの面に掘り込まれており、残存の状態も良い。このⅢ期の面はおそらく半世紀ほどの間をおいてⅡ期の面を覆っている。12世紀代におけるこのような規模の大きな整地は、康平七年(1064)、康和四年(1102)、康治二年(1143)の大災あるいは大風による倒壊と関連するかもしれない。

この面の遺構は大きく二分される。

一つは畦状に配された溝SD1230とそれに囲繞される地域である。溝の内側には槽がめぐらされ、東西方向には礎石を有する門が設けられている。溝・槽に囲繞された内側からは多数のピット・井戸が検出され、遺物の分布もこの地域に多くみられた。ここに何らかの生活遺構が存在したことをうかがわせる。さらに埴壇・輪羽口・鉄鉢・銅鉢などの鍛冶生産に関する遺物の出土も注目される。ところでⅠ期の遺構出土の墨書土器ではあるが「□□東院」、「厨」の二例があった。「延喜五年観世音寺資財帳」には「東院」名の建物は記載されていないが、その用器章に「東院祭盤參柄」云々とあり、東院の建造に用いた工具のあることが知られる。また「厨」は大衆物章に建物の記載がある。これらを手懸りにすれば、溝SD1300の付近に、厨房、

工房関係の施設が置かれていたと思われる。それは大衆物草中の厨、竈屋、水屋、礎屋などの厨房施設、および造瓦屋に相当すると思われる。そして想像をたくましくすれば、これらの施設の総称を「東院」と考えることもできる。溝SD1230、柵1235に圍繞された区画内の遺構、遺物から見れば、やはり厨房、工房関係の施設の存在を否定するものではない。したがってこの区画に古代、中世を通じて厨房、工房が存在した可能性を推定することができよう。

他の一つは調査区の北端で検出された池状遺構SX1200である。この部分を含む一帯は菖蒲池と称されている。『観世音寺年中行事』に「五月五日、菖蒲会、於大講堂三間三答、満山供三当導師溝師」云々とあり、関心のもたれる地名であった。^(註17)調査の結果、はたして池状の遺構を検出した。池底から「元□二年」（1330）銘の卒塔婆とともに多数の土師器・陶磁器が出土しており、先に貞応三年（1224）銘の墨書木札と伴出したSD605出土の土師器、陶磁器とともに編年研究の確立に大きな前進をもたらす成果をあげることができた。

以上のように第45次調査は当初目的とした東面築地の検出にはいたらなかったものの築地に圍繞される中心堂宇の周囲の構造、あるいはこれまで不明確にしかなかった古代末～中世の観世音寺の解明に大きな手懸りをうることができたのである。

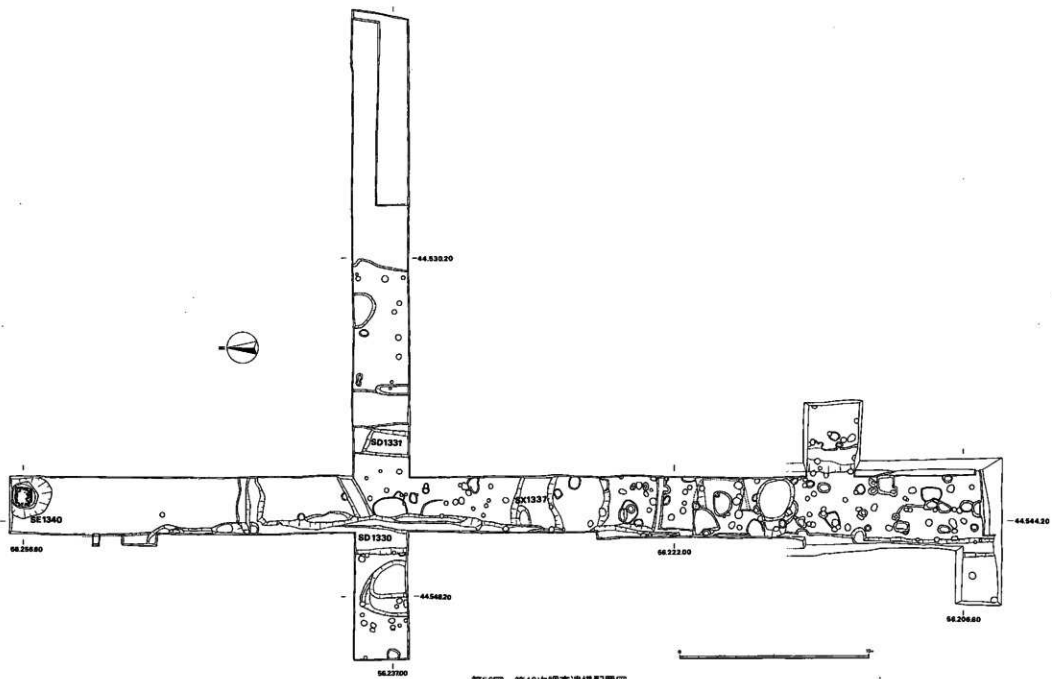
唐三彩の出土 溝SD1300の下層から出土した唐三彩三足壺（鏝）は日本における4遺跡目の出土として大きな反響をえた。同じ頃、観世音寺の南西約1.5kmに所在する太宰府町市の上遺跡から紋胎陶枕の出土が報ぜられた。その概要は報告してきたところであるが、その出土の位置状況からみて、唐三彩の考え方に若干の問題をもたらしている。^(註18)

唐三彩三足壺（鏝）は厨房、工房に関する区画から出土した。出土の状況からみてプライマリーなものとは考えられず、そのこと自体に大きな意味はないかもしれない。しかし市の上遺跡出土の紋胎陶枕は、井戸中から検出されており、この遺跡が大宰府「西市」と推定されることを考慮すれば、とうていこれまで唐三彩あるいは紋胎に与えられていた評価で律しうものではない。したがって、観世音寺例の出土位置の不適當さについても偶然ではすまされないのである。

出土の唐三彩三足壺（鏝）はそれ自体からみれば盛唐期、あるいはそれよりも降る時期が考えられる。その入手が公的なものであれば、すなわち唐朝廷から遣唐使を媒介して日本に正式に伝えられたものであれば、日本の朝廷からさらに観世音寺に下賜されたと考えざるをえない。しかし唐三彩の所有の形跡が「寶財帳」にうかがえず、さらに出土の位置の説明ができない。別に入手の経路はないのであろうか。最近九州大学岡崎敬教授は、唐三彩の伝来の経路について、公式な場合とともに別のルート^(註19)の存在の可能性を指摘された。すなわち、これまで唐朝廷から特定の官僚貴族に下賜された明器と規定されていた唐三彩が、近年中国で墳墓以外での出土がみられることから必ずしも明器に限定することができないことを述べられている。実際、日本、韓国、インドネシア、エジプトなどで出土が報ぜられており、下賜のみでの入手経路で

は説明しきれない状況となっている。大宰府の故地から出土した唐三彩三足壺(鏡)・絞胎陶枕は出土の位置(当然その取り扱われ方を反映しているが)からみて、岡崎教授が指摘されたように、明器以外の用途をもつ製品を下賜以外のルートで独自に入手した可能性を考える必要を生ぜしめてきた。まだ日本では唐三彩四遺跡例、絞胎2遺跡例を数えるにすぎないが、その取り扱いをみる時、意外にも広い流通の可能性がうかがわれ、今後の類例の追加が期待される。

- 註1 平安遺文 194
- 註2 横田賢次郎「大宰府検出の井戸—とくに彫塑分類を中心として—」(『九州歴史資料館研究論集』3) 1977
- 註3 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」(草戸千軒 36) 1976
- 註4 「大宰府観世音寺開基由来覚」 観世音寺所蔵文書。
- 註5 亀井明徳・高橋章「向佐野、長浦窯跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』VI) 1975
- 註6 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報—』 1977
- 註7 森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書(2)」(『九州歴史資料館研究論集』3) 1977
- 註8 水野道一「唐三彩」(陶磁大系35) 1977
- 註9 唐三彩に関しては九州大学岡崎敬、北九州市立歴史博物館小田富士雄、東京国立博物館長谷部楽衛の諸先生に御教示をいただいた。
- 註10 九州歴史資料館『九州の古瓦と寺院』 1974
- 註11 福岡県教育委員会「大宰府史跡—昭和45年度発掘調査の概要—」(福岡県文化財調査報告書47) 1971
- 註12 岡野貞「日本古瓦文様史」(『日本の建築と芸術』上) 1940
- 註13 註5参照
- 註14 石松好雄・高橋章「大宰府出土の瓦について(二)」(『九州歴史資料館研究論集』4) 1978
- 註15 鋳型の性格については九州歴史資料館宇芸一課八尋和泉氏の御教示を得た。
- 註16 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」(『九州歴史資料館研究論集』4) 1978
- 註17 観世音寺所蔵文書。
- 註18 本報告および高倉洋彰・横田賢次郎・山本信夫・黒島邦弘「観世音寺出土の唐三彩」(考古学雑誌64-1) 1978
- 註19 岡崎敬「近年出土の唐三彩について—唐・新羅と奈良時代の日本—」(ミュージアム 291) 1975



第56层 第46次調查遺構配置圖

4. 第46次調査 (左郭九条三坊)

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査である。対象地域は左郭九条三坊のほぼ中央地域にあたり、また奈良・平安時代の遺跡として周知の鼓石遺跡の東南方に隣接していることから、大宰府関係遺構の検出を期待して調査を開始した。地番は太宰府町大字太宰府字御垣野2611番地である。

調査は昭和52年2月21日に開始し、同年3月26日に終了した。

検出遺構

対象地域の中央に南北・東西の直交するトレンチを設定して調査を開始した。調査の結果、東西トレンチ東半には顕著な遺構は存しなかった。しかし、E 350.00以東には井戸、土壇およびピットが多数検出された。それらの遺構のうち古期に属するものは南北トレンチ北端で検出した井戸のみで、他の大部分の遺構は古代末のもので、一部鎌倉時代のものを含む。また、縄文時代晩期の土器を出土した堅穴状の土壇も検出した。

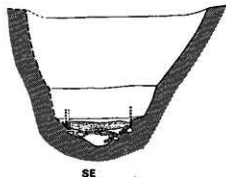
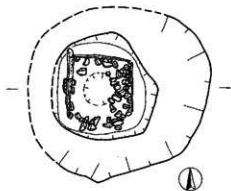
井戸

SE 1340 上面円形を呈する径約2.4m、深さ約2.0mを測る掘り方の中に、一辺85cm四方の方形の井戸枠を組んでいる。井戸枠は最下の横桟と縦板の一部を遺存するのみである。この方形縦板の形態のものでは第43次調査検出のSE 1081とともに最古期に属するものである。

溝

SD 1330 南北トレンチ西端沿いに南北に検出した溝で、遺存状態の良い所で、幅約1.5mを測る。発掘区内での溝底はほとんどレベル差はないが、若干南側が低いことから、北から南へ流れていたものと考えられる。この溝からほとんど同一時期のものと考えられる土器が多く発見された。特に、南北・東西トレンチの接する部分から一括して多量に出土した。

SD 1331 SD 1330と約3.7m東に隔って南北に平行に走る溝で。SD 1330に比して若干溝



第57図 SE 1340井戸実測図

幅は狭く約1.4mを測る。出土した遺物のうちもっとも新しいものはS D1330一括出土の土器と同じものである。

その他の遺構

S X 1337 縄文時代晩期の土器を出土した竪穴状の遺構である。壁は直に近く、高さ約0.15mを測り、また底面が平坦であることから住居跡かとも考えられるが、検出範囲の中では柱穴等は存しなかった。

出土遺物

土器

SE 1340出土土器 (第58・59図、別表、図版42)

出土した遺物は土師器、須恵器、それに白磁である。

須恵器

杯(1~3) 1は口径13.8cm、器高4.0cmを測る平底の杯で、焼成は不十分のため軟質で灰色を呈する。2・3は高台付のもので、2は小片であるのでその法量は不正確であるが復元すると口径15.6cmを測る。胎土は良く精選され砂粒は少ない。堅壁な焼成で、淡青灰色を呈する。3は断面四角形に近い高台を体部と底部との境いに貼付している。胎土は精良で砂粒は少なく、また暗灰色に堅く焼成されている。

皿(4) 口径15.0cm、器高1.7cmを測る小型の皿である。胎土は精良で砂粒は少なく、また暗灰色に堅く焼成されている。外底部はヘラ切り離しののちに部分的にヘラナデを行っている。

罍(16) 口頸部と肩部の一部が残存しているのみで他は欠失している。口径20.2cmを測り、口縁端はシャープにつくっている。肩部以下および頸部の一部に細かい格子の叩き目を有しているが肩部上位は荒いカキ目を施し、格子の叩き目を消している。内面肩部以下には比較的大きな同心円状のあて板文様が残っている。胎土中には砂粒は少なく精良である。焼成は良好で、淡青灰色を呈し、肩部の一部に自然釉が掛かっている。

壺(17) 底部と胴部および肩部の一部のみが残っていて、他の大部分は欠失している。その形状から細頸の壺になると考えられる。図は底部の径と胴部のカーブから推定復元したものである。外面の叩き目は完全に消しているが、内面中心には円心円状のあて板跡が残り、下位は板状のものでこのあて板跡を消そうと左上方に器面を削削している。残存部体部外面の大部分に緑色の自然釉がかかっている。

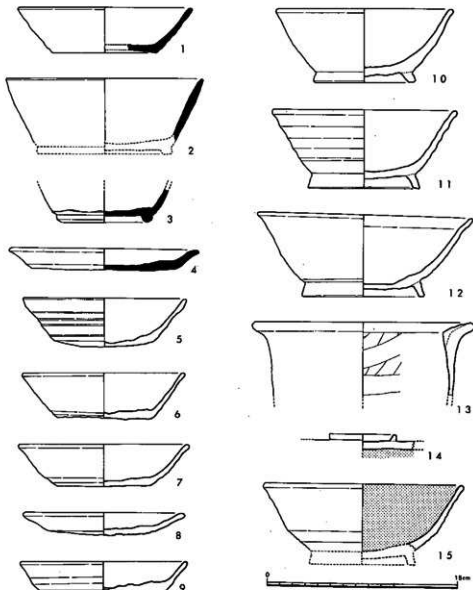
土師器

杯a(5~7) 口径12.9~13.6cm、器高3.4~3.7cmを測る。5・6の内底にはナデは見られない。外底はヘラ切り離し後に若干ナデている。7は内底が摩滅しているためナデの有無

については不明である。また外底に板状圧痕らしき痕跡が見られるが、板状圧痕とは確定できない。

皿（8・9） 8は口径12.8cm、器高1.8cmを測る。9は口径13.3cm、器高2.4cmを測り、内底をナデているが外底には板状圧痕はない。また板状のもので底部全体をナデている。

碗（10~12） 3点ともに外方にふんばった断面長方形の高台を有し、体部は若干丸味を有するが、ほぼ直線的に外上方へ延びている。体部はヨコナデのみでミガキは施されていない。



第58図 SE 1340出土土器実測図（1）

甕 (13) 復元口径17.7cmを測るが小片のため正確ではない。口・頸部の境いに粘土を貼り付けて補強している。体部外面は煤が厚く付着しているためその調整は詳らかにし得ない。内面は口縁部はヨコナデ、体部は斜め上方にヘラ削りした後に口縁部近くでは更にヨコ方向にヘラ削りしている。

黒色土器

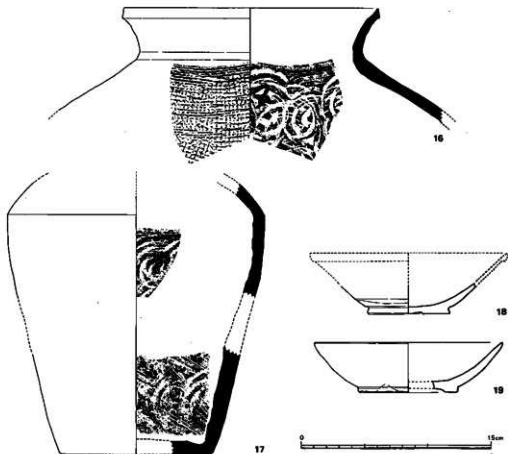
内面のみを焼した黒色土器が2片出土した。

蓋 (14) 径5.2cmを測る輪状のつまみを有するものである。胎土中に若干砂粒を含むが比較的精良である。淡乳茶色を呈し、焼成は良好である。蓋としたが托かも知れない。

碗 (15) 体部下半が若干屈曲する碗で、内面をヘラミガキし、黒色に焼している。

白磁

碗 (18・19) 18・19とも焼成温度が低いいためか十分には焼き締っていない。18は幅2.2cm



第59図 SE1340出土土器実測図(2)

を測る幅広い高台を有する破片である。体部下位以下には施釉されていない。釉色は純白に近いが若干黄色味をおびる。白磁柄Ⅰ-1に属する。19は約1/4程残存し、復元すると口径14.8cm、器高4.0cmを測る。高台皿付以外には全面施釉されている。釉色は土色による変化のためか黄色味の強い白色を呈し、釉には小さな貫入が多い。白磁柄Ⅰ-2に属する。

SD1330出土土器 (第60~63図、別表、図版43)

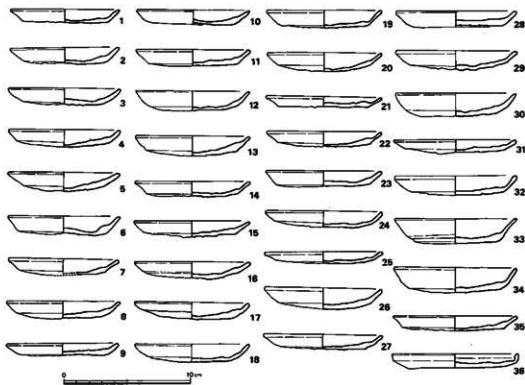
出土した土器は圧倒的に土師器が多く、次いで若干の陶磁器、それに細片化した須恵器が少数出土した。この溝から数多くの遺物が出土したが、その中で南北・東西トレンチの接する南に接して一括出土した土器群を〔Ⅰ〕とし、その他の遺物を〔Ⅱ〕として報告する。現時点においては〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕の出土遺物は同一時代と考えるが、将来の遺物研究の資とするために分けた。

〔Ⅰ〕

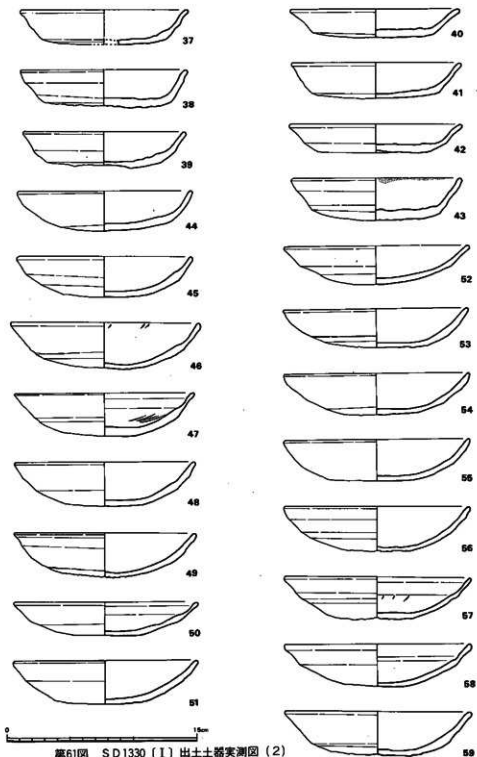
土師器

全てヘラ切りである。

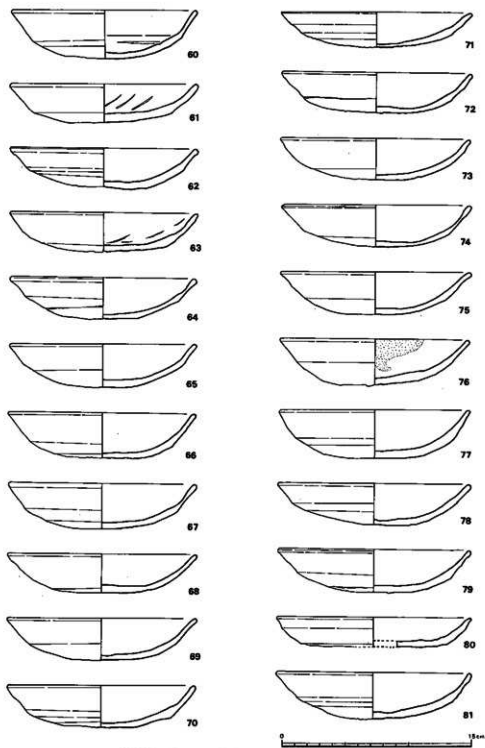
皿a (1~35) 口径8.6~9.8cm、器高0.8~2.0cmを測る。この中に30・33・34のように前の型式(SK802)に近い法量のものも含む。



第60図 SD1330〔Ⅰ〕出土土器実測図(1)

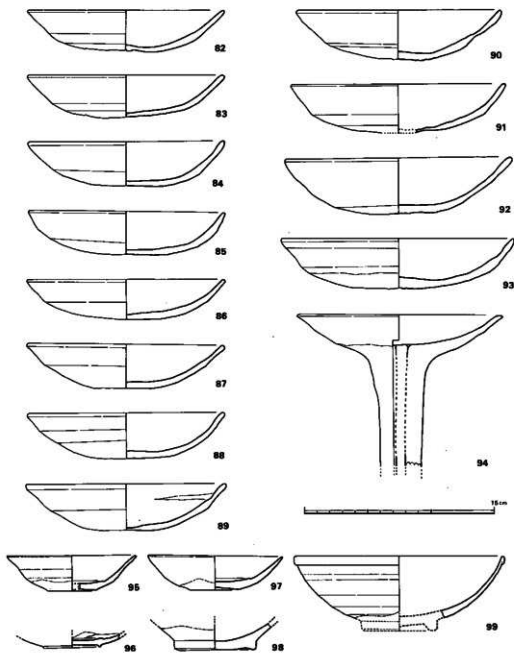


第61图 SD1330 (I) 出土土器实测图 (2)



第62图 SD1330 [I] 出土土器实测图 (3)

皿 (36) 体部を直立させ蓋的な形態を有するもので、口径10.0cm、器高1.1cmを測る。少数ではあるが、この期に限られて出土するものである。



第63図 SD1330 (I) 出土土器・磁器実測図 (4)

杯 a (37~43) 口径13.2~13.6cm、器高2.2~2.9cmを測る平底のものである。3は口縁部近くに油煙が付着していることから灯火器として使用されていたと考えられる。

丸底の杯 (45~93) 口径13.6~18.0cm、器高2.2~4.4cmを測る。91~93のように他に比して口径の大きなものもあるが出土点数は少ない。76は内面に油煙が付着している。

器台 (94) 中央部で径約3.4cmを測る筒状の胴部を有する器高の高い器台で、台部口径は16.3cmを測る。この種の形態の器台は出土点数は少ないが、全て同様な脚部と台部を有しているため、その上・下については定かではない。胎土中に砂粒を多く含み、また若干器面が荒れているため砂粒が浮き出てザラつく。焼成は良好であり、淡黄茶色を呈する。

白磁

総数7点出土した。碗Ⅱ-1が1点、Ⅳ類が2点(1・a 1点、不明1点)皿Ⅴ類が2点、Ⅵ類が1点および不明1点である。

碗 (98-99) 98はⅣ-1・aに属する碗の底部で、小さな黒粒を含む灰白色の胎に淡黄緑色を帯びた釉が掛けられている。99は底部および体部の一部を欠失するが口縁部、体部の大半が残っている。Ⅱ-1に属する。口径16.6cmを測り、体部外面は口縁部下から回転ヘラ削りを行っている。胎土は灰色を呈する。黄色味を帯びた灰色の釉が高台部近くまで掛けられている。釉には貫入が多い。

皿 (95~97) 95・96はⅤ類に属す。95は口径10.1cm、器高2.8cm、底部3.8cmを測る。体部は中位で若干屈曲する。灰色の胎に淡黄色の釉が掛けられている。96は口径10.6cm、器高2.7cm、底径3.8cmを測り、体部の屈曲は95よりも緩やかである。暗灰色の胎に、淡黄緑色の釉が掛けられている。95・96ともに、釉には非常に細かい貫入が数多く入っている。97はⅥ類の皿で、小さな高台が削り出されている。体部内面を陰線により分割している。白色の胎に淡緑色ぎみの透明釉が高台内面を除いて掛けられている。釉には貫入が多い。外底に墨書があるが、判読は困難である。

〔Ⅱ〕

土師器

皿 a (1~17) 口径8.8~9.9cm、器高1.0~1.9cmを測る。17は〔Ⅰ〕の皿 a の30・33・34と同様に法量大きい。

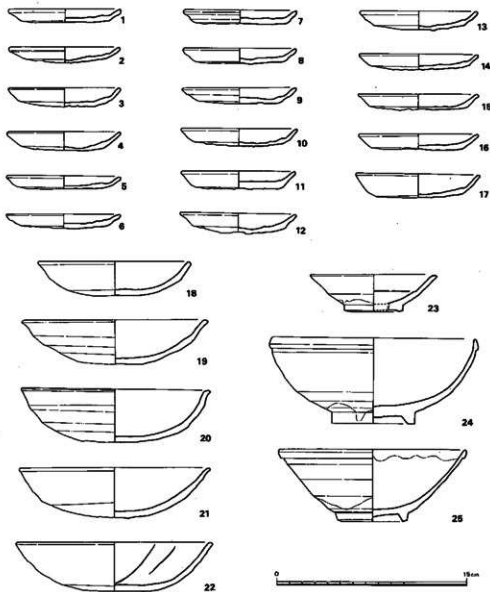
丸底の杯 (18~23) 口径12.0~15.5cm、器高2.7~4.3cmを測る。19~21は口縁部を若干外反させ、また口径に対し器高は若干高く、SK802段階の丸底の杯に相似した特徴を有している。

白磁

総数42点出土した。碗Ⅱ-1が8点、Ⅲ類が1点、Ⅳ類が7点(1・a 3点、不明4点)、Ⅴ類が5点(2・a 1点、2・b 3点、3・a 1点)、皿Ⅱ-1が4点、Ⅴ類が1点、Ⅵ類が2点(1・a 1点、不明1点)および碗か皿の破片であるが細片のため分類困難が10点、蓋の

破片が2点出土した。

椀 (24・25) 24は口径16.0cm、器高6.7cmを測り、Ⅱ-1に属するものである。灰色の胎に黄緑色の軸が掛けられている。焼成は若干あまい。25は口径14.7cm、器高5.7cmを測る。Ⅲ類に属する。灰白色の胎に、淡黄緑色を帯びた灰白の軸が掛けられている。



第64図 SDI330 (Ⅱ) 出土土器・磁器実測図

青磁

越州窯系の青磁碗Ⅰ類が2点（1が1点、不明1点）出土した。

瓦類

今回の調査で出土した瓦は文字瓦と丸・平瓦片である。これらは主にS D1330とS E1340から出土した。

S D1330出土の瓦は文字瓦1と若干の丸・平瓦片である。軒先瓦は出土していない。文字瓦は10cmほどの破片で、「観世音寺」が左字で刻印されている。丸・平瓦は叩き目から、縄目と格子目に分けられ、前者は縄の太いものと細いものがある。格子目は10種類に細分でき、これらを大宰府政庁跡出土文字瓦の叩き目と比較すると、「平井」、「賀茂」と同種のものがある。

S E1340出土の瓦はすべて縄目の叩き目である。縄の太さ、縋りないし叩き方によって6種に分けられる。胎土は砂粒を含み、黒色と灰色のものが認められる。

小 結

検出した主要な遺構は南北溝2本と井戸1基である。南北溝2本は幅約3.7cmを隔てて平行して走り、また出土遺物からみると同時存在と考えられる。このことからこの両溝に挟まれた地域は道路かとも考えられる。道路とすれば、その中心線は政庁中軸から東へ約278m隔った地にあたり、1町を108mとすると2.57町になり、略左郭三坊の中央に走ることになる。出土遺物から埋没年代は11世紀後半頃と考えられる。また、その上限はS E1340出土遺物から8世紀末から9世紀初頭頃に求められる。

5. 第47次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の発掘調査である。御所ノ内という小字名から中世に活躍した少武氏に関連する何らかの遺構が存在する可能性を想定しうることから調査を実施することにした。しかし対象地は既に約1m近く土盛をし、さらに面積が狭いことから、隣接した水田を調査し、対象地に包蔵されている遺構の性格をつかむことにした。地番は太宰府町大字太宰府字御所ノ内41-1番地である。

調査は昭和52年4月5日に開始し、同4月24日に終了した。

検出遺構

調査の結果、検出した主要な遺構は建物跡3棟、櫓列2条、井戸1基および多数の土城・柱穴群である。

建物

SB1350 南北方向の2×3間の掘立柱建物で、大方の柱穴底には石を敷いている。柱間は桁行、梁行ともに2m等間である。西北隅の柱穴から土器が比較的まとまって出土し、またSK1359によって柱穴が切られていることから、建物廃絶の時期をおおよそ想定でき、13世紀後半頃に求められた。

SB1355 SB1350の南に、棟筋・柱間を合わせた南北棟の掘立柱建物である。

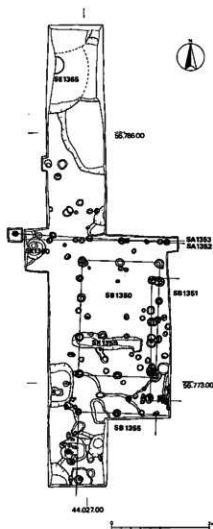
SB1351 SB1350の東側柱穴を切った掘立柱建物で、桁行柱間は約1.6m等間である。

櫓

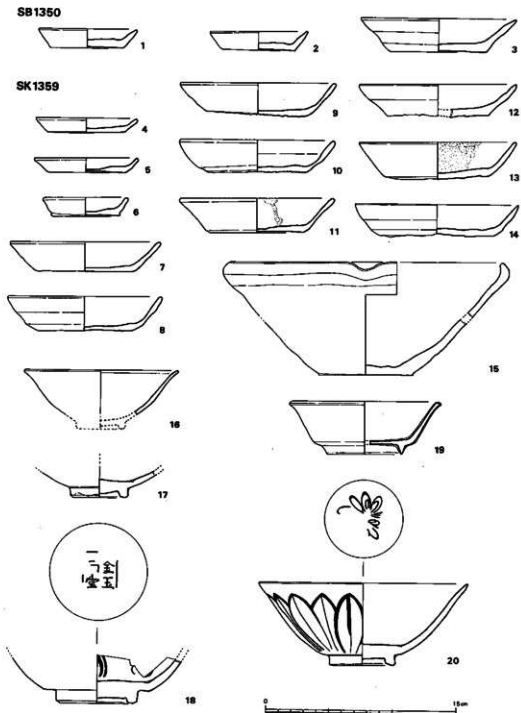
SA1353 SA1352によって切られ、約2m等間の柱穴を有する櫓列で、建物と同様に柱穴内に石を敷き、礎板としている。

SA1352 SB1350・1355の梁行と平行して走り、柱間は約1.9mを測る。

井戸



第65図 第47次調査遺構配置図



第66圖 掘立柱建物・土壇出土土器・陶磁器実測図

SE1365 発掘区北端部で検出した径90cmの桶様の枠を有する井戸である。その西半はトレンチ外にあり、また検出区域の土質が軟弱であるため崩壊の危険があり、井戸枠の上端を検出したのみで完掘はしなかった。

土壌

SK1359 長さ約3.6m、幅0.8m、深さ約0.3mを測る溝状の土壌で、SB1350の柱穴を切って掘り込まれている。中から多数の土器が出土したことから、SB1350の廃絶の時期を推定できた。

SK1360 径1.1m、深さ約0.5mの円形の土壌で、土師器が多数出土した。今回検出した遺構の中ではもっとも古期に属するもので、その年代は12世紀後半頃に求められる。

出土遺物

本調査で出土した遺物は須恵器・土師器の陶磁器・石鍋・銅銭・瓦類等が主なものである。

土器

SB1350出土土器（第66図1～3、別表）

SB1350の柱穴からは少数ながら土器が出土したが、そのほとんどは細片である。これらの土器は建物の廃絶後、柱穴に溜った土中より出土した。土師器の他に白磁碗Ⅳ類1、Ⅴ類1、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・a1および無軸陶器が出土している。

土師器

全て糸切りである。

皿b（1・2） 口径に比して器高の高いものである。口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.6・5.7cmを測る。

杯a（3） 口径12.2cm、器高2.7cm、底径7.5cmを測る。

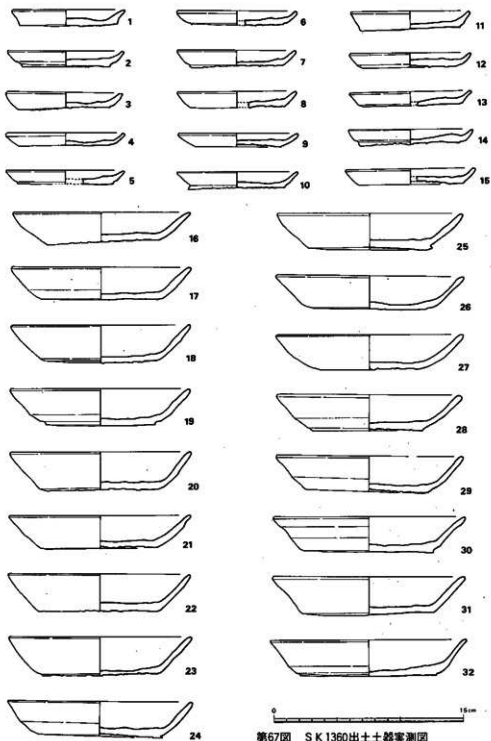
SK1359出土土器（第66図4～20、別表、図版44）

SB1350の柱穴を切って掘り込まれた土壌の埋土中より各種の土器が出土した。これらはSB1350の廃絶年代を知る上で手がかりとなると思われる。出土した土器は土師器の他、白磁では碗Ⅴ類1、Ⅴ類かⅥ類のものが4、Ⅸ類1、皿Ⅸ類3、青磁は全て龍泉窯系青磁で碗のⅠ-1類2、Ⅰ-2類1、Ⅰ-4類1、Ⅰ-5類13、Ⅰ-6・b類1、杯Ⅲ-1類1、小碗Ⅰ類1、青磁小壺1が出土し、磁器以外では片口2、摺鉢1、無軸陶器2、施釉陶器9が出土した。施釉陶器には洗の破片が2個あり、一つは緑色の釉を、他は高火度に焼かれて透明釉のかかったものがある。

土師器

全て糸切りである。

皿a（4・5） 口径8.0・8.1cm、器高1.2cmを測る。



第67圖 SK 1360出土土器実測圖

皿 b (6) 口径 6.7 cm、底径 5.4 cm、器高 1.5 cm を測る。

杯 a (7~14) 口径 11.8~12.8 cm、器高 2.3~2.9 cm を測る。11、13 は内面に油煙が付着しており、灯火器として用いられている。

須恵質陶器

片口 (15) 焼成が不良で淡黄灰色を呈する。口縁端部を内側へ軽く曲げるもので、最大径は口縁端部よりやや下方にある。底径 7.4 cm、復元口径 21.4 cm を測る。体部は内外ともヨコナデし、内底部には仕上げなど他の、指でおさえた跡が残る。底部の切り離しは糸切りである。最大径のやや下方に、重ね焼きの時できたと思われる色の変化がある。

白磁

碗 (16) 体部のカーブから杯とするには無理があり、碗Ⅲ類の小型のものと考えた。復元口径 12.2 cm を測る。胎土は灰白色で、緑黄色を帯びた灰白色の釉がうすくかけられている。

青磁

碗 (18・20) いずれも龍泉窯系青磁である。18 はⅠ-2 類のもので、内面見込みに「金玉満堂」のスタンプを押し、この類としては異例のものである。やや暗い灰白色の粘土で黄緑色の釉が高台部外面まで施される。20 は外面に鎖ぎ蓮弁があり、見込みに花文のスタンプがある。白の強い灰白色の胎土で水色を帯びた緑色の釉を施す (Ⅰ-5・c 類)。

小碗 (17) 龍泉窯系青磁である。Ⅰ類のもので見込みに沈線状の段をつくっている。胎土は暗灰白色でその上に淡い緑色の釉を施している。見込みに は 2~3 mm ほどの砂粒が付着し、重ね焼きの痕跡かと思われる。

杯 (19) 龍泉窯系青磁である。白の強い灰白色のうすい肉内に深草色の釉が厚くかけられている。高台は細く尖り気味になり端部は無釉である。内外に大きな貫入がある。Ⅲ-1・a である。

SK1360 出土土器 (第67図、別表、図版44)

SK1360 からは土師器の小皿、杯がまとまって出土した。土師器の他に、白磁では碗のⅣ類 1、Ⅴ類 4、Ⅴ類かⅥ類のものが 2、Ⅵ類 1、皿のⅢ類 1、Ⅶ類 3 青磁では同安窯系青磁碗Ⅰ類 1、Ⅱ類 1、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2 類 3、Ⅰ-4 類 1、青白磁では碗 1、合子 1 がそれぞれ出土した。磁器の他に石鍋の破片も出土している。

その他の陶磁器 (図版44-B)

季朝壺 肩部付近の破片が出土した。黒灰色の胎土に灰白色の釉をかけ、その上から茶色の釉で文様を描いている。発掘区の北半で検出した落ち込み埋土中より出土した。

小 結

検出した主要な遺構は建物跡 3 棟、櫓列 2 条、井戸 1 基および多くの土壌である。建物の時

期は柱穴出土遺物および柱穴を切る土壌から13世紀後半頃と考えられる。S B 1350とS B 1355は棟筋を合わせて南北に並んでつくられており、同一時期のものと考えられる。またS B 1350の北に時期を異にする2条の目隠しの柵列が存する。このように目隠しを有し、しかも規則正しく建物を配する遺構であることから、一般のものとは異なった様相を呈しており、さらに御所の内という小字名を今日に残していることから、またこの13世紀という時代は少弐氏が活躍した時代でもあり、これらの遺構はそれに関係する建物の跡かとも考えられる。

6. 第48次調査

本次調査は住宅改築に伴う事前の発掘調査である。対象地域の東に接して南北の小路（政庁から約4町強の地点）があり、第9次調査ではこの小路に接して南北溝S D 205の西岸を検出している。しかし、東岸と考える地は南北の小路の下になるため、その規模を知ることができなかった。そこで、本次調査の主目的をこの溝の東岸の検出に置いて調査を実施した。地番は太宰府町大字観世音寺字堂廻191番地である。

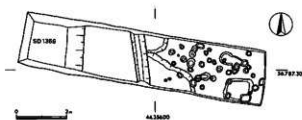
調査は昭和52年4月25日から同年4月27日までである。

検出遺構

検出した遺構は溝2本およびピット群である。

溝

S D 1366 溝の東岸を検出したのみである。検出面積が狭いためその埋没時期は不明であるが、出土した遺物から鎌倉時代以降と考えられた。



第68図 第48次調査遺構配置図

小 結

S D 1366が第9次調査で検出したS D 205の東岸とすれば溝幅は約14mとなる。时期的には合致するが、発掘面積が狭いため即断は避けたい。

7. 第49次調査

政庁地区においては、既に後殿、正殿を除いて主要な遺構についての調査をほとんど終了している。そこで、今回は後殿の位置および規模を把握し、さらに正殿の基壇化粧を明らかにすることを主目的として調査を実施した。

調査は昭和52年5月11日から同5月30日まで実施した。

検出遺構

寛政5年、文政3年に作成された古絵図によると、後殿の柱筋と正殿のそれとは同一であることから、まず正殿の柱筋にあわせて南北トレンチ・グリッドを設定した。その結果、正殿では階段および基壇端を、また後殿では礎石抜き取り穴および礎石根石と基壇化粧を検出した。そこで次に後殿南側基壇化粧にあわせて東西トレンチを設けた。その結果、南1列の柱位置と基壇の西南のコーナーを検出した。

正殿は政庁地区の中心建物で、第30次調査補足で基壇前面の一部を調査したが、後世の削平により調査地域では基壇や基壇化粧を検出できなかった。この結果と現基壇は南に傾斜していることから、正殿基壇南端は遺存状態が悪いもしくは遺存しないことが予想された。そこで基壇北側にグリッドを2箇所設定して調査を行った。その結果、基壇化粧は凝灰岩の切り石を使用し、壇上積みの可能性を有していることが判明した。

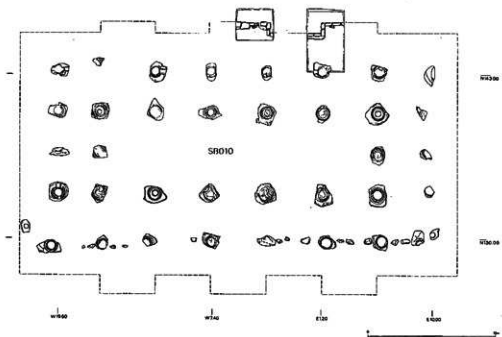
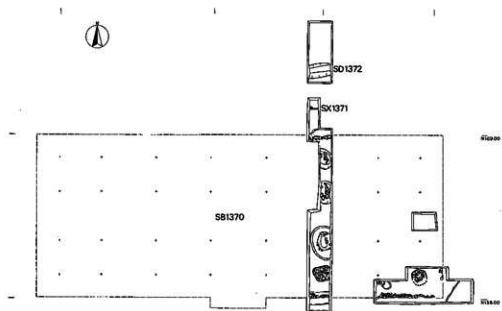
建物

SB 010 正殿平面は東側、南側底部分の礎石が原位置を動いているため正確には知り得ないが、残存礎石から7×4間の四面底の建物であり、桁行28.55m、梁行13.00mであることが知られる。礎石は花崗岩を使用し、柱座を丁寧につくり出している。また、身舎の柱座と庇の柱座の大きさには差があり、後者の方が大きい。

基壇の高さは約0.9m前後を測り、基壇化粧は最下段しか遺存していなかったが、地覆に凝灰岩の切り石を使用している。この最下段の凝灰岩の切り石は長さ50～70cm、幅25cm前後、高さ20cm強を測る長方形のもので、壇上積み基壇の地覆として使用されたものと想定できる。底部分の礎石の柱座の心から地覆石の北端までは約3.1mを測る。この地覆石の前面にレンズ状の薄い砂層が検出された。この砂層が雨落ち溝とすれば、柱座の心からこのレンズ状の凹みの心までは3.35mを測り、軒の出を明らかにする手掛りとなる。

3基の階段のうち、中央および東側の2基を検出した。基壇端から約0.85mほど張り出してつくられている。

SB 1370 後殿の平面は7×3間の礎石建物で、桁行はSB 010と同一であり、しかも柱筋を通して構築されている。梁行は9.3cmで、柱間は中央部が3.9mと広く、北、南は2.7mを



第69圖 第49次調査遺構配置図

測る。礎石はすべて抜き取られ、根石のみが残存している。

基壇は東西32.15m、南北12.9mの規模である。基壇化粧は南・西・北とも改修が行われており、南では当初細目の瓦のみを使用し、改修時には格子の叩き目を有する瓦も用いている。北側の基壇化粧には瓦を用いず、花崗岩の自然石を使用し、裏込めに瓦を用いている。この裏込めの瓦から、この石を使用した化粧は改修時のもので、創建当初のものでないことが判明した。

階段は発掘区内では検出されなかったが、南側中央に1基のみが付設され、他には存しなかったと考えている。

溝

SD1372 SX1371の北側で独立して東西に走るもので、幅約1m、深さ約0.2mを測る。発掘面積が狭く、また出土遺物も少ないため、この溝の性格および時期については詳らかにしえない。

その他の遺構

SX1371 南側に面をなす瓦列で、この北側には版築状の積み土が見られる。後殿の背面を画する目隠堀的な施設であろうか。

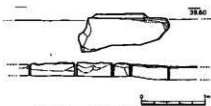
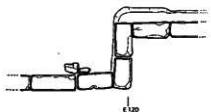
出土遺物

瓦類 (第71・72図、図版49)

今回の調査で出土した瓦類の主なものには軒先瓦、文字瓦、丸・平瓦と他に埴がある。軒先瓦は総数11点で少く、SB010階段北側の茶色土、SB1370瓦積基壇南側(茶灰色土)から主に出土した。文字瓦は30点あり、「平井瓦」、「佐瓦」、「賀茂瓦」、「安楽之寺」、「末」、「筑前」、「前」銘などが出土したが、なかでもSB1370南側瓦積基壇使用瓦に文字瓦が認められたため、ここではそれらについて記述する。

軒丸瓦 (第71図、1～6、図版49)

軒丸瓦は7点で6種に分類できる。このうち2は内区中房に1+8の蓮子を配する細単弁21弁蓮華文で、回廊西南隅の調査で比較的多く出土しており、又筑前国分寺講堂跡で検出した土壇(SK053)から土師器と伴出し、それらから8世紀後半頃に求められるものである。3は



第70図 SB010階段実測図

九瓦凸面に「平井瓦」銘が刻印され、内区中房は1+6の蓮子を配し、細単弁14弁蓮華文である。外区内縁珠文25個、外縁は素縁である。6は7弁が複弁で、1弁が単弁となり、外区は唐草文が巡る。安楽寺跡から出土しているものと同種のものである。

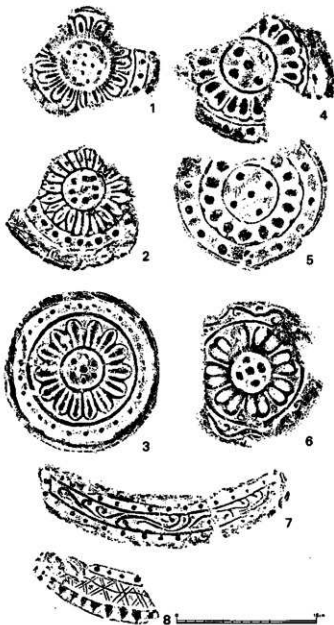
軒平瓦 (第71図、7・8、
図版49)

軒平瓦は4点4種に分けられる。7は瓦当中心部から左右に唐草が反転するが、左右対称ではない。上・下外区、脇区は珠文である。又平瓦凸面は斜格子目の叩きで「佐瓦」銘(左字)が認められる。8は二重斜格子目から構成される幾何学文である。瓦当中央部に范割れの跡があり、上外区は珠文、下外区は下向凸鋸歯文である。

文字瓦 (第71図1~6)

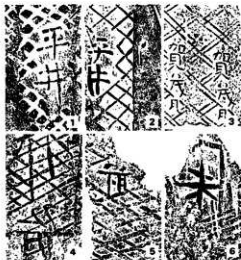
S B1370の基壇は2回の改修が行なわれており、当初の掘方からは黒色を呈した軟質の縄目瓦が出土している。改修時瓦積基壇には格子目の瓦を使用し、そのなかに文字瓦6種が認められた。

3・5は第71図-8と関連があり、3は8の瓦当文様構成(二重斜格子目)と類似し、5は8の平瓦凸面に印刻されている。さらに4と5は「筑前」銘から因名と想定されるものである。このなかで1・2・5・6は政庁南門跡基壇



第71図 第49次調査出土軒先瓦拓影

下の瓦溜りで出土し、又3・5は筑前国分寺跡SK 056から土師器と共に出土している。よって土師器からこれらの下限時期を10世紀初頭頃に求めることができる。政庁地区では、これまで検出した建物のなかで瓦積基壇を有するものは第41次調査（北門）で検出したSB1060に次いで2例であり、SB1060も斜格子目の瓦が使用されている。したがって瓦積基壇改修時期を考える上で使用文字瓦は一つの手がかりとなる。



小 結

今回の後殿跡の調査を機会に、これまでに行っ 第72図 SB1370瓦積基壇使用文字瓦拓影
た調査も含めて、この正殿背後の地域についてまとめておこう。

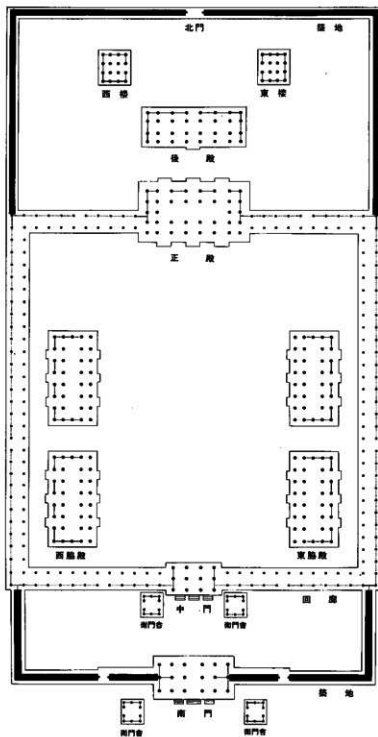
この地域は、発掘調査以前には礎石は1個も見当らず、遺構のうえからの手がかりはなかった。しかしながら、江戸時代に描かれた絵図面が残っており、ここにもかつて多数の礎石が遺存していたことを知ることができる。

まず、寛政5年(1793)にかかれた図面には19個の石が描かれており、少なくともこの地域に建物が存在したことを知ることができる。しかしながら、描き方はランダムであり参考にはならない。ついで、文政3年(1820)の大宰府址礎石現改之図には40個の石が整然と並べて描かれている。これらの石は正殿後方に若干西方にずれて描かれている3間×7間と、その東北に描かれている2間×2間の2つのグループに分けることができる。

今回の調査によって、後殿は梁行3間で、しかも柱筋を正殿にあわせており、この結果からみても後殿は絵図同様3間×7間に復元できる。東北の2間×2間の礎石については後に述べる。今回の調査では、礎石はすべて抜き取られ、しかも比較的新しい時期であることが観察できたが、一体いつ頃抜き取られたのであろうか。

明治24年に出版された『端方涌源』に、この文政3年の絵図が転載されており、それに明治23年6月実査の時の石数が追記されている。しかしながら、後殿部分については追記がなく、これからみると少なくとも文政3年から明治23年までの70年間の間に抜き取られた可能性は大きい。

次に、この後殿を中心とする正殿後方の地域を取り囲む施設については、昭和47年度に第15次調査として実施した回廊東北隅の調査によって、築地であることが明らかとなった。しかしながら、この調査では築地の検出範囲が狭く、その規模、構造については明らかにすることができなかった。ただ、この築地と回廊との接続部に設けられた暗渠の長さから、築地の基壇幅



第73圖 政庁跡建物配置模式圖

は約3.8m前後のものではなかったかと推測できたにすぎなかった。

この調査結果をもとに、昭和48年度にこの築地の範囲を確認すべく、第15次調査地の北方において第26次調査を行ったところ、その東北隅を検出することができ、その範囲を明らかにすることができた。

それによると、回廊から北へ伸びる築地は北面回廊の心から66.3mのところでは西に折れるしたがって、正殿背後は東西114.6m、南北66.3mの範囲が築地によって囲まれることになる。また、この築地の基壇幅は3.6m（12尺）で、その上に幅5尺の築地本体がのり、その外側に巾3尺、内側に4尺の犬走りを持った構造のものであることが明らかとなった。

この調査では、築地内から時期を異にする2棟の建物を検出した。そのうちの1棟は3間×3間の礎石建物で、礎石は北から第1、2列が残っているが、第3、4列は比較的新しい時期に抜き取られている。この建物は検出された位置からみて、さきに述べた文政3年の大宰府址礎石現改之図に描かれている後殿東北の2間×2間の礎石建物であると考えられる。

さらに昭和51年度には、この北面築地の中央部に設けられたと考えられる北門についての調査を行った。この北門については、当初中門程度のもを予想していたが、調査の結果は門跡と確定できる遺構は検出されず、築地基壇の状況から簡略な臨門的構造のものが推測できたとどまった。また、この調査においても瓦積基壇の一部を検出したが、大部分が発掘区外であったため、その全体を確認するにいたらなかった。

以上、述べたごとく、正殿背後の地域は築地によって囲まれ、その中にこれまで4棟の建物が確認されている。この地域は現在小字名を「大裏」といい、平城宮における「内裏」的性格を有する場所と考えられる。しかしながら、昭和48年度に行った、築地東北隅の調査では、建物と築地の間から検出された土抔（SK 514）から1,000点近くの木簡が出土した。大部分は小断片と削屑であり、かすかに墨痕と認めうるものか、ないしは1、2字を判推読できる程度のもものが大半であるが、内容的には習書と判断されるものが多いことが特徴的である。とくに「謹解申」の各字を習書したものが多く、しかも何人かの筆に分かれており、この附近において、そうした解文の書かれる機会が多かったことが推測できる。このような点から考えると、後殿を中心とする正殿後方の築地によって囲まれた地域は日常的な執務の場として使われていた可能性はきわめて大きいといえる。この地域の調査はこれまでにわずかな面積を終了したにすぎず、今後の調査に期待するところは大きい。

註1 『大宰府史跡』-昭和47年度発掘調査概報- 1973

註2 『大宰府史跡』-昭和48年度発掘調査概報- 1974

註3 『大宰府史跡』-昭和51年度発掘調査概報- 1977

註4 九州歴史資料館『大宰府出土木簡概報』 1976

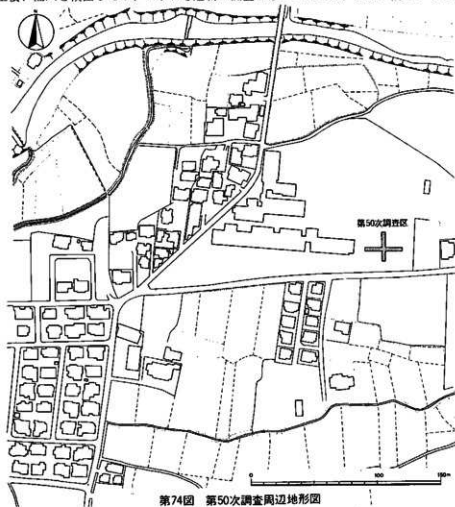
8. 第50次調査 (左郭八条二・三坊)

筑陽高校体育館建設に伴う事前の発掘調査である。この地は周知のように奈良・平安時代の遺構、遺物が発見された鼓石遺跡として紹介されている。また推定条坊左郭二・三坊にまたがっている所から、条坊遺構および奈良・平安時代の遺構の検出を目的として調査を開始した。地番は太宰府町大字太宰府字鼓石2567-1番地である。

調査は昭和52年7月25日に開始し同年8月6日に終了した。

検出遺構

体育館建設予定地に南北23m、東西29m、幅3mの直交するトレンチを設定した。その結果、溝、土壇、柱穴を検出したが、いずれも遺物が出土しなかったこと、および覆土から出土する



第74図 第50次調査周辺地形図

遺物が近世陶器まで含んでいることから時期は決め難い。

溝

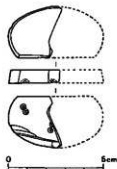
SD1373 発掘区中央よりやや西側（政庁中軸線から西へ約212.5m）で検出した南北溝で、幅約0.6m、深さ約0.4mを測る。

出土遺物

遺構面の覆土中から多数の須恵器、土師器、陶磁器、石製品が混在して出土したが大部分は細片化している。今回は石帯のみ報告する。

石帯（第75図）

南北トレンチの南端近くの覆土中から出土したものである。今回出土した石帯は帯の中間を飾る丸柄に相当する。約半分欠失しているが、復元すると長さ約5.0cm弱、幅2.7cm、厚さ0.7cmを測る。裏面に二カ所のかがり穴が残っている。淡青灰色の中に黄茶色の縞模様が見られることから推積岩かとも考えられるが石質については不明である。表面および側面はよくみがかれて光沢を放っている。



第75図 石帯実測図

小 結

本次調査で検出した主要な遺構はSD1373のみである。この南北溝は政庁中軸線から東へ約2町隔てた地点にあるが、出土遺物もなく、また層位から古代に属するものと判断する決め手がないため条坊に関する遺構と断じ難い。今後の調査を待ちたい。

9. 第51次調査

太宰府町立水城小学校校舎増築に伴う事前の発掘調査である。

調査地は「遠賀団印」出土地点の西北、約50mの位置にあり、現在は盛土されて一段高くなっている。調査地に隣接して建てられた新築校舎の基礎工事の際に瓦片、土器片が採取されており、したがって本調査ではそれに関連する遺構の有無の確認を主眼とした。

検出遺構

顕著な遺構は検出できず、若かに小ピット群及び土壇を検出したに留まる。柱根の残るピットを検出したが調査地が狭小なため全様は知れない。

出土遺物

本調査では須恵器、土師器、青磁、及び瓦類が出土した。出土量は少く、まとまったものもない。

土器

各層位、土壇等から出土したが、須恵器、土師器ともに細片のため図示できない。

青磁(第77図)

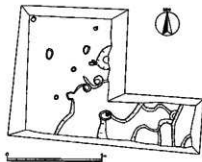
越州窯系青磁である。復元高台径7.3cmを測る。細くて高い輪状高台を有するもので、体部外面を凹線によって分割する。本来は全体に黄緑色の釉がかけられるが、ほとんど風化し、白色化している。胎土は精良で灰白色を呈す。旧耕作土から出土した。

瓦類

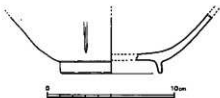
瓦は軒丸瓦と若干の丸・平瓦片である。これらは主に発掘区東部の落ち込みから出土した。

軒丸瓦は2点出土し、1つは複弁八弁蓮華文で、中房に1+5+10の蓮子を配し、弁は短く丸味をもっている。老司式の退化したものである。他は単弁11弁蓮華文で、中房の蓮子は1+6で、弁は丸く、外区内縁は珠文である。胎土は砂粒が多く、灰黄色を呈し、軟質である。

丸・平瓦はすべて破片である。これらの叩きを分類すると視目3種と格子目7種に分けられる。視目のものは黒色ないし灰色を呈し、やや軟質である。格子目は小さいもの(0.4cm四方)から大きい(1.5cm四方)があり、胎土は砂粒を含み、全体に軟質のものが多い。



第76図 第51次調査遺構配置図



第77図 第51次調査出土越州窯系青磁検定測図

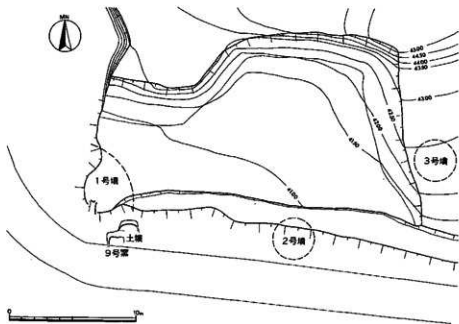
10. 第53次調査

太宰府町立学院中学校の北側を通る町道の拡幅工事に伴い、古墳1基が破壊されるに至った為、緊急に発掘調査を行った。調査地は大宰府政庁跡より西へ約400mの所にある標高49mほどの小高い丘陵で、現況では独立丘陵の観があるが、本来は四王寺山より南へ派生する舌状丘陵の先端部にあたる。地番は太宰府町字来木430である。

この地域は古墳、瓦窯址群の存在が知られており、又、東斜面では大宰府史跡第19次調査において工房跡等が発掘調査されている。瓦窯址群については以前、大宰府政庁跡付近における窯跡の分布を記したことがあるが、この来木瓦窯址群についてもふれている。現在までに9基が確認され、1号窯、2号窯としたものについては大川清氏等により発掘調査が実施されている。

古墳は現在4基を確認し、西から1・2・3号墳、図示していないがこれらより標高の高い位置にあるものを4号墳とした。これらはいずれも著しい削平をうけ、石材が露出しており、特に2号墳は崖下に石材が転落し、完全に崩壊しているものと思われ、推定位置を図示した。

今回は道路の拡幅に際し、削り取られる部分に在る来木1号墳、及び調査中に検出した来木9号窯、土城1基について調査を行なった。



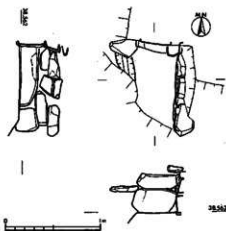
第78図 第53次調査周辺地形図

検出遺構

古墳

来木1号墳 (第79図、図版26)

墳丘 削平のために顕著な墳丘は認められなかった。西側の崖面を観察すると厚さ30cmほどの盛土が残り、その終るところに墓域を画すると思われる溝状のものが確認できた。この溝状のものは東側崖面では観察できず、古墳を一周するものではないが、付近の地形を考えると墳裾の高い部分にのみ設けられた溝状のものであろう。これを墳裾とし、石室が墳丘の中心にあると仮定すると、径約9mほどの墳丘が考えられる。



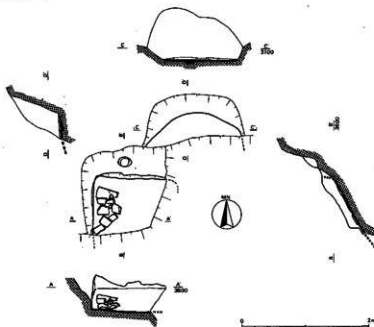
第79図 来木1号墳石室実測図

内部主体 ほとんどを削られ奥壁部を残すのみである。幅は西側腰石の痕跡が検出できたのでそれから測ると約0.4m、長さは残存部で1.0mを測る。石材は花崗岩であり、腰石として50~70cmほどの石を横長に置き、その上に20~30cmの石を積んで小石室を構築している。床は砂粒を含んだバイラン土を貼り、床面としている。

瓦窯

来木9号窯跡 (第80図、図版27)

構造 窯跡の東側、南側は削除され、窯灰部のみを検出した。焼成部から灰原にかけては道路の下方面になる。残存長85cm、残存最大幅110cm、傾斜28度を測る。床面は一部青灰色に焼けているが、全体に黄灰色を呈し、強く焼けているとはいえない。床面で格子目の平瓦9点を検出し



第80図 来木9号窯跡・不明土墳実測図

た。左側壁の残存高は15cmで一部青灰色に焼けている。窯尻部の角張った形態は来木北瓦窯ないし、来木1・2号窯に類似している。

土壌

窯系の北約 0.8m、段差約 1.2mの位に土壌を検出した。最大幅約 1.5m、残存長0.45m、壁の高さ0.75mを測る。床面の傾斜はなく、そこに厚さ約 5cmの黄白色をした生粘土が認められた。

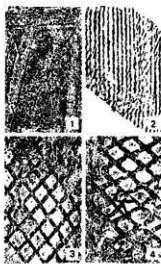
出土遺物

来木1号墳

石室内掘乱土中より須恵器の杯蓋、有高台杯の砂片がそれぞれ出土した。いずれも細片で全体は知れないが、有高台杯は断面四角形で端部が外へはねる高台をもつものである。

来木9号窯

出土した瓦は窯跡床面から9点と他に11点がある。これらはすべて平瓦片で、叩き目から4種に分けられる。1は暗灰色をした平瓦で凸面をへらで成形している。2は縄目の瓦で技法的に古い要素があり、他の瓦と時期を異にするものである。3・4は床面から出土しない。3は来木北瓦窯で出土しており、赤褐色に焼成されている。4は斜格子目の中に「大」の文字が認められる。全体に赤く焼けたものが多い。3、4共に胎土に砂粒が多く含まれ、軟質である。



第81図 来木9号瓦窯跡出土平瓦拓影

小 結

藏司跡から池をへだてたこの舌状台地は、現在古墳4基、瓦窯跡9基と工房関係遺構を確認している。古墳は今回はじめて調査をした。しかし、その具体的な規模・構造は明らかにし得なかったが、内部主体の構築状態および出土した須恵器などから7世紀後半頃に考えられる。又窯跡から出土した格子目は大宰府政庁および来木北瓦窯跡等で認められ、それらの手法、出土状況などからすくなくとも10世紀前半頃に考えられる。

別 表

番号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内庭部ナテの有無	板状仔俱の有無
					ヘ	糸		
SE1165 (第44次調査)								
皿 a								
1	1	8.8	1.2	7.5		○	○	○
2	2	8.8	1.3	6.8		○	○	○
杯 a								
3	3	11.6	2.5	7.8		○	○	○
4	4	12.3	2.6	8.4		○	○	○
5	5	12.3	2.8	8.5		○	○	○
杯 c								
6	6	15.6	4.5	12.4		○	○	
SK1150								
皿 a								
1	1	7.8	1.0	5.0		○	○	○
2	2	8.0	1.0	5.5		○	○	○
3	3	8.0	1.1	5.7		○	○	○
4	4	8.0	1.4	5.2		○	○	○
5	5	8.1	1.1	5.65		○	○	○
6	6	8.1	1.1	5.9		○	○	○
7	7	8.2	1.2	5.7		○	○	○
8	8	8.2	1.2	5.6		○	○	×
9	9	8.2	1.2	5.0		○	○	○
10	10	8.2	1.2	5.8		○	○	○
11	11	8.2	1.2	5.7		○	○	○
12	16	8.3	1.0	5.5		○	○	○
13	12	8.3	1.1	5.6		○	○	○
14	13	8.3	1.2	5.75		○	○	○
15	17	8.3	1.3	6.2		○	○	○
16	18	8.4	1.0	6.4		○	○	○
17	14	8.4	1.3	5.8		○	不明	○
18	15	8.3	1.3	5.3		○	○	○
杯 a								
19	19	11.5	2.2	7.0		○	○	○
20	20	11.5	2.3	6.2		○	○	○
21	21	11.5	2.3	7.4		○	○	○
22	22	11.6	2.4	7.5		○	○	不明
23	24	11.8	2.3	7.3		○	○	○
24	23	11.9	2.8	7.6		○	○	○
25	25	11.9	2.2	7.2		○	○	○
26	26	11.9	2.5	8.1		○	○	不明
27	27	12.1	2.4	7.6		○	○	○
28	28	12.2	2.6	7.5		○	○	○
29	29	12.3	2.6	7.2		○	○	○
30	30	12.4	2.4	7.4		○	○	○
31	31	12.4	2.5	8.2		○	○	×
32	32	12.4	2.6	8.6		○	○	○
33	33	12.5	2.3	8.2		○	○	×
34	34	12.5	2.4	8.2		○	○	○

番 号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の有 無	底状圧痕の 有 無
					へ ら	糸		
SKI 154								
皿								
1	1	7.2	1.4	5.3		○	○	○
2	2	7.6	1.4	6.2		○	×	×
3	6	7.8	1.4	6.0		○	×	?
4	3	7.9	1.4	6.2		○	○	?
5	4	7.9	1.4	6.0		○	×	×
6	7	7.9	1.5	5.8		○	○	○
7	5	8.0	1.5	6.2		○	×	×
8	8	8.0	1.5	5.8		○	○	○
9	9	8.0	1.6	5.8		○	○	×
10	10	8.0	1.6	6.0		○	×	×
11	11	8.1	1.4	6.3		○	○	×
12	12	8.2	1.5	6.4		○	×	×
13	13	8.2	1.7	5.8		○	○	?
14	14	8.3	1.6	6.2		○	○	○
15	15	8.4	1.5	6.8		○	×	×
16	16	7.6	1.2	5.3		○	○	○
17	17	7.7	1.1	5.5		○	○	○
18	18	8.0	1.3	6.3		○	?	○
19	19	8.1	1.3	6.3		○	×	×
20	20	8.1	0.9	6.6		○	○	○
杯 a								
21	21	10.7	2.3	8.4		○	○	○
22	22	11.0	2.5	8.6		○	○	×
23	23	11.3	2.5	8.2		○	×	不 明
24	24	11.3	2.8	8.2		○	×	不 明
25	25	11.4	2.6	8.3		○	○	○
26	26	11.5	2.4	8.7		○	○	○
27	27	11.5	2.5	8.3		○	○	○
28	28	11.5	2.9	8.6		○	○	○
29	29	11.6	2.6	8.9		○	○	○
30	30	11.7	2.6	8.6		○	○	○
31	31	11.7	2.7	8.0		○	○	×
32	33	11.9	2.3	7.6		○	○	○
33	32	11.9	2.3	8.2		○	○	○
34	34	11.9	2.5	8.0		○	○	○
35	35	11.9	2.8	8.9		○	○	○
36	36	12.0	2.2	8.7		○	○	○
37	37	12.0	2.6	9.2		○	○	○
38	38	12.0	2.7	8.2		○	○	○
39	39	12.0	2.7	9.2		○	○	○
40	41	12.0	2.8	7.5		○	○	○
41	40	12.0	2.8	8.0		○	○	○
42	42	12.1	2.5	8.3		○	○	○
43	43	12.1	2.6	8.0		○	○	○
44	44	12.2	3.0	8.1		○	○	○
45	45	12.3	2.6	8.4		○	○	○

番 号	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り へ ら	離 し 系	内底部ナアの 有 無	板状圧痕の 有 無
46	46	12.3	2.8	8.7		○	○	○
47	47	12.4	2.3	8.6		○	○	○
茶灰土 (第45次調査)								
須恵器 (杯蓋)								
1	1	13.9	1.1		○		○	×
2	2	14.0	2.4		○		○	×
3	3	16.1	1.8		?		○	×
4	4	17.6	2.8		○			×
須恵器 (蓋蓋)								
1	5	14.1	3.9		○		×	×
須恵器 (杯)								
1	6	12.5	(3.8)	7.7	○		○	×
2	7	12.2	3.9	8.7	○		×	×
3	8	13.6	(4.8)	8.9	○		○	×
4	9	15.1	(4.5)	9.3	○		不 明	×
須恵器 (碗)								
1	10	10.2	(3.25)	6.6	○		○	×
2	11	10.7	3.35	7.3	○		○	×
3	12	13.8	3.85	9.0	○		○	×
須恵器 (皿)								
1	13	16.1	(1.9)	12.3	○		○	×
杯 蓋								
1	14	17.6			○		×	?
2	15	18.4			○		○	?
杯								
1	16	13.9	(3.2)	6.7	○		×	?
2	17	14.6	3.4	10.7	○		×	?
皿								
1	18	14.2	(2.1)	11.2	○		○	?
黄褐土								
須恵器 (杯蓋)								
1	1	15.8	2.5		○		×	×
2	2	16.4	2.2		○		○	×
須恵器 (杯)								
1	3	(12.1)	(3.1)	7.8	○		○	×
須恵器 (碗)								
1	4	11.9	(3.6)	5.8	○		○	×
2	5	12.4	(3.45)	8.0	?		○	×
3	6	13.8	5.5	8.0	○		○	×
須恵器 (皿)								
1	7	20.4	(2.5)	(14.7)	○		○	×
2	8	25.2	(3.3)	20.6	?		×	×
皿								
1	32	13.6	1.6	8.6	?		○	○
2	33	15.4	2.1	9.9	○		○	○
3	34	16.5	1.8	13.2	○		○	?
4	35	17.1	2.0	13.2	○		?	?

番 号	挿筒番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
5	36	17.8	2.0	13.7	○		?	?
皿 a								
1	9	8.7	0.9	7.2		○	○	×
2	10	8.9	1.4	6.4	?		○	○
3	11	8.9	1.1	6.4		○	○	×
4	12	8.9	1.4	6.6		○	不 明	○
5	13	9.2	1.1	7.2		○	○	○
6	14	9.1	1.3	6.5		○	?	○
7	15	9.1	1.0	7.3	○		○	○
8	16	9.3	1.3	7.0		○	○	○
9	17	9.3	0.8	7.3		○	○	×
10	18	9.6	1.1	7.2		○	○	×
11	19	9.9	1.1	7.3	○		不 明	○
12	20	10.5	(1.6)	7.6	○		不 明	○
杯 a								
1	21	11.1	(2.5)	6.7	○		○	○
2	22	13.6	(2.4)	8.9		○	?	?
3	23	13.7	2.3	8.6		○	○	○
4	24	14.8	3.1	10.5		○	?	?
5	25	15.0	2.3	8.2		?	×	○
6	26	15.1	3.3	11.8	○		○	○
7	27	15.2	2.9	11.4	○		○	○
8	28	15.2	2.8	10.0		○	○	
9	29	15.9	2.2	11.6		○	○	○
丸底の杯								
1	30	16.0	3.0			○	○	○
2	31	16.4	3.5		○		不 明	不 明
椀								
1	37	15.2			?		×	?
2	38	19.2	5.4	8.3	?		?	?
瓦器 (皿)								
1	39	9.0	1.4	6.2		○	×	×
2	40	10.0	2.1	6.3	○		○	×
瓦器 (椀)								
1	41	16.3	5.3	7.0高台	○		×	×
2	42	16.7	5.0	6.7高台	○		×	○
黒褐色								
皿 a								
1	1	6.5	0.8	5.4		○	○	×
2	2	8.3	1.2	6.4		○	○	?
3	3	8.2	1.1	6.4		○	○	×
4	4	8.3	1.5	6.2		○	○	○
5	5	8.5	1.1	5.8		○	○	○
6	6	8.7	0.8	7.0		○	○	○
7	7	8.7	1.3	6.6	○		○	○
8	8	8.8	1.2	7.2		○	○	○
9	9	8.9	1.2	6.8		○	○	○
10	10	9.0	0.8	7.4		○	○	○

番号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
11	11	9.0	1.3	7.4	○		○	○
12	12	8.9	1.1	7.5	○		○	○
13	13	9.3	1.5	6.0		○	?	○
14	14	9.5	1.1	6.8		○	○	○
15	15	9.5	1.5	7.5	○		○	○
16	16	9.5	1.2	6.3	○		○	×
皿 b								
1	17	6.5	2.2	3.6		○	○	×
2	18	7.2	2.1	4.1		○	×	×
3	19	7.1	1.9	5.0		○	×	×
4	20	8.3	(2.3)	5.7		○	○	?
皿 c								
1	21	8.8	2.1	5.0 高台		?	○	×
小 釜								
1	22	5.3	3.6	5.7		○	×	×
杯 a								
1	23	13.9	3.0	9.9		○	○	○
2	24	14.0	2.6	10.0		○	○	○
3	25	14.9	3.6	10.5		○	○	○
4	26	15.2	3.1	10.4	○		○	○
5	27	15.3	2.9	10.7		○	○	○
6	28	(15.6)	3.0	11.3	○		○	○
7	29	15.4	(2.8)	10.3		○	○	○
杯 b								
1	30			4.8		○	×	
SDI 230A								
皿 a								
1	2	6.6	1.1	4.2		○	?	×
2	1	6.6	1.1	4.4		○	○	×
3	3	7.1	1.2	5.3		○	○	○
4	4	7.6	1.0	5.5		○	○	不明
5	5	7.8	1.1	5.6		○	不明	×
6	6	8.0	1.0	6.0		○	○	不明
7	7	8.3	1.0	6.0		○	○	○
8		8.6	1.3	6.4		○	○	○
9		8.6	1.3			○	○	○
10	8	8.8	1.3	6.7	○		○	○
皿 b								
1		7.4	2.2	4.9		○	○	×
杯 a								
1	9	12.0	2.6	8.1		○	○	○
2	10	12.2	2.9	7.8		○	○	○
3		12.2	2.95	8.0		○	○	○
4	11	12.4	2.8	8.0		○	○	○
5	12	13.0	2.8	9.0		○	○	○
6	14	14.0	3.1	9.0		○	○	○
7	13	14.0	3.7	9.2		○	○	○

番号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無	
					ヘラ	糸		有	無
SDI230B									
皿 a									
1	19	7.2	1.2	6.1		○	○	○	
2	21	7.4	1.1	6.0		○	不明	○	
3	20	7.4	1.5	5.0		○	×	×	
4	22	7.8	1.1	6.0		○	○	○	
5	23	8.0	1.0	6.2		○	○	不明	
6	24	8.1	0.9	6.2		?	○	○	
7	25	8.6	1.4	7.2		○	○	○	
8	26	8.8	1.2	7.2		○	○	○	
皿 b									
1	15	6.0	1.8	3.6		○	○	×	
2	16	6.6	1.9	4.3		○	○	×	
3	17	6.6	1.9	4.4		○	○	○	
4	18	8.2	1.9	5.4		○	○	○	
杯 a									
1	27	11.6	2.9	6.2		○	○	○	
2	28	12.0	2.8	7.6		○	○	○	
		12.4	2.6			○	○	○	
1	29	12.6	2.25	8.2		○	○	○	
		12.6	2.7	9.1		○	○	○	
1	31	12.8	3.0	8.0		○	○	不明	
2	30	12.8	3.2	8.0		○	○	○	
3		12.9	3.3	7.4		○	○	○	
4		13.0	2.9	8.4		○	○	×	
5	33	14.0	3.1	9.0		○	○	○	
6	34	14.2	2.6	9.3		○	○	○	
7	35	15.2	3.4	9.8		○	○	○	
8	36	16.2	3.2	11.8		○	○	○	
SDI300 (下層)									
皿									
1	11	13.8	1.8	10.7		○			
2	12	16.2	2.0	12.0		○			
皿 a									
1	2	10.0	1.1	7.1		○		○	
2	3	10.0	1.3	7.2		○		○	
3	4	10.0	1.3	7.9		?			
4	5	10.4	0.8	7.9		○		○	
5	7	10.4	1.4	8.0		○		○	
6	6	10.4	(1.5)	7.2		○		○	
皿 c									
1	8	8.3	1.4	4.2		○			
2	9	10.6	1.4	6.9		○			
杯									
1	14	13.4	3.1	6.5		○			
2	15	14.2	4.2	7.4		○			
3	16	16.2	3.1	8.3		○			

番号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯 a								
1	10	11.8	1.8	8.0	○		○	
2	17	13.0	3.2					
丸底の杯								
1	18	16.4	4.2		○			
SD1300 (上層)								
皿								
1	11	13.6	1.7	10.4	○			
2	12	14.5	1.8	11.5	○		○	
3	13	20.4	2.4	16.8				
皿 a								
1	6	8.8	1.1	6.4	○		○	○
2	7	9.4	1.0	6.7	○		○	
3	8	10.8	1.4	8.4	○		○	
4	9	11.0	1.3	9.4	○			
丸底の杯								
1	10	15.6	3.0		○		ミガキ	○
SX1200								
皿 a								
1		(7.0)	1.3			○	○	○
2	28	(7.2)	1.3	(7.4)		○	○	○
3	29	7.4	1.2	(5.6)				
4	30	7.4	1.4	5.0		○	○	○
5	31	7.5	1.3	5.0		○	○	○
6	32	7.7	1.3	5.6		○	○	○
7		(7.8)	1.0			○	不明	不明
8		8.2	1.2	7.3		○	○	○
9	34	(8.2)	1.3	(5.5)		○	○	○
10	35	8.3	1.5					
11	37	8.4	1.4	6.5		○	○	○
12	36	(8.6)	1.4	(6.6)		○	○	○
皿 b								
13	1	(5.7)	1.8	4.8		○	不明	不明
14	2	6.2	1.7	4.7		○	○	○
15	3	6.3	2.0	4.0		○	不明	×
16	7	(6.4)	1.7	4.2		不明	不明	不明
17	4	6.4	1.7	5.0		○	○	×
18	5	(6.4)	1.8	4.0		○	○	不明
19	6	6.4	1.8	4.1		○	○	○
20	19	6.4	1.8	4.5		○	×	×
21	8	6.5	1.7	4.8		○	○	○
22	10	6.6	1.6	4.2		○	○	○
23	11	6.6	1.6	5.1		○	○	○
24	12	6.6	1.9	4.2		○	○	不明
25	9	6.6	1.9	5.0		○	○	×
26		(6.6)	1.9			○	○	○
27		(6.6)	2.0			○	不明	×

番号	棒図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナデの有無	板状庄痕の有無
					ヘラ	糸		
28	13	6.7	1.6	5.0		○	○	○
29	14	6.7	2.0	3.8		○	○	○
30	18	6.7	2.0	4.0		○	○	○
31		(6.7)	2.0			○	○	×
32		(6.8)	1.5			○	?	?
33		(6.8)	1.6			○	○	×
34	16	6.8	1.9	3.5		○	○	○
35	15	6.8	2.0	4.5		○	○	○
36	17	6.8	2.1	4.8		○	○	○
37	20	6.9	2.0	4.0		○	○	×
38		(6.9)	1.6			○	○	○
39	21	7.0	1.7	4.8		○	○	○
40		(7.0)	1.7			○		○
41		(7.0)	1.9			○	○	
42	22	7.1	2.0	5.0		○		○
43	23	7.1	2.2	4.3		○	○	
44	24	7.2	1.9	4.3		○	○	○
45		(7.4)	1.7			○	不 明	○
46	25	7.4	1.9	4.3		○	不 明	×
47		(7.4)	2.1			○	○	○
48		(7.4)	2.2			○	○	○
49	33	7.8	1.5	5.2		○	不 明	○
50	26	7.8	2.2	5.0		○	○	○
51	27	8.0	2.0	4.1		○	○	○
杯 a								
1	39	11.5	2.9	7.2		○	○	○
2	40	(11.6)	2.6	7.2		○	○	○
3	38	(11.6)	3.2	6.0		○	○	○
4		(11.6)	3.3	6.0		○	○	○
5		(11.7)	2.9	7.2		○	○	○
6	41	11.8	2.6	6.7		○	○	○
7	47	12.1	2.1	7.5		○	○	○
8	42	12.1	2.6	8.0		○	○	○
9	43	12.1	2.9	6.8		○	○	○
10	45	(12.2)	3.0	8.4		○	?	○
11	44	12.2	3.1	8.0		○	○	○
12	46	12.3	3.2	7.0		○	○	○
13	49	(12.3)	3.2	8.0		○	○	○
14		(12.4)	2.7			○	○	○
15	48	12.4	3.0			○	○	○
16		(12.5)	2.4	8.2		○	○	○
17	50	(12.5)	2.8	7.9		○	○	不 明
18	52	(12.6)	2.5	8.4		○	○	不 明
19	53	12.6	2.6	7.4		○	○	○
20		(12.6)	2.7			不 明	不 明	不 明
21	51	12.6	3.0	7.4		○	○	○
22		(12.7)	2.8			○	○	×
23	54	(12.8)	2.7	7.0		○	○	○
24		(12.8)	2.9			○	○	○

番 号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の有 無	板状圧痕の 有 無
					ヘ ラ	糸		
25		(12.8)	2.9	8.0		○	○	○
26	63	12.8	3.1	7.0		○	○	○
27	56	12.8	3.2	7.4		○	○	○
28	57	12.9	3.0	7.2		○	○	○
29	58	12.9	3.1	8.0		○	○	○
30	55	12.9	3.2	8.2		○	○	○
31	60	(12.9)	3.2	8.6		○	○	○
32	59	12.9	3.2	7.6		○	○	○
33	61	13.0	2.5	8.1		○	○	○
34	62	13.0	2.6	8.5		○	○	○
35		(13.0)	2.8			○	○	○
36		(13.0)	2.9			○	○	○
37		(13.0)	3.1			○	○	○
38	64	(13.0)	3.2	8.2		○	○	○
39	65	13.1	2.6	8.8		○	○	○
40	66	13.2	2.7	8.6		○	○	○
41		(13.2)	(3.7)			○	○	○
42	67	13.3	2.9	8.6		○	○	○
43	68	13.4	2.8	8.5		○	○	○
44		(13.4)	2.9			○	○	○
45		(13.4)	3.1			○	○	○
46		(13.5)	3.0			○	○	○
47		(16.6)	3.8			○	不 明	不 明

SEI 183

皿 a								
1	3	8.8	1.0	7.2		○	○	×
2	4	9.0	1.0	7.4		○	○	不 明
杯 a								
1	5	12.8	3.2	8.4		○	○	○

SEI 185

皿 a								
1	9	8.5	1.1	6.15		○	○	○
杯 a								
1	10	13.55	2.8	8.9		○	○	○
2	11	14.4	2.95	10.0		○	○	○

SEI 186

皿 a								
1	1	7.0	1.8			○	○	○
2	2	8.1	1.35			○	○	不 明
3	3	8.8	1.2			不 明	不 明	不 明
4	4	9.2	0.9			不 明	不 明	不 明
5	5	9.6	1.2			○	不 明	不 明
杯 a								
1	6	11.2	2.9			○	○	○
2	7	13.2	3.0			○	○	○
3	8	17.0	2.2			○	不 明	不 明

番号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナアの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SE1188								
皿 a								
1	12	8.0	1.1	6.1		○	○	○
2	13	8.0	1.25	6.2		○	○	○
3	14	8.0	1.35	6.1		○	○	○
4	15	8.1	0.9	6.45		○	○	○
5	16	9.2	1.2	7.0		○	○	?
杯 a								
1	17	11.8	2.6	7.9		○	○	○
2	18	11.9	2.9	8.7		○	○	○
3	19	12.2	2.6	9.4		○	○	○
SE1189								
皿 a								
1	1	8.6	0.9	7.2		○	×	×
杯 a								
1	2	13.5	2.4	8.7		○	○	不明
2	3	14.1	2.6	9.2		○	○	○
SE1190								
皿 a								
1	1	7.5	1.8	5.3		○	○	○
2	8	7.6	1.1	5.8		○	○	○
3	4	7.6	1.4	5.0		○	○	○
4	6	7.7	1.1	5.7		○	○	○
5	5	7.7	1.1	6.0		○	○	○
6	9	7.7	1.1	6.2		○	○	○
7	2	7.7	1.3	6.0		○	○	○
8	3	7.7	1.7	5.2		○	○	不明
9	10	7.8	1.6	5.8		○	○	○
10	11	7.9	1.2	6.3		○	○	○
11	7	7.9	1.3	5.2		○	○	○
12	12	7.9	1.5	5.9		○	○	○
13	13	8.0	1.6	6.0		○	○	○
14	14	8.2	1.6	6.8		○	○	○
15	15	8.8	1.7	6.8		○	○	○
16	16	9.3	1.0	8.0		○	○	○
杯 a								
1	17	11.8	2.8	7.0		○	○	○
2	18	12.2	3.0	7.4		○	○	○
3	19	12.4	2.9	8.1		○	○	○
4	20	12.6	2.8	8.0		○	○	○
5	22	12.6	2.8	8.2		○	不明	不明
6	21	12.6	3.2	8.0		○	○	○
7	23	12.6	3.3	8.3		○	○	○
8	24	13.0	3.2	8.5		○	○	○
9	25	13.6	3.7	8.4		○	○	○

番 号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナテ の有 無	板状圧痕の 有 無
					ヘ ラ	糸		
SE1191								
皿 a								
1	26	8.4	1.0	7.0		○	○	○
2	27	8.8	0.9	7.2		○	○	不 明
3	28	8.8	0.9	7.0		○	○	○
4	29	9.0	1.0	7.4		○	○	○
5	30	9.0	1.0	7.8		○	×	×
杯 a								
1	31	14.8	2.9	10.0		○	○	○
2	32	15.2	3.6	11.0		○	○	○
3	33	16.2	3.0	11.4		○	○	○
SE1194								
皿 a								
1	1	7.6	1.1	5.8		○	○	○
2	2	8.6	1.2	5.8		○	○	○
杯 a								
1	4	12.4	2.7	8.0		○	○	○
2	5	12.4	2.7	8.2		○	○	○
3	3	12.4	3.2	8.8		○	×	×
4	6	13.4	2.6	9.3			○	
5	7	13.6	2.7	9.7		○	○	○
SE1195								
皿 a								
1	8	9.0	1.0	6.2		○	○	不 明
杯 a								
1	9	16.0	2.6	10.4		○	○	○
2	10	16.0	2.6	10.8		○	○	○
SE1196								
皿 a								
1	13	7.6	1.0	6.2		○	○	○
2	14	8.5	1.1	6.7		○	○	○
3	15	8.8	0.8	7.0		○	○	○
4	16	8.9	1.0	7.0		○	○	○
5	17	9.0	1.1	7.4		○	○	○
6	19	9.0	1.4	7.4		○	不 明	不 明
7	20	9.2	1.0	7.7		○	○	○
8	21	9.2	1.1	7.2		○	○	不 明
9	18	9.3	1.0	6.5		○	○	○
10	22	9.4	1.2	7.8		○	○	○
11	24	9.7	1.0	7.6		○	○	○
12	23	9.7	1.2	7.3		○	○	○
杯 a								
1	25	14.6	2.4	11.0		○	○	○
2	26	14.8	3.7	9.0		○	○	○
3	27	15.1	3.0	10.3		○	○	○

番号	挿固番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナアの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
4	28	16.0	2.5	11.0		○	○	不明
SEI198								
皿 a								
1	31	9.2	1.0	7.0		○	○	○
2	30	9.2	1.1	8.0		○	○	○
杯 a								
1	32	15.4	3.0	11.2		○	○	○
SEI202								
皿 a								
1	1	8.2	1.0	7.1		○	○	不明
2		8.6	1.05			○	不明	不明
3	2	8.6	1.3	6.5		○	不明	不明
4		8.6	1.4			○	○	不明
5		9.0	1.1			○	○	○
6		9.0	1.3			○	○	不明
7		9.2	0.8			○	○	○
8		9.6	1.1			○	不明	不明
杯 a								
1	3	12.6	3.3	7.2		○	不明	不明
2	4	19.3	2.9	14.0		○	○	不明
SKI203								
皿 a								
1	7	9.0	0.8	7.2		○	○	○
2	8	11.0	1.6	7.7		○		
杯								
1	9	12.0	2.0	9.0	○		○	○
2	10	15.0	3.2	11.0		○	○	○
3	11	16.2	3.0	9.3			○	○
SKI204								
皿 a								
1	4	8.6	1.2	6.8		○	○	○
2	5	9.0	0.9	6.3		○	○	○
3	6	9.0	1.1	6.8		○	○	○
4	3	9.0	1.2	7.0		○	○	○
5	7	9.2	1.2	7.4		○	○	○
6	8	9.2	1.2	6.8		?	○	○
7	9	9.3	1.1	6.4		○	○	×
8	11	9.3	1.2	7.7		○	○	○
9	10	9.4	0.9	7.0		○	○	○
10	12	9.4	1.5	7.2		○	○	×
11	1	9.4	1.7	7.0	○		○	○
12	2	9.6	1.5	7.2	○		○	○
杯 a								
1	17	14.6	2.9	11.2		○	○	○
2	18	15.0	3.3	10.0		○	○	×

番 号	挿円番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の有 無	板状圧痕の 有 無
					へ	ろ		
3	19	15.2	2.5	11.2		○	○	○
4	20	15.3	3.0	10.6		○	○	○
5	15	15.4	2.9	10.6	○		○	×
6	16	15.4	3.3	10.6	○		○	○
7	21	15.6	2.7	11.0		○	○	○
8	22	15.6	3.2	11.4	?		○	○
9	23	16.0	2.9	11.0	?		○	○
10	24	16.6	3.2	12.4	?		○	○
瓦器 (皿)								
1	13	9.8	1.0	8.4		○	○	○
2	14	10.6	2.5	7.0				
SK1205								
皿 a								
1	14	9.5	1.8	6.5			○	
2	15	9.8	1.5	8.3	○		○	○
3	16	10.3	0.8	7.3	○		○	
丸底の杯								
1	17	13.4	3.5		○			○
椀								
2	18	14.6	5.6					
SK1212								
皿								
1	2	9.2	1.0	7.4		○	○	不 明
2	1	9.2	1.0	7.5		○	○	○
3	3	9.4	?	7.4		○	○	○
4	4	9.4	1.1	7.8		○	○	○
杯								
1	5	16.2	3.2	11.6		○	○	○
SK1213								
皿 a								
1	2	7.4	1.0	5.1		○	○	○
2	4	8.0	1.2	5.5		○	○	○
3	5	8.0	1.2	5.4		○	○	○
4	6	8.0	1.5	6.0		○	○	○
5	7	8.2	1.1	5.7		○	○	○
6	8	8.2	1.6	6.0		○	○	○
7	9	8.4	1.1	5.7		○	○	○
8	10	8.4	1.5	6.2		○	○	
9	11	8.4	1.6	5.8		○	○	○
皿 b								
1	1	6.6	1.4	4.4		○	○	
2	3	7.8	1.0	5.1		○	○	不 明
皿 c								
1	12	7.9	2.3				○	
2	13	8.2	2.3				○	
3	14	8.5	2.3				○	

番 号	挿筒番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナアの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯 a								
1	16	11.8	2.5	8.3		○	○	○
2	17	12.0	2.7	8.0		○	○	○
3	18	12.2	2.6	8.5		○	○	○
4	19	12.4	2.9	8.3		○	○	○
5	20	12.7	3.0	8.0		○	○	○
6	21	12.8	2.9	8.6		○	○	○
7	24	13.0	2.3	8.4		○	○	○
8	23	13.0	2.6	9.6		○	○	○
9	22	13.0	3.0	9.8		○	○	○
10	25	13.4	3.0	8.5				
11	26	13.8	2.6	10.0		○	○	○
12	27	13.9	2.7	10.0		○	○	○
13	28	14.1	3.0	8.4		○	○	○
14	29	14.8	3.5	9.4		○	○	○

SKI280

須恵器 (杯蓋)								
1	1	12.2			○		○	×
2	2	12.75			○		○	×
3	3	12.9	2.5		?		○	×
4	4	14.7	3.0		?		○	×
5	24	14.8	2.55		?		○	×
6	25	15.6	2.5		?		○	×
須恵器 (蓋)								
1	26	24.0			?			×
2	27	25.8			?			×
須恵器 (杯)								
1	5	14.1	3.9	9.4	○		○	×
2	6	13.5	3.8	9.0	○		○	×
3	7			9.3	○		○	×
4	8	(14.1)	(4.2)	8.8	○		○	×
須恵器 (碗)								
1	9	13.2	4.0	7.5	○		○	×
2	10			8.0	○		○	×
3	11	14.0	4.6	8.2	○		○	×
4	12			7.4	○		○	×
5	13	16.4	5.4	9.6	○		○	×
6	14	19.0	7.4	7.4	○		○	×
7	28	14.1	4.3	9.4	○		?	×
8	29			8.0	○		○	×
9	31			11.6			○	×
須恵器 (皿)								
1	15	(13.8)	1.7	(11.0)	○		○	×
2	16	14.6	1.4	11.8	○		○	×
3	17	17.8	2.7	15.4			○	×
4	32	14.8	2.0	11.7	○		○	×
5	33	17.6	1.7	13.8	○		○	×
6	34	18.2	1.9	14.6	○		×	×

番号	挿回番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切り離し		内底部ナアの有無	板状圧痕の有無
					ヘ	ラ		
7	35	15.4	2.35	12.3	○		×	×
8	36	(17.7)	(2.6)	(16.2)	○		○	×
9	37	19.0	2.1	16.0	○		○	×
10	38	20.0	2.8	12.8	○		○	×
須恵器 (甕)								
1	20	11.4			?			×
須恵器 (甕)								
1	39	40.4			?			×
杯								
1	40	13.5	3.2	7.3	○		○	?
2	21	14.9	2.8	7.7	○		×	?
例								
1	23	18.5	5.3	8.3	○		×	?
2	41	17.4					○	?
3	42	18.6	6.3	8.6	○		×	
皿								
1	22	20.5	2.2	17.3	?		×	?
甕								
1	43	18.6	13.5		?		○	?
SKI 285								
須恵器 (杯甕)								
1	1	15.2	(2.1)		○		○	×
2	2	14.8	2.3		?		○	×
須恵器 (碗)								
1	3	12.7	4.6	6.0	○		○	×
2	4			8.8	○		○	×
須恵器 (皿)								
1	5	15.4			○		×	×
2	6	12.8	2.1	14.4	○		○	×
SEI 340 (第46次調査)								
須恵器 (杯)								
1	1	13.8	4.0	8.2	○		○	○
2	2	14.6		7.6				
3	3							
須恵器 (皿)								
1	4	15.0	1.7	11.4	○			
杯 a								
1	5	12.9	3.7	8.3	○		×	×
2	6	13.0	3.6	7.2				
3	7	13.6	3.4	7.3	○		○	×
皿								
1	8	12.8	1.8	8.4	○		○	○
2	9	13.3	2.4	10.0	○		○	×
碗								
1	10	14.0	5.9		○			
2	11	14.6	6.3		○			
3	12	17.0	6.5		○			

番 号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデ の 有 無	板状圧痕の 有 無
					へ	う		
SD1330 (I)								
皿 a								
1	1	8.6	1.05	6.6	○		○	○
2	2	8.7	1.3	6.0	○		○	○
3	3	8.8	1.3	6.2	○		○	○
4	4	8.8	1.4	7.0	○		○	○
5	5	8.8	1.5	6.3	○		?	○
6	6	8.8	1.4	7.0	○		○	○
7	7	8.9	1.3	6.7	○		○	○
8	8	8.9	1.35	7.3	○		○	○
9	9	9.0	0.95	6.9	○		○	○
10	10	9.0	1.1	6.5	○		○	○
11	11	9.0	1.3	7.0	○		○	○
12	12	9.0	1.55	5.0	○		○	○
13	13	9.0	1.6	7.1	○		○	○
14	14	9.1	1.2	7.1	○		○	○
15	15	9.1	1.3	3.8	○		○	○
16	16	9.1	1.35	7.2	○		?	○
17	17	9.1	1.4	7.4	○		○	○
18	18	9.1	1.4	7.1	○		○	○
19	19	9.1	1.4	6.7	○		?	○
20	20	9.1	1.5	7.2	○		?	○
21	21	9.2	0.8	7.1	○		○	○
22	22	9.2	1.2	7.2	○		○	○
23	23	9.2	1.2	7.4	○		?	○
24	24	9.2	1.3	7.6	○		?	○
25	25	9.3	1.0	6.2	○		○	×
26	26	9.3	1.65	7.2	○		○	×
27	27	9.4	1.2	6.8	○		?	○
28	28	9.5	1.3	6.8	○		?	○
29	29	9.5	1.5	6.4	○		○	○
30	30	9.5	1.8	7.6	○		○	○
31	31	9.6	1.0	7.8	○		○	○
32	32	9.6	1.55	4.2	○		○	○
33	33	9.6	2.0	6.7	○		○	×
34	34	9.7	2.0	7.1	○		?	○
35	35	9.8	1.2	8.1	○		?	○
36	36	10.0	1.1	9.8	○		○	×
杯 a								
1	37	13.2	2.8	8.4	○		○	×
2	38	13.2	2.9	10.6	○		○	○
3	39	13.3	2.7	9.1	○		○	○
4	40	13.4	2.2	9.3	○		○	○
5	41	13.4	2.85	10.0	○		○	○
6	42	13.6	2.3	11.2	○		?	?
丸底の杯								
×								
1	43	13.6	3.4		○		○	○
2	44	13.9	3.15		○		?	○

番 号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
					へ	ラ 糸		
3	45	13.9	3.2		○		?	×
4	46	14.0	3.6		○		?	○
5	47	14.2	3.4		○		?	○
6	48	14.2	3.5		○		?	○
7	49	14.4	3.4		○		?	○
8	50	14.5	2.7		○		?	○
9	51	14.5	3.45		○		?	○
10	52	14.6	3.1		○		?	?
11	53	14.6	3.1		○		?	○
12	54	14.6	3.3		○		?	?
13	55	14.6	3.6		○		?	?
14	56	14.6	3.6		○		?	○
15	57	14.7	3.25		○		?	○
16	58	14.7	3.4		○		?	○
17	59	14.7	3.4		○		?	○
18	60	14.7	3.9		○		?	?
19	61	14.8	3.1		○		?	○
20	62	14.8	3.1		○		?	○
21	63	14.8	3.15		○		?	○
22	64	14.8	3.3		○		?	×
23	65	14.8	3.4		○		?	○
24	66	14.8	3.5		○		?	○
25	67	14.8	3.65		○		?	○
26	68	14.9	3.1		○		?	?
27	69	14.9	3.35		○		?	?
28	70	14.9	3.4		○		?	○
29	71	15.0	2.8		○		?	○
30	72	15.0	3.2		○		?	?
31	73	15.0	3.3		○		?	○
32	74	15.0	3.4		○		?	○
33	75	15.0	3.4		○		?	○
34	76	15.0	3.65		○		?	○
35	77	15.0	3.8		○		?	○
36	78	15.2	3.2		○		?	○
37	79	15.2	3.4		○		?	○
38	80	15.3	2.4		○		?	○
39	81	15.4	3.7		○		?	○
40	82	15.5	3.2		○		?	○
41	83	15.5	3.3		○		?	○
42	84	15.5	3.4		○		?	?
43	85	15.5	3.5		○		?	○
44	86	15.6	3.2		○		?	○
45	87	15.6	3.5		○		?	○
46	88	15.6	3.6		○		?	○
47	89	15.8	3.7		○		?	○
48	90	16.0	4.0		○		?	○
49	91	17.0	3.9		○		?	○
50	92	18.0	4.4		○		?	○
51	93	18.0	3.9		○		?	○

番 号	挿入番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	切 り 離 し		内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘ	ラ		
SDI 330 (II)								
皿 a								
1	1	8.8	1.1	6.8	○		?	○
2	2	8.8	1.3	5.9	○		○	○
3	3	8.9	1.5	6.8	○		○	○
4	4	8.9	1.5	6.7	○		?	○
5	5	9.0	1.0	6.7	○		○	○
6	6	9.0	1.1	6.7	○		○	○
7	7	9.0	1.1	7.2	○		?	○
8	8	9.0	1.2	6.9	○		○	○
9	9	9.0	1.3	6.3	○		?	○
10	11	9.0	1.4	6.4	○		○	○
11	10	9.2	1.4	7.0	○		○	○
12	12	9.2	1.5	7.3	○		○	○
13	13	9.3	1.2	7.2	○		?	○
14	14	9.4	1.2	7.1	○		?	○
15	15	9.5	1.2	7.7	○		○	○
16	16	9.5	1.2	7.2	○		?	○
17	17	9.9	1.9	6.8	○		?	○
丸底の杯								
1	18	12.0	2.7		○		?	○
2	19	14.7	3.5		○		?	○
3	20	14.9	4.3		○		?	×
4	21	15.0	4.0		○		?	○
5	22	15.5	3.9		○		?	×
SB I 350 (第47次調査)								
皿 b								
1	1	7.8	1.6	5.6		○	×	×
2	2	7.8	1.6	5.7		○	×	×
杯 a								
1	3	12.2	2.7	7.5		○	○	×
SK I 359								
皿 a								
1	4	8.0	1.2	6.1		○	○	○
2	5	8.1	1.2	6.2		○	○	○
皿 b								
1	6	6.7	1.5	5.3		○	○	×
杯 a								
1	7	11.8	2.3	8.0		○	○	○
2	8	12.2	2.8	7.4		○	○	○
3	9	12.3	2.5	8.0		○	○	○
4	10	12.3	2.6	7.7		○	○	○
5	11	12.3	2.7	7.5		○	○	○
6	12	12.4	2.5	8.0		○	○	○
7	13	12.4	2.9	8.2		○	○	○
8	14	12.8	2.5	9.1		○	○	○

番 号	樽 函 番 号	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	切 り 離 し		内 底 部 ナ デ の 有 無	板 状 圧 痕 の 有 無
					へ う	系		
SKI 360								
重 a								
1	1	9.0	1.3	7.8		○	○	○
2	2	9.2	1.3	7.0		○	○	○
3	3	9.2	1.3	7.2		○	○	○
4	4	9.4	1.1	7.2		○	○	○
5	5	9.4	1.1	7.6		○	○	?
6	6	9.4	1.2	7.3		○	○	○
7	7	9.4	1.3	7.2		○	○	○
8	8	9.4	1.3	7.5		○	○	○
9	9	9.5	1.1	6.8		○	○	○
10	10	9.5	1.3	7.7		○	○	○
11	11	9.5	1.4	7.8		○	○	○
12	12	9.6	1.1	7.4		○	○	○
13	13	9.6	1.1	7.6		○	○	○
14	14	9.8	1.2	8.9		○	○	○
15	15	10.2	1.2	8.2		○	○	○
杯 a								
1	16	14.1	2.4	8.9		○	○	○
2	17	14.1	2.6	9.0		○	○	○
3	18	14.2	3.0	8.8		○	○	○
4	19	14.2	3.0	8.7		○	?	○
5	20	14.3	3.0	8.8		○	○	○
6	21	14.4	2.6	9.2		○	○	○
7	22	14.4	2.9	9.4		○	○	○
8	23	14.5	3.1	9.1		○	○	○
9	24	14.6	2.8	9.8		○	○	○
10	25	14.7	2.9	9.7		○	○	○
11	26	14.5	2.7	9.0		○	○	○
12	27	14.5	2.8	7.4		○	○	○
13	28	14.8	2.9	8.8		○	○	○
14	29	14.8	2.8	9.6		○	○	○
15	30	15.1	2.8	10.2		○	?	○
16	31	15.1	3.1	10.4		○	○	○
17	32	15.5	2.9	10.8		○	○	?

圖 版

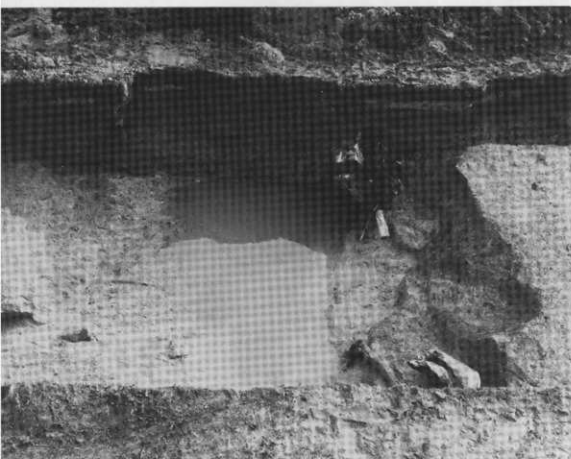
図版 1

第44次調査区全景（東から）

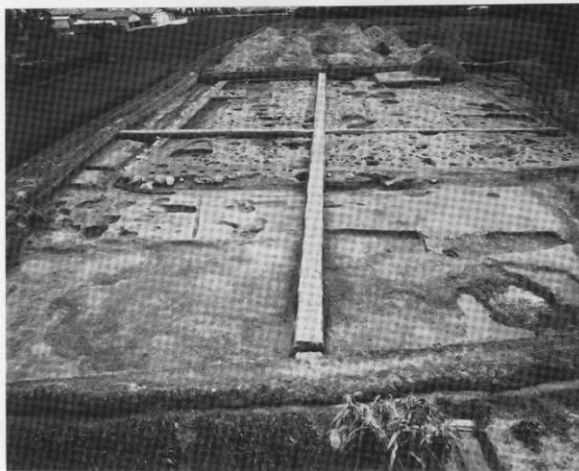


第44次調査区全景（西から）





図版 2 (上)SD1130溝(南から)・(下)SD1175溝(北から)



図版 3 第45次調査区全景(上…北東から、下…北から)

S D1230溝(北から)



S D1230溝(南から)

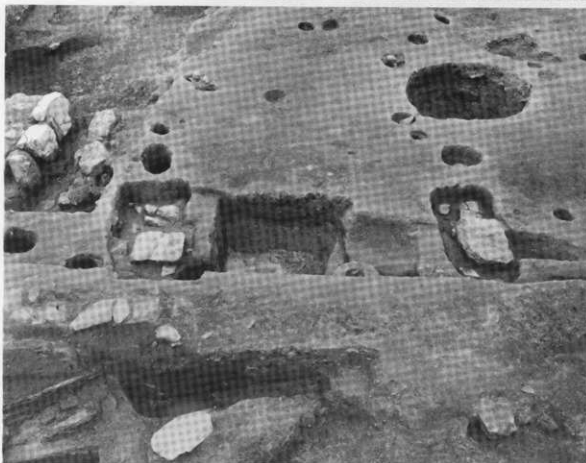


図版 5

S D 1230溝 (東から)
S A 1235横列



S X 1240礎石遺構 (北から)

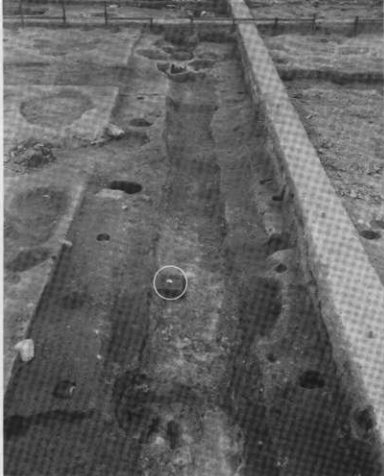




図版 7

S D 1300溝 (南から)

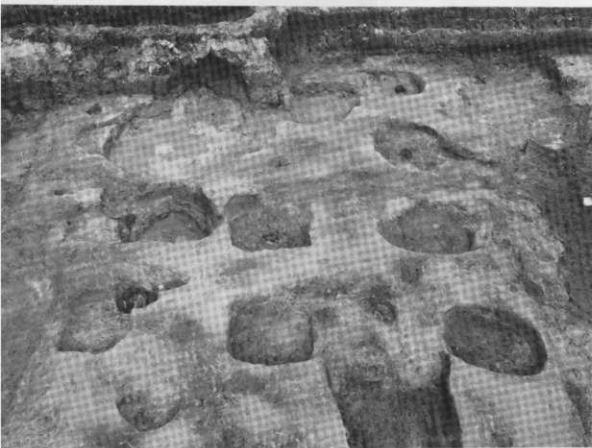
唐三彩出土位置一



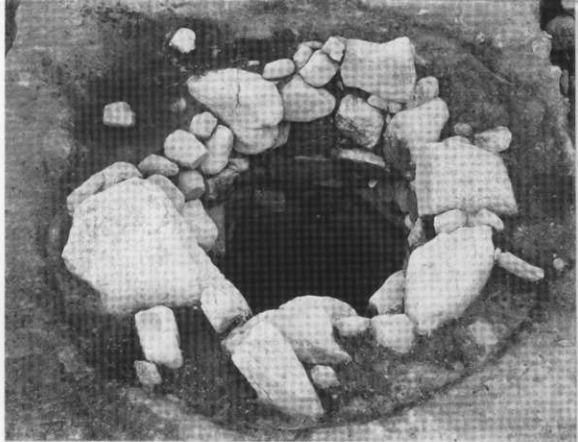
S D 1300溝 (北から)

唐三彩出土位置一





図版 8 SB1250掘立柱建物全景(上…南から、下…西から)



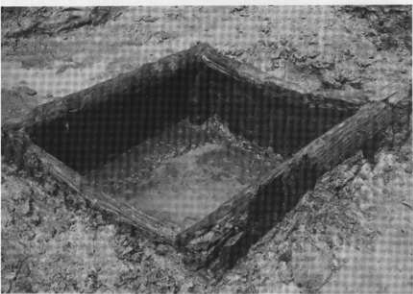
図版9 SE1181井戸(上…西から、下…北から)

図版 10

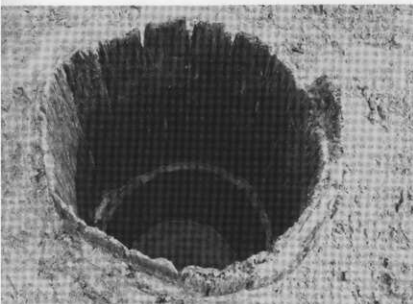
S E 1183・S E 1184井戸(西から)



S E 1184井戸(南東から)



S E 1183井戸(南西から)



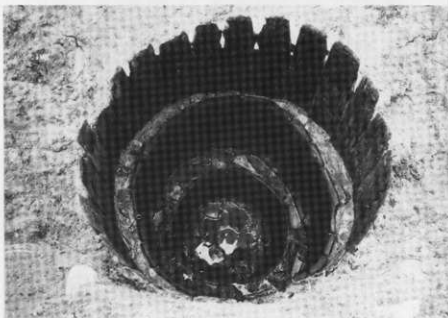
図版11

S E 1188・S E 1189井戸

(北から)



S E 1188井戸(南から)

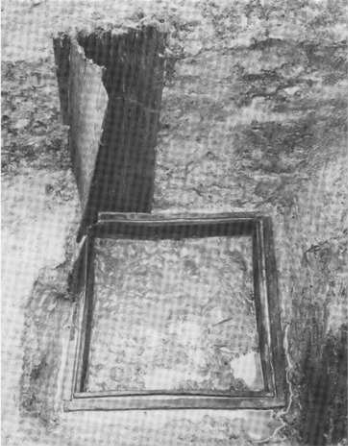


S E 1189井戸(北から)

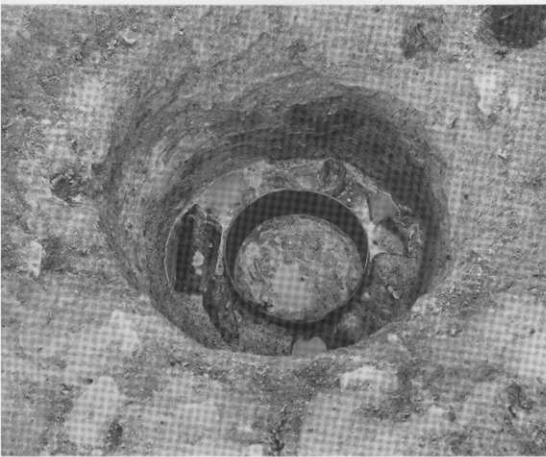


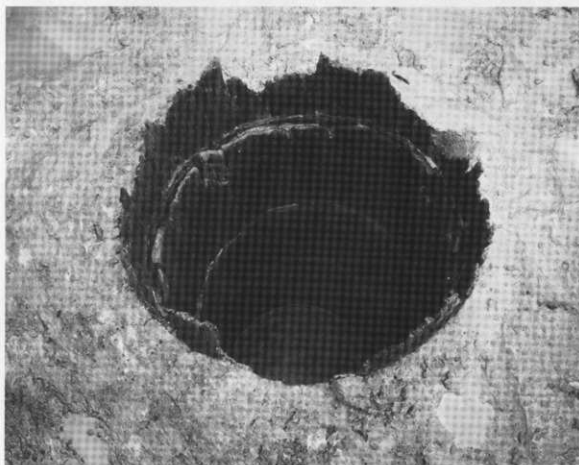
図版 12

S E 1195井戸(北から)



S E 1182井戸(北から)





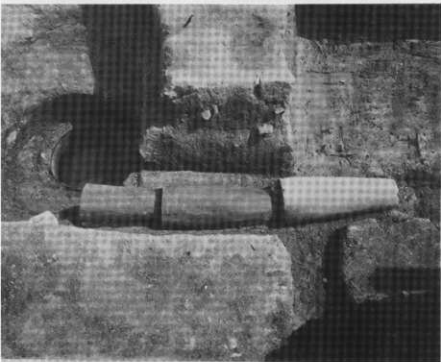
図版 13 S E 1190井戸(北から)・S E 1197井戸(南から)



図版14 SE1198井戸・SE1199井戸(東から)

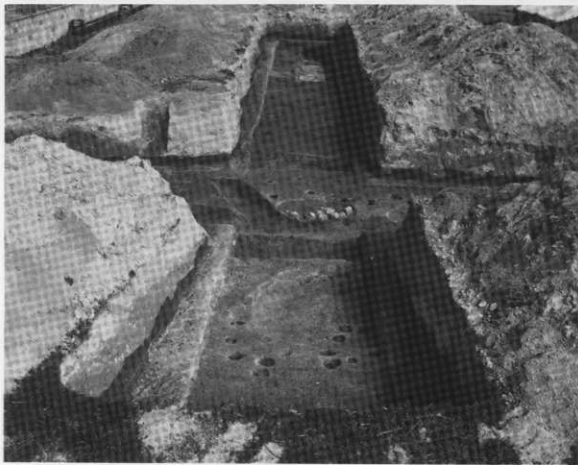


図版 15 (上) SK 1213土墳(南西から)、(下) 下層遺構(東から)

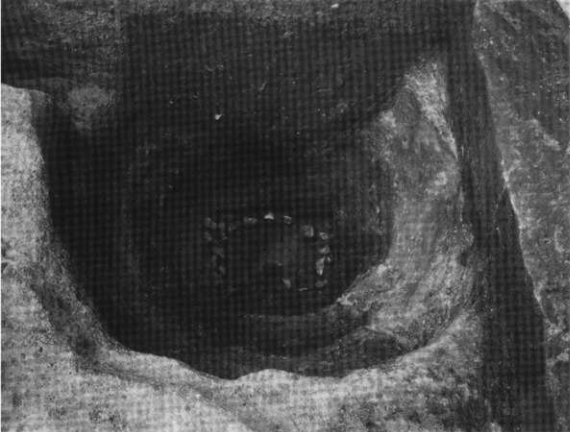


上左…南から
上右…北から
下……西から

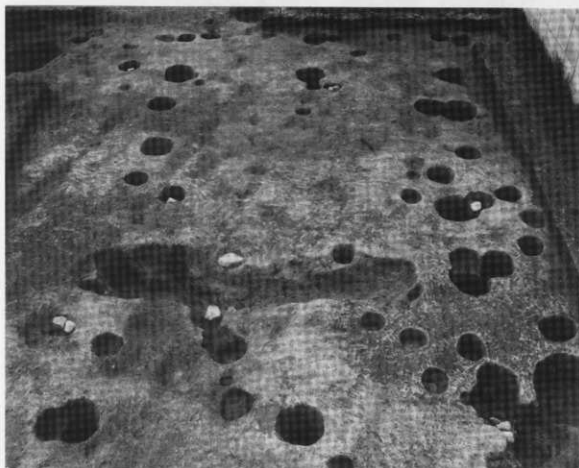
図版 16 S X 1245瓦列・S X 1310土管



図版17 第46次調査区全景(上…北から、下…西から)



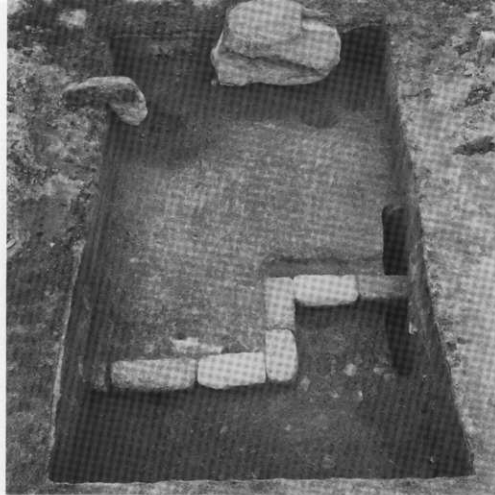
図版18 (上) S E 1340井戸(南から)・(下) S D1330溝(東から)



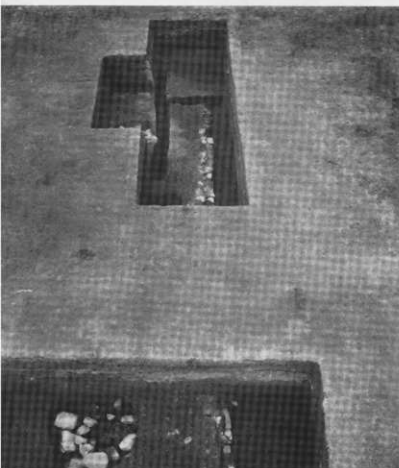
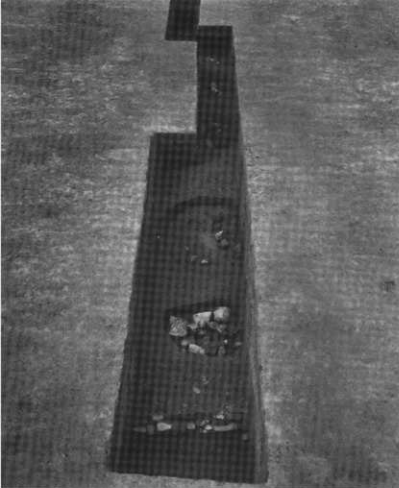
図版19 (上) 第47次調査区全景(南から)・(下) SB1350掘立柱建物(南から)

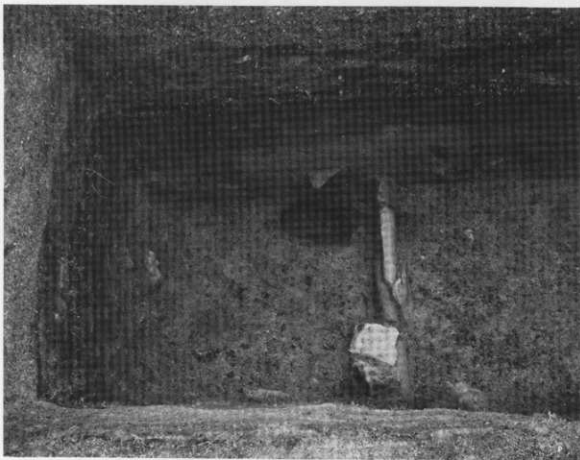
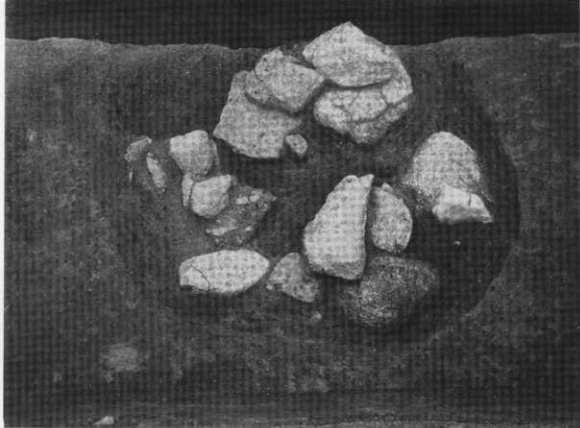


図版20 (上) S E 1365井戸(東から)・(下) 第48次調査区全景(南から)



図版21 第49次調査(上、下) SB010礎石建物(南から)





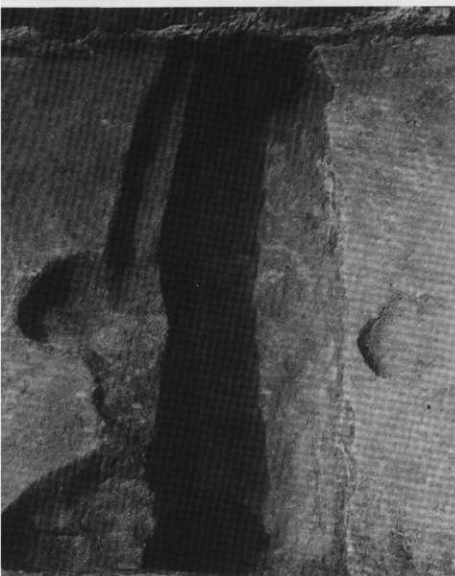
図版23 (上) SB1370礎石建物根石(西から)・(下) SX1371(西から)

図版24

第50次調査区全景
(西から)

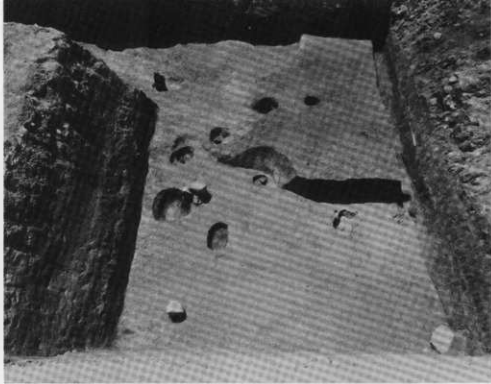


S D 1373溝(南から)

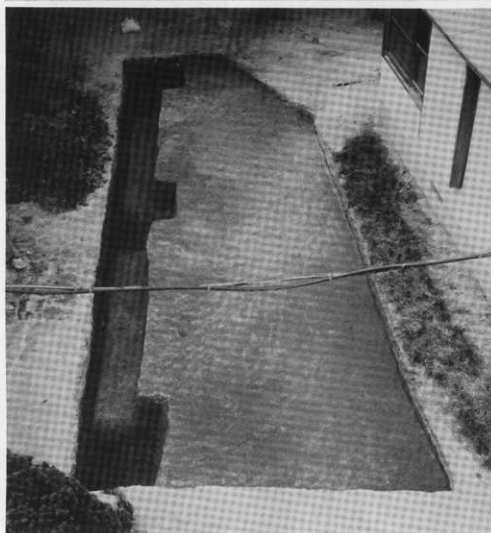


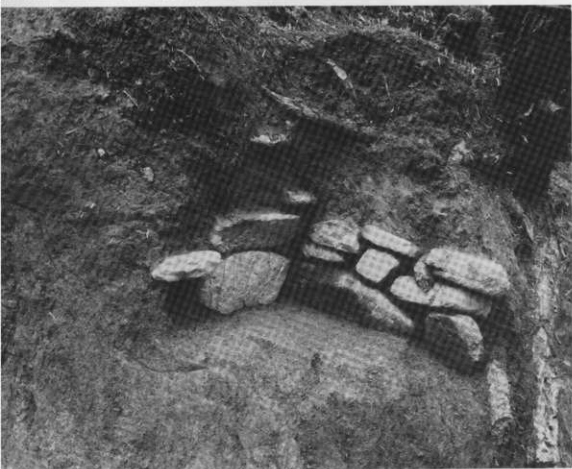
図版25

第51次調査区全景
(北から)



第52次調査区全景
(西から)



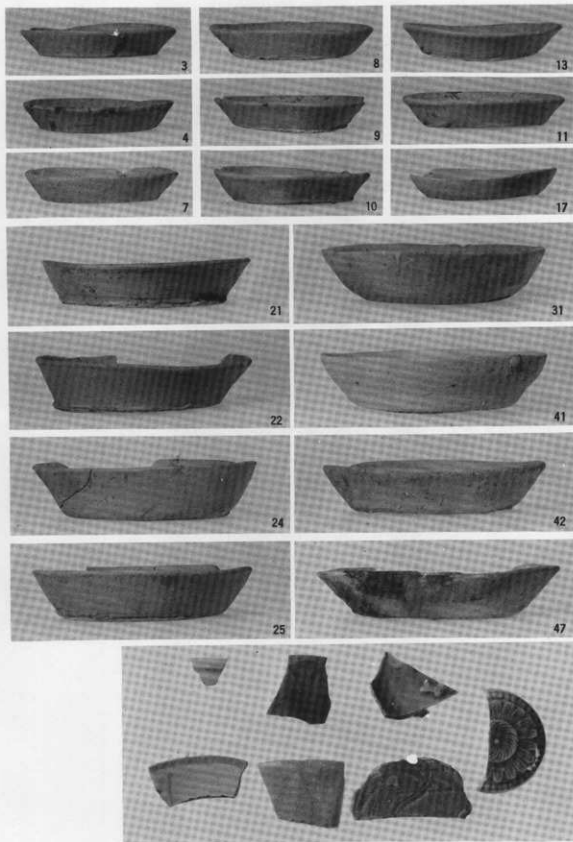


図版26 第53次調査(上)第1号墳全景・(下)第1号墳石室

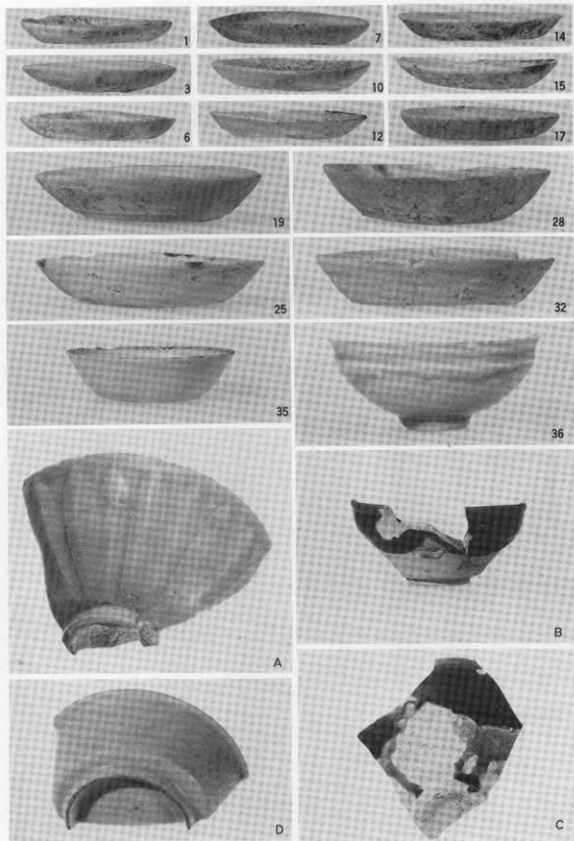


瓦窯跡(南から)





図版 28 第44次調査 S K 1154出土土器・磁器 (3~47...)



図版29 第44次調査出土土器、陶磁器 (1~36... $\frac{1}{2}$)

SK1150...1~36・A SE1165...B SK1152...C SK1153...D



24



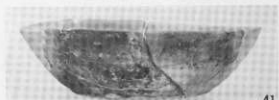
5



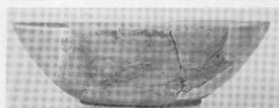
6



40



41



42



22



34



13



14



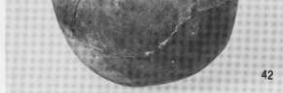
14



14

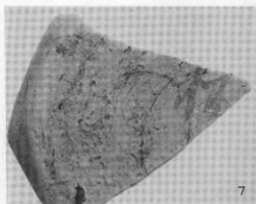


42

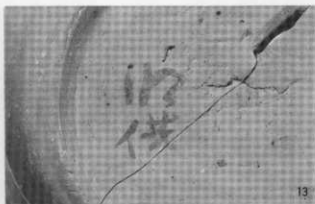


42

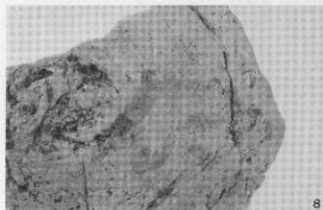
図版 30 第45次調査 S K 1280出土土器 (1/4)



7



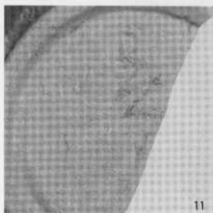
13



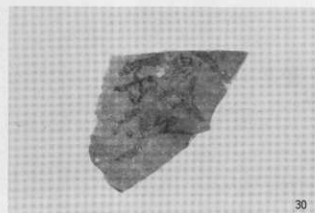
8



19



11



30

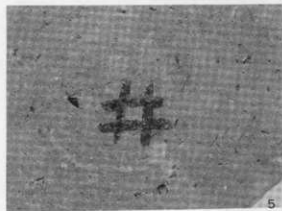
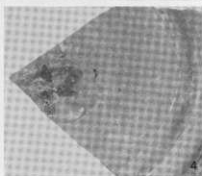
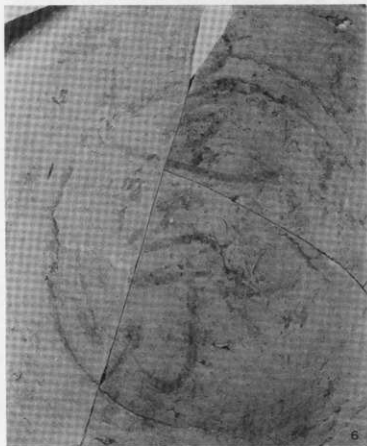


12

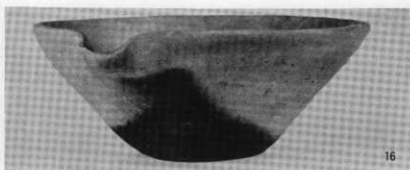


31

図版31 第45次調査 S K 1280出土墨書土器 (実大)



図版32 第45次調査 S K 1285出土土器・墨書土器 (土器 $\frac{1}{2}$ 、墨書実大)



16



14



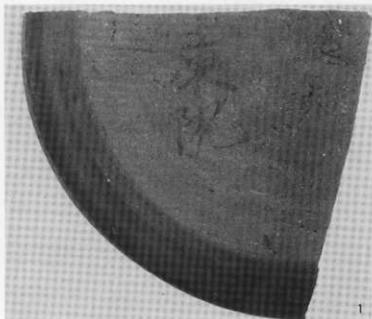
17



15



18

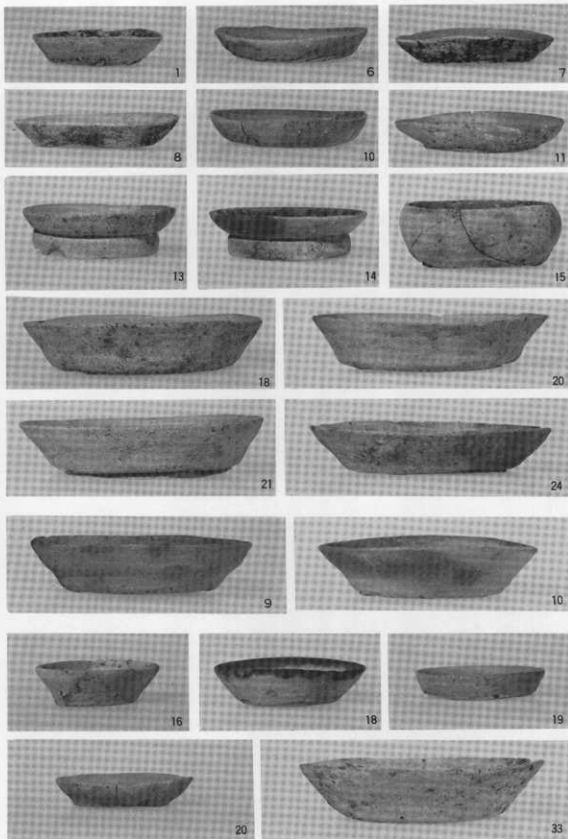


1

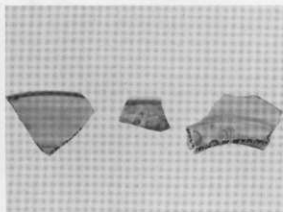
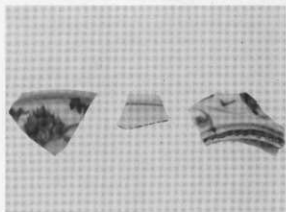


5

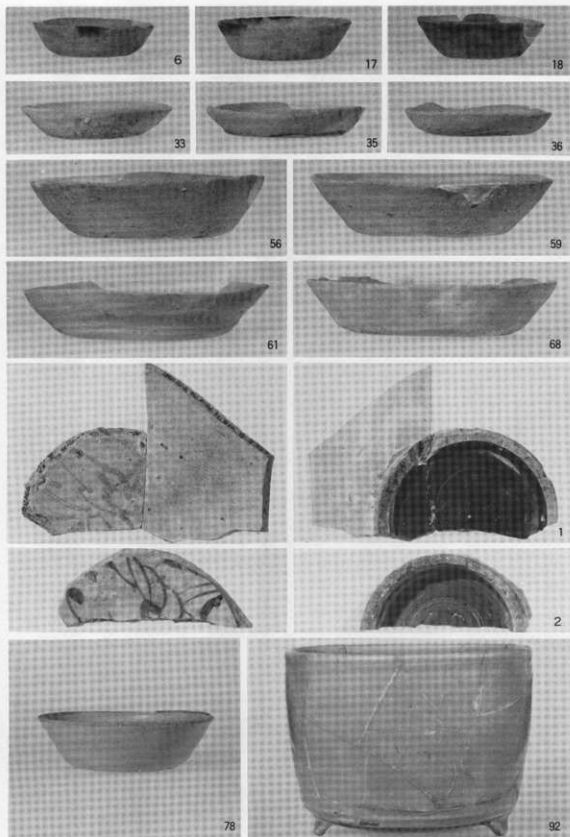
図版33 第45次調査 S E 1189・S K 1205・S D 1300・S E 1320出土土器 (6… $\frac{1}{2}$ 、14~18… $\frac{1}{2}$ 、1・5実大)
S E 1189…6、S K 1205…14~18、S D 1300…5、S E 1320…1



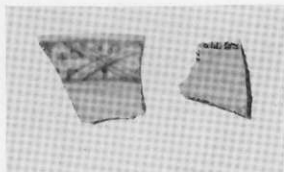
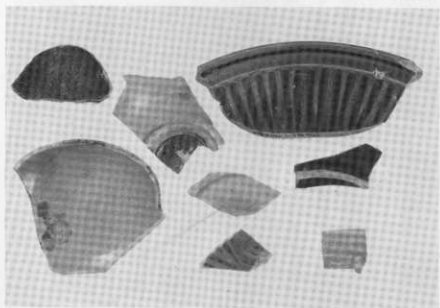
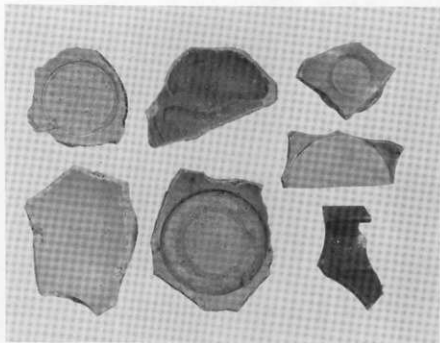
図版34 第45次調査 S K 1213・S D 1230出土土器 (1/4)
 S K 1213… 1～5、S D 1230下層… 9・10、S D 1230上層… 16～33



図版35 第45次調査 S D 1230出土磁器 (1/2)



図版36 第45次調査 S X 1200出土土器・陶磁器 (1・2は安南陶器) (安南陶器を除いて1/2)



図版37 第45次調査 S X 1200出土磁器



10



7



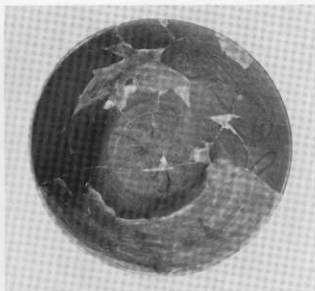
11



12



13



8

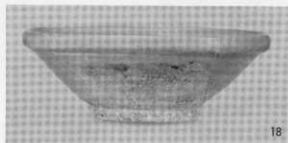
図版38 第45次調査 S K 1212出土磁器



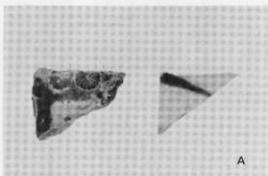
44



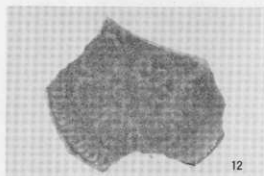
45



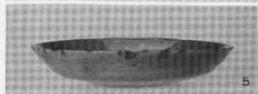
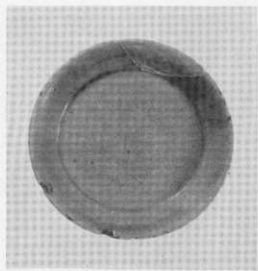
18



A



12



5

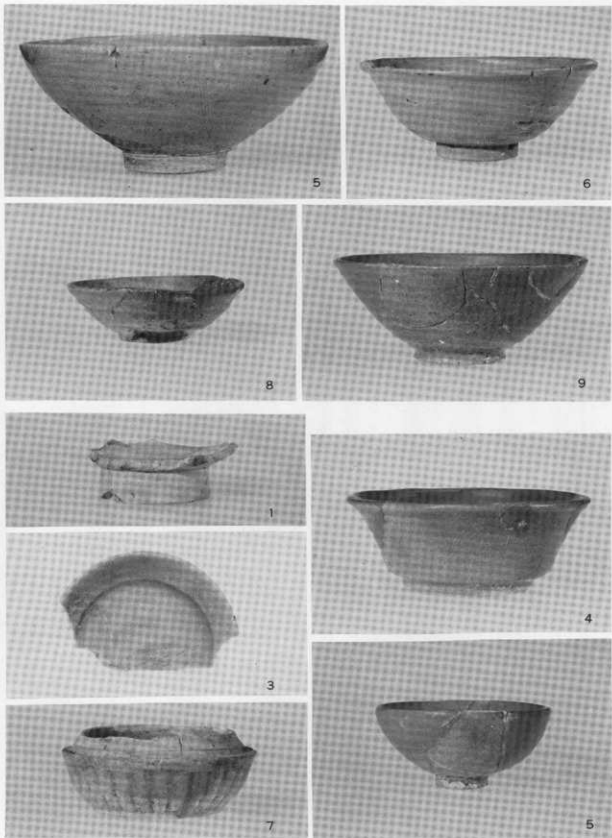


13

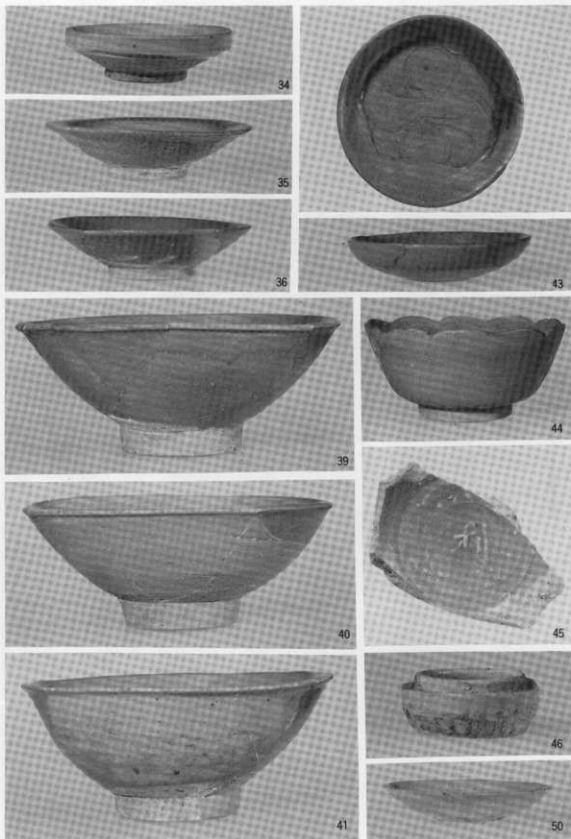


25

图版39 第45次調査各遺構出土陶磁器
 S E 1189...5、S E 1190...A、S K 1203...12・13、S K 1204...25、S D 1300...18、黄福土...44・45



図版40 第45次調査各遺構出土磁器 (1/7のみ実大)
 上段 S E 1201…8、S X 1208…6、S X 1210…5、S K 1217…9、下段はすべて茶褐土



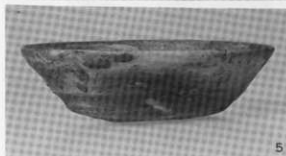
图版41 第45次調査黒礫土層出土磁器 (1/2、46…実大)



4



9



5



10



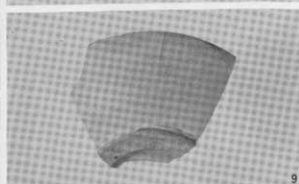
6



11



7



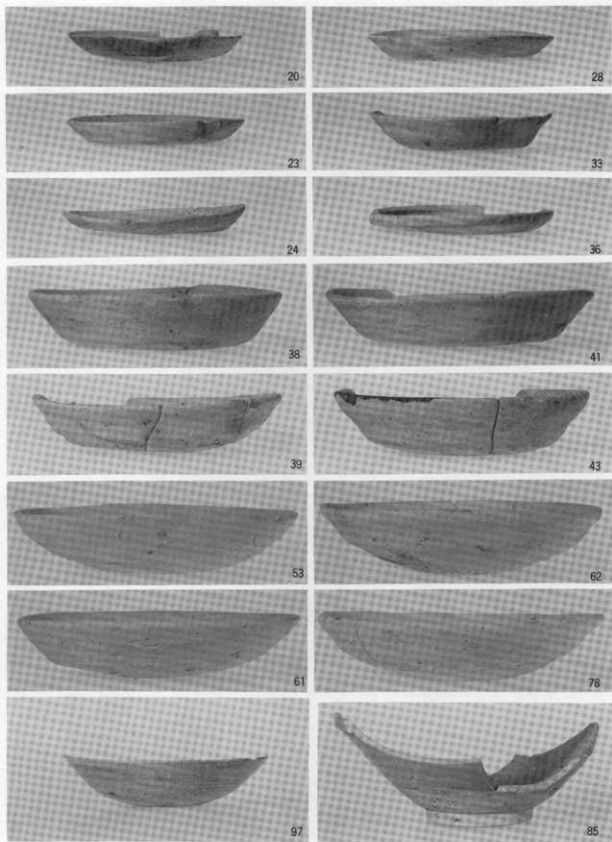
9



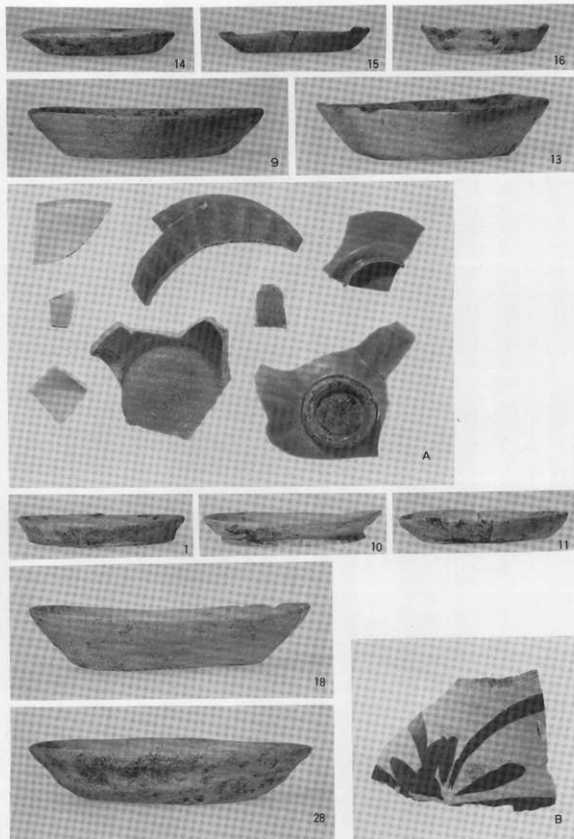
8



18



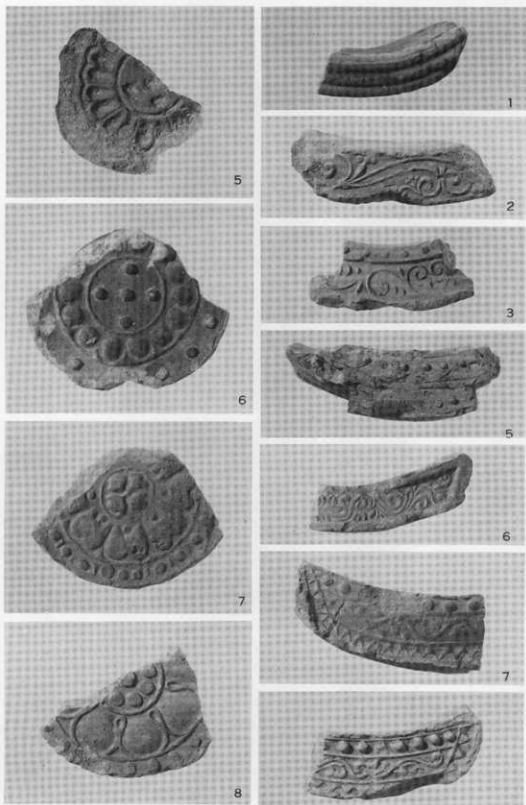
図版43 第46次調査 S D1330出土土器・磁器 (25はⅡ、他はすべてⅠ) (1/2)



図版44 第47次調査出土土器・磁器 (A・B以外)
 S K 1359...9~16・A S K 1360...1~28 落ち込み...B



図版45 第45次調査出土軒先瓦 I (上… $\frac{3}{8}$ 、下… $\frac{1}{8}$)
 上は S K 1280 出土の老司 I 式セット



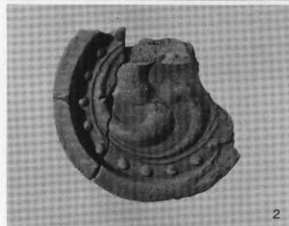
图版46 第45次調査出土軒先瓦Ⅱ (1/5)



1



5



2



6



3



7

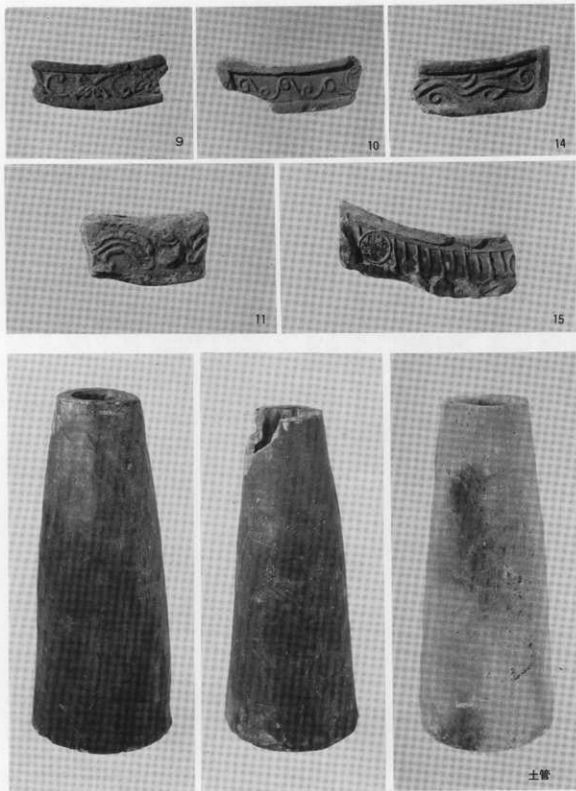


4



8

图版47 第45次調査出土軒先瓦Ⅲ (1/5)



図版48 第45次調査出土軒先瓦Ⅳ (1/5) および土管 (1/5)



1



5



2



6



3



8

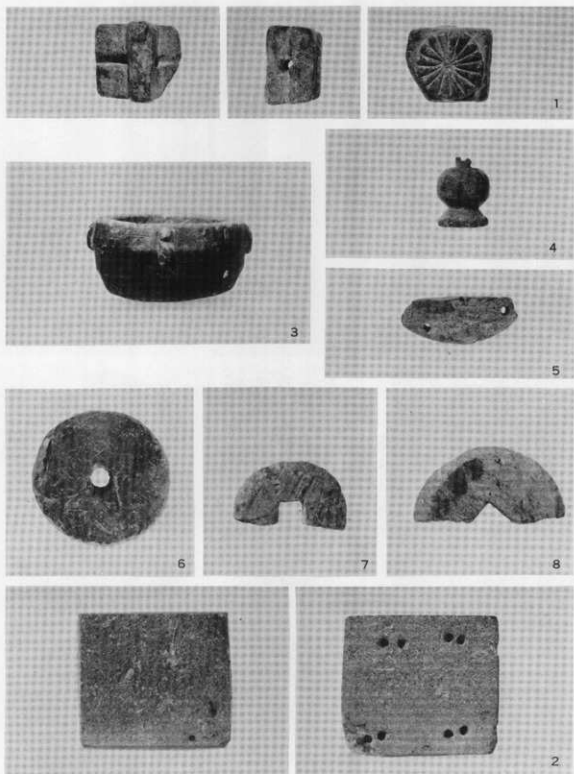


7

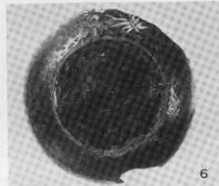
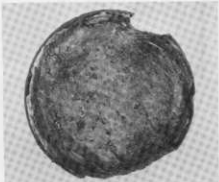
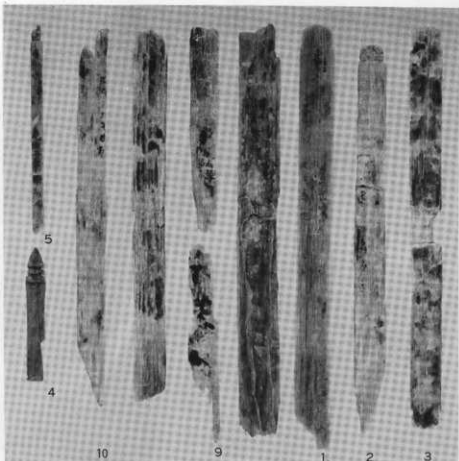
図版49 第49次調査出土軒先瓦 (1/4)



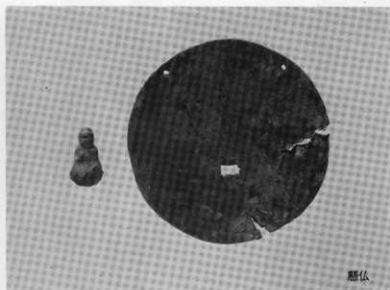
図版50 第45次調査出土硯 (1/4)



図版51 第45次調査出土各種石製品 (1/2、2のみ実大)



図版52 第45次調査出土木製品 (下は $\frac{1}{2}$) (上は赤外線写真)



図版53 第45次調査出土懸仏・台座・鍔型・埴塙・轆羽口 (5・7以外 $\frac{1}{2}$)

大 宰 府 史 跡

昭和52年度発掘調査概報

昭和53年3月

発 行 九州歴史資料館
筑紫野大学府和大学大宰府学大館立205

印 刷 和光印刷株式会社
福岡市博多区博多駅前1丁目18-18